



こころ

下

-先生と遺書-

夏目漱石



青空文庫





「……私はこの夏あなたから二、三度手紙を受け取りました。東京で相当の地位を得たいから宜しく頼むと書いてあったのは、たしか二度目に手に入つたものと記憶しています。私はそれを読んだ時何とかしたいと思つたのです。少なくとも返事を上げなければ済まんとは考えたのです。しかし自白すると、私はあなたの依頼に対して、まるで努力をしなかつたのです。ご承知の通り、交際区域の狭いというよりも、世の中にたつた一人で暮しているといった方が適切なくらいの私には、そういう努力をあえてする余地が全くないのです。しかしそれは問題ではありません。実をいうと、私はこの自分をどうすれば好いのかと思ひ煩つていたところなのです。このまま人間の中に取り残されたミイラのように存在して行こうか、それとも……その時分の私は「それとも」という言葉を心のうちで繰り返すたびにぞつとしました。馳足で絶壁の端まで来て、急に底の見えない谷を覗き込んだ人のように。私は卑怯でした。そうして多くの卑怯な人と同じ程度において煩悶したのです。遺憾ながら、その時の私には、あなたというものがほとんど存在していなかつたと

夏目漱石

いっても誇張ではありません。一步進めていうと、あなたの地位、あなたの糊口ここうの資し、そんなものは私にとってまるで無意味なものでした。どうでも構わなかったのです。私はそれどころの騒ぎでなかったのです。私は状差じようさしへあなたの手紙を差したなり、依然として腕組をして考え込んでいました。宅うちに相應の財産があるものが、何を苦しんで、卒業するかしないのに、地位地位といって藻掻もがき廻まわるのか。私はむしろ苦々にがにがしい気分で、遠くにいるあなたにこんな一瞥いちべつを与えただけでした。私は返事を上げなければ済まないあなたに対して、言訳いわわけのためにこんな事を打ち明けるのです。あなたを怒らすためにわざと無稽ぶしつけな言葉を弄ろうするのでありません。私の本意は後あとをご覧になればよく解わかる事と信じます。とにかく私は何とか挨拶あいさつすべきところを黙っていたのですから、私はこの怠慢の罪をあなたの前に謝したいと思います。

その後私ごはあなたに電報を打ちました。有体ありていにいえば、あの時私はちよつとあなたに会いたかったのです。それからあなたの希望通り私の過去をあなたのために物語りたかったのです。あなたは返電を掛かけて、今東京へは出られないと断つて来ましたが、私は失望して永らくあの電報を眺ながめていました。あなたも電報だけでは気が済まなかったとみえて、

夏目漱石

また後から長い手紙を寄こしてくれたので、あなたの出京しゅつぎょうできない事情がよく解わかりました。私はあなたを失礼な男だとも何とも思う訳がありません。あなたの大事なお父さんの病気をそっち退のけにして、何であなたが宅うちを空あけられるのですか。そのお父さんの生死しやうじを忘れているような私の態度こそ不都合です。——私は實際あの電報を打つ時に、あなたのお父さんの事を忘れていたのです。そのくせあなたが東京にいる頃ころには、難症なんしやうだからよく注意しなくてはいけないと、あれほど忠告したのは私ですのに。私はこういう矛盾な人間なのです。あるいは私の脳髓のうずいよりも、私の過去が私を圧迫する結果こんな矛盾な人間に私を変化させるのかも知れません。私はこの点においても充分私の我がを認めています。あなたに許してもらわなくてはなりません。

あなたの手紙、——あなたから来た最後の手紙——を読んだ時、私は悪い事をしたと思いました。それでその意味の返事を出そうかと考えて、筆を執とりかけましたが、一行も書かずに已やめました。どうせ書くなら、この手紙を書いて上げたかったから、そうしてこの手紙を書くにはまだ時機が少し早過ぎたから、已めにしたのです。私がただ来るに及ばないという簡単な電報を再び打ったのは、それがためです。

二

「私はそれからこの手紙を書き出しました。平生筆を持ちつけない私には、自分の思うように、事件なり思想なりが運ばないのが重い苦痛でした。私はもう少しで、あなたに対する私のこの義務を放擲するところでした。しかしいくら止そうと思つて筆を擱いても、何にもなりませんでした。私は一時間経たないうちにまた書きたくなりました。あなたから見たら、これが義務の遂行を重んずる私の性格のように思われるかも知れません。私もそれは否みません。私はあなたの知っている通り、ほとんど世間と交渉のない孤独な人間です。すから、義務というほどの義務は、自分の左右前後を見廻しても、どの方角にも根を張つておりません。故意か自然か、私はそれができるだけ切り詰めた生活をしていたのです。けれども私は義務に冷淡だからこうなつたのではありません。むしろ鋭敏過ぎて刺戟に堪えるだけの精力がないから、ご覧のように消極的な月日を送る事になつたのです。だから一旦約束した以上、それを果たさないのは、大変厭な心持です。私はあなたに対してこの厭な心持を避けるためにでも、擱いた筆をまた取り上げなければならぬのです。」

その上私は書きたいのです。義務は別として私の過去を書きたいのです。私の過去は私だけの経験だから、私だけの所有といつても差支さしかえないでしょう。それを人に与えないで死ぬのは、惜しいともいわれるでしょう。私にも多少そんな心持があります。ただし受け入れる事のできない人に与えるくらいなら、私はむしろ私の経験を私の生命いのちと共に葬ほうむった方が好いいと思います。実際ここにあなたという一人の男が存在いしていないならば、私の過去はついに私の過去で、間接にも他人の知識にはならないで済んだでしょう。私は何千万といふ日本人のうちで、ただあなただけに、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目まじめだから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいといったから。

私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げかけて上げます。しかし恐れてはいけません。暗いものを凝じつと見詰めて、その中からあなたの参考になるものをお攫つかみなさい。私の暗いというのは、固もとより倫理的に暗いのです。私は倫理的に生れた男です。また倫理的に育てられた男です。その倫理上の考えは、今の若い人と大分違だいぶんつたところがあるかも知れません。しかしどう間違つても、私自身のものです。間に合あひに借りた損料そんりょうぎ着ではあ

りません。だからこれから発達しようというあなたには幾分か参考になるだろうと思うのです。

あなたは現代の思想問題について、よく私に議論を向けた事を記憶しているでしょう。私のそれに対する態度もよく解^{わか}っているでしょう。私はあなたの意見を輕蔑^{けいべつ}までしなかつたけれども、決して尊敬を払い得^うる程度にはなれなかつた。あなたの考えには何らの背景もなかつたし、あなたは自分の過去をもつには余りに若過ぎたからです。私は時々笑つた。あなたは物足りなそうな顔をちよいちよい私に見せた。その極^{きよく}あなたは私の過去を繪卷物^{えまきもの}のように、あなたの前に展開してくれと逼^{せま}つた。私はその時心のうちで、始めてあなたを尊敬した。あなたが無遠慮^{ぶえんりよ}に私の腹の中から、或^ある生きたものを捕^{つか}まえようという決心を見せたからです。私の心臓を立ち割^わつて、温かく流れる血潮^{けつしほ}を啜^{すす}ろうとしたからです。その時私はまだ生きていた。死ぬのが厭^{いや}であつた。それで他日^{たじつ}を約して、あなたの要求を斥^{しりぞ}けてしまった。私は今自分で自分の心臓を破つて、その血をあなたの顔に浴^あびせかけようとしているのです。私の鼓動^{こどう}が停^{とま}つた時、あなたの胸に新しい命が宿る事ができるなら満足です。

「私が両親を亡くしたのは、まだ私の廿歳にならない時分でした。いつか妻があなたに話していたようにも記憶していますが、二人は同じ病気で死んだのです。しかも妻があなたに不審を起させた通り、ほとんど同時とっていいくらいに、前後して死んだのです。実をいうと、父の病気は恐るべき腸窒扶斯でした。それが傍にいて看護をした母に伝染したのです。

私は二人の間にできたたった一人の男の子でした。宅には相当の財産があつたので、むしろ鷹揚に育てられました。私は自分の過去を顧みて、あの時両親が死なずにいてくれたなら、少なくとも父か母かどつちか、片方で好いから生きていてくれたなら、私はあの鷹揚な気分を今まで持ち続ける事ができたらうにと思います。

私は二人の後に茫然として取り残されました。私には知識もなく、経験もなく、また分別もありませんでした。父の死ぬ時、母は傍にいる事ができませんでした。母の死ぬ時、母には父の死んだ事さえまだ知らせてなかったのです。母はそれを覺っていたか、または

夏目漱石

傍^{はた}のものというごとく、實際父は回復期に向いつつあるものと信じていたか、それは分りません。母はただ叔父^{おじ}に万事を頼んでいました。そこに居^い合^あわせた私を指さすようにして、「この子をどうぞ何分^{なにぶん}」といいました。私はその前から両親の許可を得て、東京へ出るはずになっていましたので、母はそれもついでにいうつもりでしたのです。それで「東京へ」とだけ付け加えましたら、叔父がすぐ後^{あと}を引き取つて、「よろしい決して心配しないがいい」と答えました。母は強い熱に堪^うえ得る體質の女なんでしたらうか、叔父は「確^{しつ}かりしたものだ」といって、私に向つて母の事を褒^ほめていました。しかしこれがはたして母の遺言であつたのかどうか、今考えると分らないのです。母は無論父の雇^{かか}つた病氣の恐るべき名前を知つていたのです。そうして、自分がそれに伝染していた事も承知していたのです。けれども自分はきつとこの病氣で命を取られるとまで信じていたかどうか、そこになると疑う余地はまだいくらでもあるだろうと思われるのです。その上熱の高い時に出る母の言葉は、いかにそれが筋道の通つた明らかなものにせよ、一向^{いつ}記憶となつて母の頭に影さえ残していない事がしばしばあつたのです。だから……しかしそんな事は問題ではありません。ただこういう風^{ふう}に物を解きほどこいてみたり、またぐるぐる廻^{まわ}して眺^{なが}めたりする癖^{くせ}

は、もうその時分から、私にはちゃんと備わっていたのです。それはあなたにも始めからお断わりしておかなければならないと思いますが、その実例としては当面の問題に大した関係のないこんな記述が、かえって役に立ちはしないかと考えます。あなたの方でもまあそのつもりで読んでください。この性分が倫理的に個人の行為やら動作の上に及んで、私は後來ますます他の徳義心を疑うようになったのだろうと思うのです。それが私の煩悶や苦悩に向って、積極的に大きな力を添えているのは慥かですから覚えていて下さい。

話が本筋をはずれると、分り悪くなりますからまたあとへ引き返しましょう。これでも私はこの長い手紙を書くのに、私と同じ地位に置かれた他の人と比べたら、あるいは多少落ち付いていやしいかと思つてゐるのです。世の中が眠ると聞こえだすあの電車の響きもう途絶えました。雨戸の外にはいつの間にか憐れな虫の音が、露の秋をまた忍びやかに思ひ出させるような調子で微かに鳴いています。何も知らない妻は次の室で無邪気にすやすや寝入っています。私が筆を執ると、一字一劃ができあがりつつペンの先で鳴つています。私はむしろ落ち付いた気分で紙に向つてゐるのです。不馴れのためにペンが横へ外れるかも知れませんが、頭が悩乱して筆がしどろに走るのではないように思います。

四

「とにかくたった一人取り残された私は、母のいい付け通り、この叔父おじを頼るより外ほかに途みちはなかつたのです。叔父はまた一切いっさいを引き受けて凡すべての世話をしてくれました。そうして私を私の希望する東京へ出られるように取り計らってくれました。

私は東京へ来て高等学校へはいりました。その時の高等学校の生徒は今よりもよほど殺伐さつぱつで粗野でした。私の知ったものに、夜中よる職人と喧嘩けんかをして、相手の頭げへ下駄げたで傷を負わせたのがありました。それが酒を飲んだ揚句あげくの事なので、夢中に擲なり合いをしている間に、学校の制帽をとうとう向うのものに取られてしまったのです。ところがその帽子の裏には当人の名前がちゃんと、菱形ひしがたの白いきれの上に書いてあったのです。それで事が面倒になって、その男はもう少しで警察から学校へ照会されるところでした。しかし友達が色々いろと骨を折って、ついに表沙汰おもてぎたにせずに済むようにしてやりました。こんな乱暴な行為を、上品な今の空気のなかに育ったあなた方に聞かせたら、定めて馬鹿馬鹿ばかばかしい感じを起すでしょう。私も実際馬鹿馬鹿しく思います。しかし彼らは今の学生にない一種質朴しつぱくな点

夏目漱石

をその代りにもつていたのです。当時私の月々叔父から貰^{もら}つていた金は、あなたが今、お父さんから送つてもらかう学資に比べると遙^{はる}かに少ないものでした。（無論物価も違いました。）それでいて私は少しの不足も感じませんでした。のみならず数ある同級生のうちで、経済の点にかけては、決して人を羨^{うらや}ましがる憐^{あわ}れな境遇にいた訳ではないのです。今から回顧すると、むしろ人に羨^{うらや}ましがられる方だったでしょう。というのは、私は月々極^{きま}つた送金の外に、書籍費、（私はその時分から書物を買う事が好きでした）、および臨時の費用を、よく叔父から請求して、ずんずんそれを自分の思うように消費する事ができたのですから。

何も知らない私は、叔父^{おじ}を信じていたばかりでなく、常に感謝の心をもつて、叔父をありがたいもののように尊敬していました。叔父は事業家でした。県会議員にもなりました。その関係からでもありましょう、政党にも縁故があつたように記憶しています。父の実の弟ですけれども、そういう点で、性格からいうと父とはまるで違つた方へ向いて発達したようにも見えます。父は先祖から譲られた遺産を大事に守つて行く篤^{とく}実^{じつ}一方^{いつぽう}の男でした。楽しみに、茶だの花だのをやりました。それから詩集などを読む事も好きでした。

書画骨董しやがこつとうといった風のふうのものにも、多くの趣味をもっている様子でした。家は田舎いなかにありましてけれども、二里りばかり隔へつた市し、——その市には叔父が住んでいたので、——その市から時々道具屋が懸物かけものだの、香炉こうろだのを持って、わざわざ父に見せに來ました。父は一口ひとくちにいうと、まあマン・オフ・ミーンズとでも評ひらしたら好いいのでしょう。比較的上品な嗜好しこうをもった田舎紳士けんしかくだったので。だから氣性きしょうからいうと、闊達かつたつな叔父とはよほどの懸隔けんかくがありました。それでいて二人はまた妙に仲が好よかつたのです。父はよく叔父を評ひらして、自分よりも遙はるかに働はたらきのある頼たのもしい人ひとのようについていました。自分のように、親から財産を譲られたものは、どうしても固有こいうの材幹さいかんが鈍にぶる、つまり世の中と闘たたかう必要がないからいけないのだともいつていました。この言葉は母も聞きました。私も聞きました。父はむしろ私の心得になるつもりで、それをいつたらしく思われます。「お前もよく覚えてゐるが好い」と父はその時わざわざ私の顔を見たのです。だから私はまだそれを忘れずにいます。このくらい私の父から信用されたり、褒めほめられたりしていた叔父を、私がどうして疑うう事ができるでしょう。私にはただでさえ誇りになるべき叔父でした。父や母が亡く

夏目漱石
な
つ
て、
万
事
そ
の
人
の
世
話
に
な
ら
な
け
れ
ば
な
ら
な
い
私
に
は、
も
う
単
なる
誇
り
で
は
な
か
つ
た
の
で
す。
私
の
存
在
に
必
要
な
人
間
に
な
っ
て
い
た
の
で
す。

五

「私が夏休みを利用して始めて国へ帰った時、両親の死に断えた私の住居^{すまい}には、新しい主人として、叔父夫婦が入れ代って住んでいました。これは私が東京へ出る前からの約束でした。たった一人取り残された私が家にいない以上、そうでもするより外^{ほか}に仕方がなかったのです。

叔父はその頃市^{ころ}にある色々な会社に関係していたようです。業務の都合からいえば、今までの居宅^{きやたく}に寝起^{ねお}きする方が、二里^りも隔^{へだた}った私の家に移るより遙かに便利だといって笑いました。これは私の父母が亡くなった後^{あと}、どう邸^{やしき}を始末して、私が東京へ出るかという相談の時、叔父の口を洩^もれた言葉であります。私の家は旧^{ふる}い歴史をもっているのです、少しはその界限^{かいがい}で人に知られていました。あなたの郷里でも同じ事だろうと思いますが、田舎^{ゆいしよ}では由緒^{ゆいしよ}のある家を、相続人があるのに壊^{こわ}したり売ったりするのは大事件です。今の私ならそのくらいの事は何とも思いませんが、その頃はまだ子供でしたから、東京へは出たし、家はそのままにして置かなければならず、はなはだ所置^{しよぢ}に苦しんだのです。

夏目漱石

叔父^{おじ}は仕方なしに私の空家^{あきや}へはいる事を承諾してくれました。しかし市^しの方にある住居^{すまい}もそのままにしておいて、両方の間を往^いったり来たりする便宜を与えてもらわなければ困るといいました。私に固^{もと}より異議のありようはありますがありません。私はどんな条件でも東京へ出られれば好^いいくらいに考えていたのです。

子供らしい私は、故郷^{ふるさと}を離れても、まだ心の眼で、懐かしげに故郷の家を望んでいました。固よりそこにはまだ自分の帰るべき家があるという旅人^{たびびと}の心で望んでいたのです。休みが来れば帰らなくてはならないという気分は、いくら東京を恋しがって出て来た私にも、力強くあつたのです。私は熱心に勉強し、愉快に遊んだ後^{あと}、休みには帰れると思うその故郷の家をよく夢に見ました。

私の留守の間、叔父はどんな風^{ふう}に両方の間を往^ゆき来していたか知りません。私の着いた時は、家族のものが、みんな一つ家^{いえ}の内に集まっていました。学校へ出る子供などは平生^{へいぜい}おそらく市の方^しの方にいたのでしょうが、これも休暇のために田舎^{いなか}へ遊び半分といった格^{かく}で引き取られていました。

みんな私の顔を見て喜びました。私はまた父や母のいた時より、かえって賑やかで陽気になった家の様子を見て嬉しがりました。叔父はもと私の部屋になっていた一間を占領している一番目の男の子を追い出して、私をそこへ入れました。座敷の数も少くないのだから、私はほかの部屋で構わないと辞退したのですけれども、叔父はお前の宅だからといって、聞きませんでした。

私は折々亡くなった父や母の事を思い出す外に、何の不愉快もなく、その一夏を叔父の家族と共に過ごして、また東京へ帰ったのです。ただ一つその夏の出来事として、私の心にむしろ薄暗い影を投げたのは、叔父夫婦が口を揃えて、まだ高等学校へ入ったばかりの私に結婚を勧める事でした。それは前後で丁度三、四回も繰り返されたでしょう。私も始めはただその突然なのに驚いただけでした。二度目には判然断りました。三度目にはこっちからとうとうその理由を反問しなければならなくなりました。彼らの主意は単簡でした。早く嫁を貰ってこの家へ帰って来て、亡くなった父の後を相続しろというだけなのです。家は休暇になって帰りさえすれば、それでいいものと私は考えていました。父の後を相続する、それには嫁が必要だから貰う、両方とも理屈としては一通り聞こえます。ことに田

夏目漱石

舎の事情を知っている私には、よく解わかります。私も絶対にそれを嫌ってはいなかったの
しょう。しかし東京へ修業に出たばかりの私には、それが遠眼鏡とおめがねで物を見るように、遥はるか
先の距離に望まれるだけでした。私は叔父の希望に承諾を与えないで、ついにまた私の家
を去りました。

六

「私は縁談の事をそれなり忘れてしまいました。私の周囲を取り捲いている青年の顔を見ると、世帯染みたものは一人もいません。みんな自由です、そうして悉く単独らしく思われたのです。こういう気楽な人の中にも、裏面にはいり込んだら、あるいは家庭の事情に余儀なくされて、すでに妻を迎えていたものがあつたかも知れませんが、子供らしい私はそこに気が付きませんでした。それからそういう特別の境遇に置かれた人の方でも、四辺に気兼をして、なるべくは書生に縁の遠いそんな内輪の話はしないように慎んでいたでしょう。後から考えると、私自身がすでにその組だつたのですが、私はそれさえ分らずに、ただ子供らしく愉快に修学の道を歩いて行きました。

学年の終りに、私はまた行李を絡げて、親の墓のある田舎へ帰つて来ました。そうして去年と同じように、父母のいたわが家の中で、また叔父夫婦とその子供の変らない顔を見ました。私は再びそこで故郷の匂いを嗅ぎました。その匂いは私に取つて依然として懐か

夏目漱石

しいものでありました。一学年の単調を破る変化としても有難いものに違いなかったのです。

しかしこの自分を育て上げたと同じような匂いの中で、私はまた突然結婚問題を叔父から鼻の先へ突き付けられました。叔父のいう所は、去年の勧誘を再び繰り返したのみです。理由も去年と同じでした。ただこの前勧められた時には、何らの目的物がなかったのに、今度はちゃんと肝心かんじんの当人を捕つかまえていたので、私はなお困らせられたのです。その当人というのは叔父の娘すなわち私の従妹いとこに当る女でした。その女を貰もらってくれば、お互いのために便宜である、父も存生中ぞんしょうちゅうそんな話を話していた、と叔父がいうのです。私もそうすれば便宜だとは思いました。父が叔父にそういう風ふうな話をしたというのもあり得うべき事と考えました。しかしそれは私が叔父にいわれて、始めて気が付いたので、いわれない前から、覚さとつていた事柄ではないのです。だから私は驚きました。驚いたけれども、叔父の希望に無理のないところも、それがたによく解わかりました。私は迂闊うかつなのでしようか。あるいはそうなのかも知れませんが、おそらくその従妹に無頓着むとんじやくであつたのが、おもな原因げんいんになつてゐるのでしよう。私は小供こどものうちから市しにいる叔父の家へ始終遊びに行きました。

ただ行くばかりでなく、よくそこに泊りました。そうしてこの従妹とはその時分から親しかったのです。あなたもご承知でしょう、兄妹の間に恋の成立した例のないのを。私はこの公認された事実を勝手に布衍ふえんしているかも知れないが、始終接触して親しくなり過ぎた男女の間には、恋に必要な刺戟しげきの起る清新な感じが失われてしまうように考えています。香をかき得るうのは、香を焚たき出した瞬間に限るごとく、酒を味わうのは、酒を飲み始めた刹那せつなにあるごとく、恋の衝動にもこういう際どい一点が、時間の上に存在しているとしか思われないのです。一度平気でそこを通り抜けたら、馴なれば馴れるほど、親しみが増すだけで、恋の神経はだんだん麻痺まひして来るだけです。私はどう考え直しても、この従妹いとこを妻にする気にはなれませんでした。

叔父おじはもし私が主張するなら、私の卒業まで結婚を延ばしてもいいといいました。けれども善は急げことわざという諺もあるから、できるなら今のうちに祝言しゅうげんの盃さかずきだけは済ませておきたいともいいました。当人に望みのない私にはどっちにしたって同じ事です。私はまた断りました。叔父は厭いやな顔をしました。従妹は泣きました。私に添われないから悲しいのではありません。結婚の申し込みを拒絶されたのが、女として辛つらかったからです。私が従妹を

石漱目夏

愛していないごとく、従妹も私を愛していない事は、私によく知れていました。私はまた東京へ出ました。

七

「私が三度目に帰国したのは、それからまた一年経った夏の取付でした。私はいつでも学年試験の済むのを待ちかねて東京を逃げました。私には故郷がそれほど懐かしかったからです。あなたにも覚えがあるでしょう、生れた所は空気の色が違います、土地の匂いも格別です、父や母の記憶も濃かに漂っています。一年のうちで、七、八の二月をその中に包まれて、穴に入った蛇のよう^{へび}に凝^{じつ}としているのは、私に取って何よりも温かい好^い心持だったのです。

単純な私は従妹との結婚問題について、さほど頭を痛める必要がないと思っていました。厭なものは断る、断ってさえしまえば後^{あと}には何も残らない、私はこう信じていたのです。だから叔父の希望通りに意志を曲げなかったにもかかわらず、私はむしろ平気でした。過去一年の間いまだかつてそんな事に屈托^{くつたく}した覚えもなく、相変らずの元気で国へ帰ったのです。

夏目漱石

ところが帰って見ると叔父の態度が違っています。元のように好い顔をして私を自分の懐に抱こうとしません。それでも鷹揚に育った私は、帰って四、五日の間は気が付かずにいました。ただ何かの機会にふと変に思い出したのです。すると妙なのは、叔父ばかりではないのです。叔母も妙なのです。従妹も妙なのです。中学校を出て、これから東京の高等商業へはいるつもりだといって、手紙でその様子を聞き合せたりした叔父の男の子まで妙なのです。

私の性分として考えずにはいられなくなりました。どうして私の心持がこう変ったのだろう。いやどうして向うがこう変ったのだろう。私は突然死んだ父や母が、鈍い私の眼を洗って、急に世の中が判然見えるようにしてくれたのではないかと疑いました。私は父や母がこの世にいなかった後でも、いた時と同じように私を愛してくれるものと、どこか心の奥で信じていたのです。もつともその頃でも私は決して理に暗い質ではありませんでした。しかし先祖から譲られた迷信の塊りも、強い力で私の血の中に潜んでいたのです。今でも潜んでいるでしょう。

夏目漱石

私はたった一人山へ行つて、父母の墓の前に跪ひざまずきました。半なかばは哀悼あいとうの意味、半は感謝の心持で跪いたのです。そうして私の未来の幸福が、この冷たい石の下に横たわる彼らの手にまだ握られてでもいるような気分で、私の運命を守るべく彼らに祈りました。あなたは笑うかもしれない。私も笑われても仕方がないと思います。しかし私はそうした人間だったのです。

私の世界は掌たなこころを翻すように変りました。もつともこれは私に取つて始めての経験ではなかったのです。私が十六、七の時でしたらう、始めて世の中に美しいものがあるという事実を発見した時には、一度にはつと驚きました。何遍なんべんも自分の眼を疑うたぐつて、何遍も自分の眼を擦こすりました。そうして心の中でああ美しいと叫びました。十六、七といえば、男でも女でも、俗にいう色気いろけの付く頃です。色気の付いた私は世の中にある美しいものの代表者として、始めて女を見る事ができたのです。今までその存在に少しも気の付かなかつた異性に対して、盲目めくらの眼が忽たちまち開あいたのです。それ以来私の天地は全く新しいものとなりました。

夏目漱石

私が叔父^{おじ}の態度に心づいたのも、全くこれと同じなんでしょう。俄然^{がぜん}として心づいたのです。何の予感も準備もなく、不意に来たのです。不意に彼と彼の家族が、今までとはまるで別物のように私の眼に映ったのです。私は驚きました。そうしてこのままにしておいては、自分の行先^{ゆくさき}がどうなるか分らないという気になりました。

八

「私は今まで叔父^{まか}任せにしておいた家の財産について、詳しい知識を得なければ、死んだ父母^{ちちはは}に對して済まないという氣を起したのです。叔父は忙しい身体^{からだ}だと自称するごとく、毎晩同じ所に寢泊^{ねとま}りはしていませんでした。二日家^{うち}へ帰ると三日は市^しの方で暮らすといった風^{ふう}に、兩方の間^まを往來^{ゆきき}して、その日その日を落ち付きのない顔で過^{すご}していました。そうして忙しいという言葉^{ことば}を口癖^{くちくせ}のように使いました。何の疑いも起らない時は、私も實際に忙しいのだろうと思^{おも}っていたのです。それから、忙しがらなくては当世流^{とうせりゅう}でないのだろうと、皮肉にも解釈^{かいさく}していたのです。けれども財産の事について、時間の掛^かかる話をしようという目的^{もく}ができた眼^めで、この忙しがる様子を見ると、それが単に私を避ける口実^{くじ}としてか受け取れなくなつて來たのです。私は容易^{ゆい}に叔父^{おじ}を捕^{とら}まえる機会^{きかい}を得ませんでした。

私は叔父^{おじ}が市^しの方に妾^{めかけ}をもっているという噂^{うわさ}を聞きました。私はその噂^{うわさ}を昔中学の同級生^{どうきゅうせい}であつたある友達^{ともだち}から聞いたのです。妾^{めかけ}を置くぐらいの事は、この叔父^{おじ}として少しも怪^{あや}しむに足らないのですが、父の生きているうちに、そんな評判^{へいばん}を耳^{みみ}に入れた覚え^{おぼ}えのない私

夏目漱石

は驚きました。友達はその外ほかにも色々叔父についての噂を語って聞かせました。一時事業で失敗しかかっていたように他ひとから思われていたのに、この二、三年来また急に盛り返して来たというのも、その一つでした。しかも私の疑惑を強く染めつけたものの一つでした。私はとうとう叔父おじと談判を開きました。談判というのは少し不穩ふおんとう当かも知れませんが、話の成行なりゆきからいうと、そんな言葉で形容するより外に途みちのないところへ、自然の調子が落ちて来たのです。叔父はどこまでも私を子供扱いにしようとします。私はまた始めから猜疑さいぎの眼で叔父に対しています。穏やかに解決のつくはずはなかったのです。

遺憾いかんながら私は今その談判の顛末てんまつを詳しくここに書く事のできないほど先を急いでいます。実をいうと、私はこれより以上に、もつと大事なものを控えているのです。私のペンには早くからそこへ辿たどりつきたがっているのを、漸やっとの事で抑えつけているくらいです。あなたに会って静かに話す機会を永久に失った私は、筆を執とる術すべに慣れないばかりでなく、貴たつとい時間を惜むおしという意味からして、書きたい事も省かなければなりません。

あなたはまだ覚えているでしょう、私がいつかあなたに、造り付けの悪人が世の中にいるものではないといった事を。多くの善人がいざという場合に突然悪人になるのだから油

夏目漱石

断してはいけないといった事を。あの時あなたは私に昂奮こうふんしていると注意してくれました。そうしてどんな場合に、善人が悪人に変化するのかと尋ねました。私がただ一口金ひとくちと答えた時、あなたは不満な顔をしました。私はあなたの不満な顔をよく記憶しています。私は今あなたの前に打ち明けるが、私はあの時この叔父の事を考えていたのです。普通のが金を見て急に悪人になる例として、世の中に信用するに足るものが存在し得ない例として、憎悪ぞうおと共に私はこの叔父を考えていたのです。私の答えは、思想界の奥へ突き進んで行こうとするあなたに取って物足りなかつたかも知れません、陳腐ちんぷだつたかも知れません。けれども私にはあれが生きた答えでした。現に私は昂奮こうふんしていたではありませんか。私は冷やかな頭ひやで新しい事を口にするよりも、熱した舌で平凡な説を述べる方が生きていると信じています。血の力で体たいが動くからです。言葉が空気に波動を伝えるばかりでなく、もつと強い物にもつと強く働き掛ける事ができるからです。

九

「一口ひとくちでいうと、叔父は私の財産を胡魔化ごまかしたのです。事は私が東京へ出ている三年の間に容易たやすく行われたのです。すべてを叔父任せまかにして平気でいた私は、世間的に言えば本当の馬鹿でした。世間的以上の見地から評すれば、あるいは純なる尊たつとい男とでもいえましようか。私はその時の己おのれを顧みて、なぜもつと人が悪く生れて来なかつたかと思うと、正直過ぎた自分が口惜くやしくって堪たまりません。しかしまたどうかして、もう一度ああいう生れたままの姿に立ち帰って生きて見たいという心持も起るのです。記憶して下さい、あなた知っている私は塵ちりに汚れた後の私あとです。きたなくなつた年数の多いものを先輩と呼ぶならば、私はたしかにあなたより先輩でしょう。

もし私が叔父の希望通り叔父の娘と結婚したならば、その結果は物質的に私に取つて有利なものでしたろうか。これは考えるまでもない事と思います。叔父おじは策略で娘を私に押し付けようとしたのです。好意的に両家の便宜を計るというよりも、ずっと下卑げびた利害心に駆られて、結婚問題を私に向けたのです。私は従妹いとこを愛していませんだけで、嫌つてはい

なかったのですが、後から考えてみると、それを断つたのが私には多少の愉快になると思います。胡魔化されるのはどっちにしても同じでしょうけれども、載せられ方からいえば、従妹を貰わない方が、向うの思い通りにならないという点から見ても、少しは私の我が通つた事になるのですから。しかしそれはほとんど問題とするに足りない些細な事柄です。これに関係のないあなたにいわせたら、さぞ馬鹿氣た意地に見えるでしょう。

私と叔父の間に他の親戚のものはいりました。その親戚のものも私はまるで信用していませんでした。信用しないばかりでなく、むしろ敵視していました。私は叔父が私を欺いたと覺ると共に、他のものも必ず自分を欺くに違いないと思ひ詰めました。父があれだけ賞め抜いていた叔父ですらこうだから、他のものはというのが私の論理でした。

それでも彼らは私のために、私の所有にかかる一切のものを纏めてくれました。それは金額に見積ると、私の予期より遙かに少ないものでした。私としては黙つてそれを受け取るか、でなければ叔父を相手取つて公沙汰にするか、二つの方法しかなかったのです。私は憤りました。また迷いました。訴訟にすると落着までに長い時間のかかる事も恐れしました。私は修業中のからだですから、学生として大切な時間を奪われるのは非常の苦痛だと

夏目漱石

も考えました。私は思案の結果、市におる中学の旧友に頼んで、私の受け取ったものを、すべて金の形かたちに変えようと思いました。旧友は止よめた方が得だといって忠告してくれましたが、私は聞きませんでした。私は永く故郷こきやうを離れる決心をその時に起したのです。叔父の顔を見まいと心のうちで誓ったのです。

私は国を立つ前に、また父と母の墓へ参りました。私はそれぎりその墓を見た事がありません。もう永久に見る機会も来ないでしょう。

私の旧友は私の言葉通りに取り計らってくれました。もつともそれは私が東京へ着いてからよほど経たった後のちの事です。田舎いなかで畠地はたちなどを売ろうとしたって容易には売れませんし、いざとなると足元を見て踏み倒される恐れがあるので、私の受け取った金額は、時価に比べるとよほど少ないものでした。自白すると、私の財産は自分ふところが懐ふところにして家を出た若干の公債と、後あとからこの友人に送ってもらった金だけなのです。親の遺産としては固もとより非常に減っていたに相違ありません。しかも私が積極的に減らしたのでないから、なお心持が悪かったのです。けれども学生として生活するにはそれで充分以上でした。実をいうと私

石漱目夏

はそれから出る利子の半分も使えませんでした。この余裕ある私の学生生活が私を思いも寄らない境遇に陥し入れたのです。おと

十

「金に不自由のない私は、騒々しい下宿を出て、新しく一戸を構えてみようかという気になったのです。しかしそれには世帯道具を買う面倒もありますし、世話をしてくれる婆さんの必要も起りますし、その婆さんがまた正直でなければ困るし、宅を留守にしても大丈夫なものでなければ心配だし、といった訳で、ちよくらちよいと実行する事は覚束なく見えたのです。ある日私はまあ宅だけでも探してみようかというそぞろ心から、散歩がてらに本郷台を西へ下りて小石川の坂を真直に伝通院の方へ上がりました。電車の通路になつてから、あそこいらの様子がまるで違つてしまいました、その頃は左手が砲兵工廠の土塀で、右は原とも丘ともつかない空地に草が一面に生えていたものです。私はその草の中に立つて、何心なく向うの崖を眺めました。今でも悪い景色ではありませんが、その頃はまたずつとあの西側の趣が違つていました。見渡す限り緑が一面に深く茂っているだけでも、神経が休まります。私はふとここいらに適当な宅はないだろうかと思ひました。それで直ぐ草原を横切つて、細い通りを北の方へ進んで行きました。いまだに好い町になり

夏目漱石

切れないで、がたびししているあの辺の家並は、その時分の事ですからずいぶん汚らしいものでした。私は露次を抜けたり、横丁を曲ったり、ぐるぐる歩き廻りました。しまいに駄菓子屋の上さんに、ここいらに小ぢんまりした貸家はないかと尋ねてみました。上さんは「そうですね」といつて、少時首をかしげていましたが、「かし家はちよいと……」と全く思い当たらない風でした。私は望のないものと諦らめて帰り掛けました。すると上さんがまた、「素人下宿じゃいけませんか」と聞くのです。私はちよつと気が変りました。静かな素人屋に一人で下宿しているのは、かえつて家を持つ面倒がなくつて結構だろうと考え出したのです。それからその駄菓子屋の店に腰を掛けて、上さんに詳しい事を教えてもらいました。

それはある軍人の家族、というよりもむしろ遺族、の住んでいる家でした。主人は何でも日清戦争の時か何かに死んだのだと上さんがいいました。一年ばかり前までは、市ヶ谷の士官学校の傍とかに住んでいたのだが、既などがあつて、邸が広過ぎるので、そこを売り払つて、ここへ引っ越して来たけれども、無人で淋しくつて困るから相当の人があつたら世話をしてくれと頼まれていたのだそうです。私は上さんから、その家には未亡人と一

夏目漱石

人娘と下女より外にいないのだという事を確かめました。私は閑静で至極好かろうと心の中うちに思いました。けれどもそんな家族のうちに、私のようなものが、突然行つたところで、素性すじょうの知れない書生さんという名称のもとに、すぐ拒絶されはしまいかという掛念けねんもありました。私は止よそうかとも考えました。しかし私は書生としてそんなに見苦しい服装なりはしていませんでした。それから大学の制帽かぶを被つていました。あなたは笑うでしょう、大学の制帽がどうしたんだといつて。けれどもその頃の大学生は今と違つて、大分世間に信用のあつたものです。私はその場合この四角な帽子に一種の自信を見出みいだしたくらいです。そうして駄菓子屋の上さんに教わつた通り、紹介も何もなしにその軍人の遺族の家うちを訪ねました。

私は未亡人びぼうじんに会つて来意らいいを告げました。未亡人は私の身元やら学校やら専門やらについて色々質問しました。そうしてこれなら大丈夫だといふところをどこかに握つたのでしよう、いつでも引つ越して来て差支さしつかえないといふ挨拶あいさつを即坐そくざに与えてくれました。未亡人は正しい人でした、また判然はつきりした人でした。私は軍人の妻君さいくんというものはみんなこんなもの

石漱目夏

かと思つて感服しました。
ろうと疑いもしました。

感服もしたが、驚きもしました。

この気性^{きしやう}でどこが淋^{さむ}しいのだ

十一

「私は早速その家へ引き移りました。私は最初来た時に未亡人と話をした座敷を借りたのです。そこは宅中で一番好い室でした。本郷辺に高等下宿といった風の家がぼつぼつ建てられた時分の事ですから、私は書生として占領し得る最も好い間の様子を心得ていました。私の新しく主人となつた室は、それらよりもずっと立派でした。移つた当座は、学生としての私には過ぎるくらいに思われたのです。

室の広さは八畳でした。床の横に違い棚があつて、縁と反対の側には一間の押入れが付いていました。窓は一つもなかつたのですが、その代り南向きの縁に明るい日がよく差ししました。

私は移つた日に、その室の床に活けられた花と、その横に立て懸けられた琴を見ました。どつちも私の氣に入りませんでした。私は詩や書や煎茶を嗜なむ父の傍で育つたので、唐めいた趣味を小供のうちからもつていました。そのためでもありますか、こういう艶めかしい装飾をいつの間にか輕蔑する癖が付いていたのです。

夏目漱石

私の父が存生中にあつめた道具類は、例の叔父のために滅茶滅茶にされてしまったのですが、それでも多少は残っていました。私は国を立つ時それを中学の旧友に預かってもらいました。それからその中で面白そうなものを四、五幅裸にして行李の底へ入れて来ました。私は移るや否や、それを取り出して床へ懸けて楽しむつもりでいたのです。ところが今いった琴と活花を見たので、急に勇氣がなくなつてしまいました。後から聞いて始めてこの花が私に対するご馳走に活けられたのだという事を知った時、私は心のうちで苦笑しました。もつとも琴は前からそこにあつたのですから、これは置き所がないため、やむをえずそのままに立て懸けてあつたのでしよう。

こんな話をする、自然その裏に若い女の影があなたの頭を掠めて通るでしょう。移つた私にも、移らない初めからそういう好奇心がすでに動いていたのです。こうした邪氣が予備的に私の自然を損なつたためか、または私がまだ人慣れなかつたためか、私は始めてそこのお嬢さんに会った時、へどもどした挨拶をしました。その代りお嬢さんの方でも赤い顔をしました。

私はそれまで未亡人^{びぼうじん}の風采^{ふうさい}や態度から推^おして、このお嬢さんのすべてを想像していたのです。しかしその想像はお嬢さん^{お嬢さん}に取つてあまり有利なものではありませんでした。軍人の妻君^{さいくん}だからあなのだろう、その妻君の娘だからこうだろうといった順序で、私の推測は段々延びて行きました。ところがその推測が、お嬢さんの顔を見た瞬間に、悉く打ち消されました。そうして私の頭の中へ今まで想像も及ばなかった異性の匂^{にお}いが新しく入つて来ました。私はそれから床の正面に活^いけてある花が厭^{いや}でなくなりました。同じ床に立て懸^かけてある琴も邪魔にならなくなりました。

その花はまた規則正しく凋^{しお}れる頃になると活^かけ更えられるのです。琴も度々鍵^{たびたびかぎ}の手に折れ曲^{すじかい}がつた筋違^{へや}の室に運び去られるのです。私は自分の居間で机の上に頬杖^{ほおづえ}を突きながら、その琴の音^ねを聞いていました。私にはその琴が上手なのか下手なのかよく解^{わか}らないのです。けれども余り込み入った手を弾^ひかないところを見ると、上手なのじやなかうと考えました。まあ活花の程度ぐらいなものだろうと思ひました。花なら私にも好く分るのですが、お嬢さんは決して旨^{うま}い方ではなかつたのです。

夏目漱石

それでも臆面なく色々の花が私の床を飾ってくれました。もつとも活方はいつ見ても同じ事でした。それから花瓶もついぞ変った例がありませんでした。しかし片方の音楽になると花よりもつと変でした。ぽつんぽつん糸を鳴らすだけで、一向肉声を聞かせないのです。唄わないのではありませんが、まるで内所話でもするように小さな声しか出さないので。しかも叱られると全く出なくなるのです。

私は喜んでこの下手な活花を眺めては、まずそのような琴の音に耳を傾けました。

十二

「私の気分は国を立つ時すでに厭世的えんせいてきになつていました。他ひとは頼りにならないものだといふ觀念が、その時骨の中まで染み込んでしまつたように思われたのです。私は私の敵視する叔父おじだの叔母おばだの、その他の親戚しんせきだのを、あたかも人類の代表者のごとく考え出しました。汽車へ乗つてさえ隣のものの様子を、それとなく注意し始めました。たまに向うから話し掛けられでもすると、なおの事警戒を加えたくまりました。私の心は沈鬱ちんうつでした。鉛を呑のんだように重苦しくなる事が時々ありました。それでいて私の神経は、今いったごとくに鋭く尖とがつてしまつたのです。

私が東京へ来て下宿を出ようとしたのも、これが大きな原因げんいんになつてゐるように思われます。金に不自由がなければこそ、一戸を構えてみる気にもなつたのだといえればそれまでですが、元の通りの私ならば、たとい懷中ふとこに余裕ができて、好んでそんな面倒な真似まねはしなかつたでしょう。

夏目漱石

私は小石川^{こいしかわ}へ引き移つてからも、当分この緊張した気分^{くつろ}に寛^{くつろ}ぎを与える事ができませんでした。私は自分で自分が恥^ちずかしいほど、きよときよと周囲^{みまわ}を見廻^{みまわ}していました。不思議にもよく働くのは頭と眼だけで、口の方はそれと反対に、段々動かなくなつて来ました。私は家^{うち}のものの様子を猫のようによく観察しながら、黙^{もく}つて机の前に坐^{すわ}つていました。時々は彼らに對して気の毒^{めづ}だと思^{おも}うほど、私は油断のない注意を彼らの上に注^{そそ}いでいたのです。おれは物を偷^{ぬす}まない巾着^{きんちやく}切^{きり}みたようなものだ、私はこう考^{かん}えて、自分が厭^{いや}になる事さえあつたのです。

あなたは定^{さだ}めて変に思^{おも}うでしょう。その私がそこのお嬢^{じやう}さんをどうして好^すく余裕をもつてゐるか。そのお嬢^{じやう}さんの下手^{いけぼな}な活花^{うれ}を、どうして嬉^{うれ}しがつて眺^{なが}める余裕があるか。同じく下手^{いけぼな}なその人の琴をどうして喜^{よろこ}んで聞^きく余裕があるか。そう質問された時、私はただ両方とも事實であつたのだから、事實としてあなたに教^{おし}えて上げるといふより外^{ほか}に仕^し方がないのです。解釈は頭のあるあなたに任せるとして、私はただ一言^{いちごん}付け足^そしておきましよう。私は金に對して人類^{うたぐ}を疑^{うたぐ}つたけれども、愛に對しては、まだ人類^{うたぐ}を疑^{うたぐ}わなかつたのです。

夏目漱石

だから他^{ひと}から見ると変なものでも、また自分で考えてみて、矛盾したものでも、私の胸のなかでは平気で両立していたのです。

私は未亡^{びぼうじん}人の事を常に奥さんといっていましたから、これから未亡人と呼ばずに奥さんといえます。奥さんは私を静かな人、大人^{おとな}しい男と評しました。それから勉強家だとも褒^ほめてくれました。けれども私の不安な眼つきや、きよときよとした様子については、何事も口へ出しませんでした。気が付かなかったのか、遠慮していたのか、どっちだかよく解^{わか}りませんが、何しろそこにはまるで注意を払っていないらしく見えました。そののみならず、ある場合に私を鷹揚^{おうよう}な方^{かた}だといって、さも尊敬したらしい口の利^きき方をした事があります。その時正直な私は少し顔を赤らめて、向うの言葉を否定しました。すると奥さんは「あなたは自分で気が付かないから、そうおっしゃるんです」と真面目^{まじめ}に説明してくれました。奥さんは始め私のような書生^{うしやう}を宅^{うち}へ置くつもりではなかったらしいのです。どこかの役所^{やくしよ}へ勤める人か何かに坐敷^{ざしき}を貸す料簡^{りょうけん}で、近所^{きんしよ}のものに周旋^{しゆせん}を頼んでいたらしいのです。俸給^{ゆうきやう}が豊^{ゆた}かでなくって、やむをえず素人屋^{しろうとや}に下宿するくらいの人だからという考えが、それで前かたから奥さんの頭のどこかにはいつていたのでしょう。奥さんは自分の胸^{むね}に描^{えが}い

夏目漱石

たその想像のお客と私とを比較して、こつちの方を鷹揚だといって褒めるのです。なるほどそんな切り詰めた生活をする人に比べたら、私は金銭にかけて、鷹揚だったかも知れません。しかしそれは気性の問題ではありませんから、私の内生活に取ってほとんど関係のないのと一般でした。奥さんはまた女だけにそれを私の全体に推し広げて、同じ言葉を応用しようと力めるのです。

十三

「奥さんのこの態度が自然私の気分に影響して来ました。しばらくするうちに、私の眼はもとほどこきよろ付かなくなりました。自分の心が自分の坐^{すわ}っている所に、ちゃんと落ち付いているような気にもなれました。要するに奥さん始め家のもの^{うち}が、僻^{ひが}んだ私の眼や疑い深い私の様子に、てんから取り合わなかったのが、私に大きな幸福を与えたのでしょう。私の神経は相手から照り返して来る反射のないために段々静まりました。

奥さんは心得のある人でしたから、わざと私をそんな風^{ふう}に取り扱ってくれたものとも思われますし、また自分で公言するごとく、實際私を鷹揚^{おうよう}だと観察していたのかも知れませんが、私のこせつき方は頭の中の現象で、それほど外へ出なかつたようにも考えられますから、あるいは奥さんの方で胡魔化^{ごまか}されていたのかも解^{わか}りません。

私の心が静まると共に、私は段々家族のものと接近して来ました。奥さんともお嬢さんとも笑談^{しょうだん}をいうようになりました。茶を入れたからといって向うの室^{へや}へ呼ばれる日もありました。また私の方で菓子を買って来て、二人をこつちへ招いたりする晩もありました。

私は急に交際の区域が殖^ふえたように感じました。それがために大切な勉強の時間を潰^{つぶ}される事も何度となくありました。不思議にも、その妨害が私には一向^{いっこう}邪魔にならなかったのです。奥さんはもとより閑人^{ひまじん}でした。お嬢さんは学校へ行く上に、花だの琴だのを習っているんだから、定めて忙しかろうと思うと、それがまた案外なもので、いくらでも時間に余裕をもっているように見えました。それで三人は顔さえ見るといっしょに集まつて、世間話をしながら遊んだのです。

私を呼びに来るのは、大抵お嬢さんでした。お嬢さんは縁側を直角に曲つて、私の室^{へや}の前に立つ事もありますし、茶の間を抜けて、次の室の襖^{ふすま}の影から姿を見せる事もありました。お嬢さんは、そこへ来てちよつと留^とまります。それからきつと私の名を呼んで、「ご勉強？」と聞きます。私は大抵むずかしい書物を机の前に開けて、それを見詰めていましたから、傍^{はた}で見たらさぞ勉強家のように見えたのでしよう。しかし實際をいうと、それほど熱心に書物を研究してはいなかったのです。頁^{ページ}の上に眼は着けていながら、お嬢さんの呼びに来るのを待っているくらいなものでした。待つていて来ないと、仕方がないから私の

夏目漱石

方で立ち上がるのです。そうして向うの室の前へ行つて、こつちから「ご勉強ですか」と聞くのです。

お嬢さんの部屋へやは茶の間と続いた六畳でした。奥さんはその茶の間にいる事もあるし、またお嬢さんの部屋へやにいる事もありました。つまりこの二つの部屋は仕切しきりがあつても、な
いと同じ事で、親子二人が往いつたり来たりして、どっち付かずいに占領していたのです。私
が外から声を掛けると、「おはいんなさい」と答えるのはきつと奥さんでした。お嬢さんは
そこめつたにいても滅多に返事をした事ありませんでした。

時たまお嬢さん一人で、用があつて私の室へはいつたついでに、そこに坐すわつて話し込む
ような場合もその内うちに出て来ました。そういう時には、私の心が妙に不安に冒おかされて来る
のです。そうして若い女とただ差向さむかいで坐つているのが不安なのだばかりは思えません
でした。私は何だかそわそわし出すのです。自分で自分を裏切るような不自然な態度が私
を苦しめるのです。しかし相手の方はかえつて平氣でした。これが琴を浚さらうのに声さえ碌ろく
に出せなかつたあの女かしらと疑われるくらい、恥はずかしがらないのです。あまり長くな
るので、茶の間から母と呼ばれても、「はい」と返事をするだけで、容易に腰を上げない事

夏目漱石

さえありました。それでいてお嬢さんは決して子供ではなかつたのです。私の眼にはよくそれが解わかっていました。よく解るように振舞つて見せる痕迹こんせきさえ明らかでした。

十四

「私はお嬢さんの立つたあとで、ほっと一息ひといきするのです。それと同時に、物足りないようなまた済まないような気持ちになるのです。私は女らしかったのかも知れませんが。今の青年のあなたがたから見たらなおそう見えるでしょう。しかしその頃ころの私たちは大抵そんなものだったのです。

奥さんは滅多めったに外出した事がありませんでした。たまに宅うちを留守にする時でも、お嬢さんと私を二人ぎり残して行くような事はなかったのです。それがまた偶然なのか、故意なのか、私には解らないのです。私の口からいうのは変ですが、奥さんの様子を能く観察よしていると、何だか自分の娘と私とを接近させたがっているらしくも見えます。それでいて、或る場合あるには、私に対して暗に警戒するところもあるようなのですから、始めてこんな場合に出会った私は、時々心持をわるくしました。

私は奥さんの態度をどっちかに片付けてもらいたかったのです。頭の働きからいえば、それが明らかな矛盾に違いなかったのです。しかし叔父おじに欺あざむかれた記憶のまだ新しい私は、

もう一步踏み込んだ疑いを挟さしはさまずにはいられませんでした。私は奥さんのこの態度のどつちかが本場で、どつちかが偽いつわりだろうと推定しました。そうして判断に迷いました。ただ判断に迷うばかりでなく、何でそんな妙な事をするかその意味が私には呑のみ込めなかつたのです。理わけ由を考え出そうとしても、考え出せない私は、罪を女という一字に塗なすり付けて我慢した事もありました。必竟ひつきよう女だからああなのだ、女というものはどうせ愚ぐなものだ。私の考えは行き詰つままればいつでもここへ落ちて来ました。

それほど女を見縊みくびっていた私が、またどうしてもお嬢さんを見縊る事ができなかったのです。私の理屈はその人の前に全く用を為なさないほど動きませんでした。私はその人に対して、ほとんど信仰に近い愛をもっていたのです。私が宗教だけに用いるこの言葉を、若い女に応用するのを見て、あなたは変に思うかも知れませんが、私は今でも固く信じているのです。本当の愛は宗教心とそう違ったものでないという事を固く信じているのです。私はお嬢さんの顔を見るたびに、自分が美しくなるような心持がしました。お嬢さんの事を考えると、気高けだかい気分がすぐ自分に乗り移つて来るように思いました。もし愛という不可思議なものに両端りようはしがあつて、その高い端はしには神聖な感じが働いて、低い端はしには性欲せいよくが動

いているとすれば、私の愛はたしかにその高い極点を捕まえたものです。私はもとより人間として肉を離れる事のできない身体からだでした。けれどもお嬢さんを見る私の眼や、お嬢さんを考える私の心は、全く肉の臭いにおを帯びていませんでした。

私は母に対して反感を抱くいだと共に、子に対して恋愛の度を増まして行つたのですから、三人の関係は、下宿した始めよりは段々複雑になつて来ました。もつともその変化はほとんど内面的で外へは現れて来なかつたのです。そのうち私はあるひよつとした機会から、今まで奥さんを誤解していたのではなからうかという氣になりました。奥さんの私に対する矛盾した態度が、どっちも偽りではないのだらうと考え直して来たのです。その上、それが互い違ちがいに奥さんの心を支配するのでなくつて、いつでも両方が同時に奥さんの胸に存在あしているのだと思うようになったのです。つまり奥さんができるだけお嬢さんを私に接近させようとしていながら、同時に私に警戒を加えているのは矛盾のようだけれども、その警戒を加える時に、片方の態度を忘れるのでも翻すのでも何でもなく、やはり依然として二人を接近させたがつていたのだと観察したのです。ただ自分が正当と認める程度以上に、二人が密着するのを忌むのだと解釈したのです。お嬢さんに対して、肉の方面から近

石漱目夏

づく念の萌^{きざ}さなかった私は、その時入^いらぬ心配だと思いました。しかし奥さんを悪く思う気はそれからなくなりました。

十五

「私は奥さんの態度を色々^{そうじやう}綜合して見て、私がここの家^{うち}で充分信用されている事を確かめました。しかもその信用は初対面の時からあったのだという証拠さえ発見しました。他^{ひと}を疑^{うたぐ}り始めた私の胸には、この発見が少し奇異なくらいに響いたのです。私は男に比べると女の方がそれだけ直覺に富んでいるのだらうと思いました。同時に、女が男のために、欺^{だま}されるのもここにあるのではなからうかと思いました。奥さんをそう觀察する私が、お嬢さんに対して同じような直覺を強く働かせていたのだから、今考えるとおかしいのです。私は他^{ひと}を信じないと心に誓いながら、絶対にお嬢さんを信じていたのですから。それでいて、私を信じている奥さんを奇異に思つたのですから。

私は郷里の事について余り多くを語らなかつたのです。ことに今度の事件については何もいわなかつたのです。私はそれを念頭に浮べてさえすでに一種の不愉快を感じました。私はなるべく奥さんの方の話だけを聞こうと力^{つと}めました。ところがそれでは向うが承知しません。何かに付けて、私の国元の事情を知りたがるのです。私はとうとう何もかも話し

夏目漱石

てしまいました。私は二度と国へは帰らない。帰つても何にもない、あるのはただ父と母の墓ばかりだと告げた時、奥さんは大変感動したらしい様子を見せました。お嬢さんは泣きました。私は話して好い事をしたと思ひました。私は嬉しかったのです。

私のすべてを聞いた奥さんは、はたして自分の直覚が的中したといわないばかりの顔をし出しました。それから私は私を自分の親戚に当る若いものか何かを取り扱うように待遇するのです。私は腹も立ちませんでした。むしろ愉快に感じたくらいです。ところがそのうちに私の猜疑心がまた起つて来しました。

私が奥さんを疑り始めたのは、ごく些細な事からでした。しかしその些細な事を重ねて行くうちに、疑惑は段々と根を張つて来ます。私はどういふ拍子かふと奥さんが、叔父と同じような意味で、お嬢さんを私に接近させようと力めるのではないかと考え出したのです。すると今まで親切に見えた人が、急に狡猾な策略家として私の眼に映じて来たのです。私は苦々しい唇を噛みました。

奥さんは最初から、無人で淋しいから、客を置いて世話をするのだと公言していました。私もそれを嘘とは思いませんでした。懇意になつて色々打ち明け話を聞いた後でも、そこ

夏目漱石

に間違まちがいはなかったように思われます。しかし一般の経済状態は大して豊ゆたかだというほどではありませんでした。利害問題から考えてみて、私と特殊の關係をつけるのは、先方に取って決して損ではなかったのです。

私はまた警戒を加えました。けれども娘に対して前いったくらいの強い愛をもっている私が、その母に対していくら警戒を加えたって何になるでしょう。私は一人で自分を嘲笑ちやうしょうしました。馬鹿だなといって、自分を罵ののした事もあります。しかしそれだけの矛盾ならいくら馬鹿でも私は大した苦痛も感ぜずに済んだのです。私の煩悶はんもんは、奥さんと同じようにお嬢さんも策略家ではなからうかという疑問に会って始めて起るのです。二人が私の背後で打ち合せをした上、万事をやっているのだろうと思うと、私は急に苦しくって堪たまらなくなるのです。不愉快なのではありません。絶体絶命のような行き詰まった心持になるのです。それでいて私は、一方にお嬢さんを固く信じて疑わなかったのです。だから私は信念と迷いの途中に立って、少しも動く事ができなくなってしまうました。私にはどつちも想像であり、またどつちも真実であつたのです。

十六

「私は相変らず学校へ出席していました。しかし教壇に立つ人の講義が、遠くの方で聞こえるような心持がしました。勉強もその通りでした。眼の中へはいる活字は心の底まで浸み渡らないうちに烟のごとく消えて行くのです。私はその上無口になりました。それを二、三の友達が誤解して、冥想に耽つてでもいるかのように、他の友達に伝えました。私はこの誤解を解こうとはしませんでした。都合の好い仮面を人が貸してくれたのを、かえつて仕合せとして喜びました。それでも時々は気が済まなかつたのでしよう、発作的に焦燥ぎ廻つて彼らを驚かした事もあります。

私の宿は人出入りの少ない家でした。親類も多くはないようでした。お嬢さんの学校友達がときたま遊びに来る事はありませんでしたが、極めて小さな声で、いるのだからいいのだから分らないような話をして帰つてしまふのが常でした。それが私に対する遠慮からだとは、いかな私にも気が付きませんでした。私の所へ訪ねて来るものは、大した乱暴者でもありませんでしたけれども、宅の人に気兼ねをするほどな男は一人もなかつたのですから。そん

夏目漱石

なところになると、下宿人の私は主人あるじのようなもので、肝心かんじんのお嬢さんがかえつて食客いせうかうの位地いぢにいたと同じ事です。

しかしこれはただ思い出したついでに書いただけで、実はどうでも構わない点です。ただそこにどうでもよくない事が一つあったのです。茶の間か、さもないければお嬢さんの室で、突然男の声が聞こえるのです。その声がまた私の客と違つて、すこぶる低いのです。だから何を話しているのかまるで分らないのです。そうして分らなければ分らないほど、私の神経に一種の昂奮こうふんを与えるのです。私は坐すわつていて変にいらいらし出します。私はあれは親類なのだろうか、それともただの知り合いなのだろうかとまず考えて見るのです。それから若い男だろうか年輩の人だろうかと思案してみるのはです。坐すわつていてそんな事の知れようはありますがありません。そうかといつて、起たつて行つて障子しょうじを開けて見る訳にはないきません。私の神経は震えるというよりも、大きな波動を打つて私を苦しめます。私は客の帰つた後で、きつと忘れずにその人の名を聞きました。お嬢さんや奥さんの返事は、また極めて簡単でした。私は物足りない顔を二人に見せながら、物足りるまで追窮ついきゆうする勇氣をもつていなかったのです。權利は無論もつていなかったのです。私は自分の品格

夏目漱石

を重んじなければならぬという教育から来た自尊心と、現にその自尊心を裏切うらがひしている物欲ぶつよくしそうな顔付かおつきとを同時に彼らの前に示すのです。彼らは笑いました。それが嘲笑ちやうしやうの意味でなくって、好意から来たものか、また好意らしく見せるつもりなのか、私は即坐に解釈の余地を見出し得ないほど落付おちつきを失ってしまうのです。そうして事が済んだ後で、いつまでも、馬鹿にされたのだ、馬鹿にされたんじやなかうかと、何遍なんべんも心のうちで繰り返すのです。

私は自由な身体からだでした。たとい学校を中途で已めようが、またどこへ行つてどう暮らそうが、あるいはどこの何者と結婚しようが、誰だれとも相談する必要のない位地に立っていました。私は思い切つて奥さんにお嬢さんもろを貰い受ける話をして見ようかという決心をした事がそれまでに何度となくありました。けれどもそのたびごとに私は躊躇ちゆうちよして、口へはとうとう出さずにしまったのです。断られるのが恐ろしいからではありません。もし断られたら、私の運命がどう変化するか分りませんけれども、その代り今までとは方角の違った場所に立つて、新しい世の中を見渡す便宜も生じて来るのですから、そのくらいの勇氣は出せば出せたのです。しかし私は誘き寄せられるのが厭いやでした。他の手ひとに乘るのは何より

夏目漱石

も業腹ごうはらでした。叔父おじに欺だまされた私は、これから先どんな事があっても、人には欺されまいと決心したのです。

十七

「私が書物ばかり買うのを見て、奥さんは少し着物を拵えろといいました。私は實際田舎で織った木綿ものしかもっていなかったのです。その頃の学生は絹の入った着物を肌に着けませんでした。私の友達に横浜の商人が何かで、宅はなかなか派出に暮しているものがありました。そこへある時羽二重の胴着が配達で届いた事があります。すると皆ながそれを見て笑いました。その男は恥ずかしがつて色々弁解しましたが、折角の胴着を行李の底へ放り込んで利用しないのです。それをまた大勢が寄つてたかつて、わざと着せました。すると運悪くその胴着に蝨がたかりました。友達はちやうど幸いとも思つたのでしよう、評判の胴着をぐるぐると丸めて、散歩に出たついでに、根津の大きな泥溝の中へ棄ててしまいました。その時いつしよに歩いていた私は、橋の上に立つて笑いながら友達の所作を眺めていましたが、私の胸のどこにも勿体ないという気は少しも起りませんでした。

その頃から見ると私も大分大人になっていました。けれどもまだ自分で余所行の着物を拵えるというほどの分別は出なかつたのです。私は卒業して髯を生やす時代が来なければ、

夏目漱石

服装の心配などはするに及ばないものだという変な考えをもっていたのです。それで奥さんに書物は要るが着物は要らないといいました。奥さんは私の買う書物の分量を知っていました。買った本をみんな読むのかと聞くのです。私の買うものの中には字引きもありましたが、当然眼を通すべきはずでありながら、頁さえ切つてないのも多少あったのですから、私は返事に窮しました。私はどうせ要らないものを買うなら、書物でも衣服でも同じだという事に気が付きました。その上私は色々世話になるという口実の下に、お嬢さんの気に入るような帯か反物を買ってやりたかったのです。それで万事を奥さんに依頼しました。奥さんは自分一人で行くとはいいません。私にもいつしよに来いと命令するのです。お嬢さんも行かなくてはいけないのです。今と違った空気の中に育てられた私どもは、学生の身分として、あまり若い女などといっしよに歩き廻る習慣をもっていなかったものです。その頃の私は今よりもまだ習慣の奴隷でしたから、多少躊躇しましたが、思い切つて出掛けました。

お嬢さんは大層着飾っていました。地体じたいが色の白いくせに、白粉おしろいを豊富に塗ったものだからなお目立ちます。往来の人がじろじろ見てゆくのです。そうしてお嬢さんを見たものはきつとその視線をひるがえして、私の顔を見るのだから、変なものでした。

三人は日本橋にほんばしへ行つて買いたいものを買いました。買う間にも色々気が変わるので、思つたより暇ひまがかかりました。奥さんはわざわざ私の名を呼んでどうだろうと相談をするので、時々反物たんものをお嬢さんの肩から胸たてへ竅あてておいて、私に二、三步遠退とこのいて見てくれるというのです。私はそのたびごとに、それは駄目だめだとか、それはよく似合うとか、とにかく一人前の口を聞きました。

こんな事で時間が掛かつて帰りは夕飯ゆふめしの時刻になりました。奥さんは私に對するお礼に何かご馳走ちそうするといつて、木原店きはらだなという寄席よせのある狭い横丁よちちようへ私を連れ込みました。横丁も狭いが、飯を食わせる家も狭いものでした。この辺へんの地理を一向心得ない私は、奥さんの知識に驚いたくらいです。

我々は夜よに入いつて家へ帰りました。その翌日あくるひは日曜でしたから、私は終日室へやの中に閉うちじ籠こもっていました。月曜になつて、学校へ出ると、私は朝っぱらそうそう級友の一人から

夏目漱石

調^{から}戯^かわれました。いつ妻^{さい}を迎えたのかといつてわざとらしく聞かれるのです。それから私の細^{さい}君^{くん}は非常に美人だといって賞^ほめるのです。私は三人連^{づれ}で日本橋へ出掛けたところを、その男にどこかで見られたものとみえます。

十八

「私は宅^{うち}へ歸つて奥さんとお嬢さんにその話をしました。奥さんは笑いました。しかし定めて迷惑だろうといつて私の顔を見ました。私はその時腹のなかで、男はこんな風^{ふう}にして、女から氣を引いて見られるのかと思ひました。奥さんの眼は充分私にそう思わせるだけの意味をもつていたのです。私はその時自分の考へてゐる通りを直截^{ちよくせつ}に打ち明けてしまへば好かつたかも知れません。しかし私にはもう狐疑^{こぎ}という薩張^{さつぱ}りしない塊^{かたまり}りがこびり付いていました。私は打ち明けようとして、ひよいと留^とまりました。そうして話の角度を故意に少し外^そらしました。

私は肝心^{かんじん}の自分というものを問題の中から引き抜いてしまいました。そうしてお嬢さんの結婚について、奥さんの意中を探つたのです。奥さんは二、三そういう話のないでもないような事を、明らかに私に告げました。しかしまだ学校へ出てゐるくらいで年が若いから、こちらではさほど急がないのだと説明しました。奥さんは口へは出さないけれども、お嬢さんの容色^{ようしき}に大分^{だいぶん}重きを置いてゐるらしく見えました。極^きめようと思へばいつでも極

められるんだからというような事さえ口外しました。それからお嬢さんより外に子供がないのも、容易に手離したがない源因げんいんになつていました。嫁にやるか、贅むこを取るか、それにさえ迷っているのではなからうかと思われるところもありました。

話しているうちに、私は色々の知識を奥さんから得たような気がしました。しかしそれがために、私は機会を逸いっしたと同様の結果に陥おちつてしまいました。私は自分について、ついに一言も口を開く事ができませんでした。私は好い加減なところで話を切り上げて、自分の室へやへ帰ろうとしました。

さつきまで傍そばにいて、あんまりだわとか何とかいつて笑つたお嬢さんは、いつの間にか向うの隅に行つて、背中をこつちへ向けていました。私は立とうとして振り返つた時、その後姿うしろすがたを見たのです。後姿だけで人間の心が読めるはずはありません。お嬢さんがこの問題についてどう考えているか、私には見当が付きませんでした。お嬢さんは戸棚の前にして坐すわっていました。その戸棚の一尺しやくばかり開あいている隙間すきまから、お嬢さんは何か引き出して膝ひざの上へ置いて眺ながめているらしかったのです。私の眼はその隙間の端はじに、一昨日買おとつた反物たんものを見付け出しました。私の着物もお嬢さんののも同じ戸棚の隅に重ねてあつたのです。

私が何ともいわずに席を立ち掛けると、奥さんは急に改まった調子になつて、私にどう思ふかと聞くのです。その聞き方は何をどう思ふのかと反問しなければ解らないほど不意でした。それがお嬢さんを早く片付けた方が得策だろうかという意味だと判然した時、私はなるべく緩くならな方がいだろうと答えました。奥さんは自分もそう思うといいました。奥さんとお嬢さんと私の関係がこうなっている所へ、もう一人男が入り込まなければならぬ事になりました。その男がこの家庭の一員となつた結果は、私の運命に非常な変化を来しています。もしその男が私の生活の行路を横切らなかつたならば、おそらくこういう長いものをあなたに書き残す必要も起らなかつたでしょう。私は手もなく、魔の通る前に立つて、その瞬間の影に一生を薄暗くされて気が付かずにいたのと同じ事です。自白すると、私は自分でその男を宅へ引張つて来たのです。無論奥さんの許諾も必要ですから、私は最初何もかも隠さず打ち明けて、奥さんに頼んだのです。ところが奥さんは止せといいました。私には連れて来なければ済まない事情が充分あるのに、止せという奥さんの方には、筋の立つた理屈はまるでなかつたのです。だから私は私の善いと思うところを強いて断行してしまいました。

十九

「私はその友達の名をここにKと呼んでおきます。私はこのKと小供こどもの時からなかよしの仲好でした。小供の時からといえど断らないでも解っているでしょう、二人には同郷の縁故があつたのです。Kは真宗しんしゅうの坊さんの子でした。もつとも長男ではありません、次男でした。それである医者いしやの所へ養子にやられたのです。私の生れた地方は大変本願寺派ほんがんじはの勢力の強い所でしたから、真宗の坊さんは他のものほかに比べると、物質的に割が好かつたようです。一例を挙げると、もし坊さんに女の子があつて、その女の子が年頃としごろになつたとすると、檀家だんかのものが相談して、どこか適当な所へ嫁にやつてくれます。無論費用は坊さんの懐ふところから出るではありません。そんな訳で真宗寺しんしゅうでらは大抵有福ゆうふくでした。

Kの生れた家も相応に暮らしていたのです。しかし次男を東京へ修業に出すほどの余力があつたかどうか知りません。また修業に出られる便宜があるので、養子の相談が纏まとまつたものかどうか、そこも私には分りません。とにかくKは医者いしやの家へ養子うちに行つたのです。

夏目漱石

それは私たちがまだ中学にいる時の事でした。私は教場で先生が名簿を呼ぶ時に、Kの姓が急に変っていたので驚いたのを今でも記憶しています。

Kの養子先もかなりな財産家でした。Kはそこから学資を貰って東京へ出て来たのです。出て来たのは私といっしょでなかったけれども、東京へ着いてからは、すぐ同じ下宿に入りました。その時分は一つ室によく二人も三人も机を並べて寝起したものです。Kと私も二人で同じ間にいました。山で生捕られた動物が、檻の中で抱き合いながら、外を睨めるようなものでしたろう。二人は東京と東京の人を畏れました。それでいて六畳の間の中では、天下を睥睨するような事をいつていたのです。

しかし我々は真面目でした。我々は実際偉くなるつもりでいたのです。ことにKは強かったのです。寺に生れた彼は、常に精進という言葉を使いました。そうして彼の行為動作は悉くこの精進の一語で形容されるように、私には見えたのです。私は心のうちで常にKを畏敬していました。

Kは中学にいた頃から、宗教とか哲学とかいうむずかしい問題で、私を困らせました。これは彼の父の感化なのか、または自分の生れた家、すなわち寺という一種特別な建物に

夏目漱石

属する空氣の影響なのか、解^{わか}りません。ともかくも彼は普通の坊さんよりは遙^{はる}かに坊さんらしい性格をもっていたように見受けられます。元來Kの養^{よう}家では彼を医者にするつもりで東京へ出したのです。しかるに頑固な彼は医者にはならない決心をもつて、東京へ出て来たのです。私は彼に向つて、それでは養父母^{あやむ}を欺^{あざむ}くと同じ事ではないかと詰^なりました。大胆な彼はそうだと答えるのです。道のためなら、そのくらいの事をしても構わないというのです。その時彼の用いた道という言葉は、おそらく彼にもよく解つていなかったでしょう。私は無論解つたとはいえません。しかし年の若い私たちには、この漠然^{ぼくぜん}とした言葉が尊^{たつ}とく響いたのです。よし解らないにしても氣高^{けだか}い心持に支配されて、そちらの方へ動いて行こうとする意氣組^{いきぐみ}に卑^{いや}しいところの見えるはずはありません。私はKの説に賛成しました。私の同意がKにとつてどのくらい有力であつたか、それは私も知りません。一図^{いちず}な彼は、たとい私がいくら反對しようとも、やはり自分の思い通りを貫いたに違いないからうとは察せられます。しかし万一の場合、賛成の声援を与えた私に、多少の責任ができてくるぐらいの事は、子供ながら私はよく承知していたつもりです。よしその時にそれだけの覺悟がないにしても、成人した眼で、過去を振り返る必要が起つた場合には、私に

石漱目夏

割り当てられただけの責任は、私の方で帯びるのが至^し当^とになるくらいな語気で私は賛成したのです。

二十

「Kと私は同じ科へ入学しました。Kは澄ました顔をして、養家から送ってくれる金で、自分の好きな道を歩き出したのです。知れはしないという安心と、知れたって構うものかという度胸とが、二つながらKの心にあつたものと見るよりほか仕方ありません。Kは私よりも平気でした。」

最初の夏休みにKは国へ帰りませんでした。駒込のある寺の一間を借りて勉強するのだといっていました。私が帰って来たのは九月上旬でしたが、彼ははたして大観音の傍の汚い寺の中に閉じ籠っていました。彼の座敷は本堂のすぐ傍の狭い室でしたが、彼はそこで自分の思う通りに勉強ができたのを喜んでいらしく見えました。私はその時彼の生活の段々坊さんらしくなつて行くのを認めたように思います。彼は手頸に珠数を懸けていました。私がそれは何のためだと尋ねたら、彼は親指で一つ二つと勘定する真似をして見せました。彼はこうして日に何遍も珠数の輪を勘定するらしかったのです。ただしその意味は私には解りません。円い輪になつてゐるものを一粒ずつ数えてゆけば、どこまで数えて

夏目漱石

いつても終局はありません。Kはどんな所でどんな心持がして、爪繰る手を留めたでしょう。詰らない事です、私はよくそれを思うのです。

私はまた彼の室に聖書を見ました。私はそれまでにお経の名を度々彼の口から聞いた覚えがありますが、基督教については、問われた事も答えられた例もなかったのですから、ちよつと驚きました。私はその理由を訊ねずにはいられませんでした。Kは理由はないといいました。これほど人の有難がる書物なら読んでみるのが当り前だろうともいいました。その上彼は機会があつたら、『コーラン』も読んでみるつもりだといいました。彼はモハメッドと剣という言葉に大いなる興味をもっているようでした。

二年目の夏に彼は国から催促を受けてようやく帰りました。帰つても専門の事は何にもいわなかったものとみえます。家でもまたそこに気が付かなかったのです。あなたは学校教育を受けた人だから、こういう消息をよく解しているでしょうが、世間は学生の生活だの、学校の規則だのに関して、驚くべく無知なものです。我々に何でもない事が一向外部へは通じていません。我々はまた比較的内部の空気ばかり吸っているのです、校内の事は細大ともに世の中に知れ渡っているはずだと思ひ過ぎる癖があります。Kはその点にかけて、

夏目漱石

私より世間を知っていたのでしよう、澄ました顔でまた戻つて来ました。国を立つ時は私もいっしょでしたから、汽車へ乗るや否やすぐどうだったとKに問いました。Kはどうでもなかったと答えたのです。

三度目の夏はちょうど私が永久に父母の墳墓の地を去ろうと決心した年です。私はその時Kに帰国を勧めましたが、Kは応じませんでした。そう毎年家へ帰つて何をするのだというのです。彼はまた踏み留まつて勉強するつもりらしかったのです。私は仕方なしに一人で東京を立つ事にしました。私の郷里で暮らしたその二カ月間が、私の運命にとつて、いかに波瀾に富んだものかは、前に書いた通りですから繰り返しません。私は不平と幽鬱と孤独の淋しさとを一つ胸に抱いて、九月に入つてまたKに逢いました。すると彼の運命もまた私と同様に変調を示していました。彼は私の知らないうちに、養家先へ手紙を出して、こつちから自分の詐りを白状してしまつたのです。彼は最初からその覚悟でいたのだそうです。今更仕方がないから、お前の好きなものをやるより外に途はあるまいと、向うにいわせるつもりもあつたのでしょうか。とにかく大学へ入つてまでも養父母を欺き通す

夏目漱石
気はなかつたらしいのです。
の かも知れません。
また欺こうとしても、
そう長く続くものではないと見抜いた

二十一

「Kの手紙を見た養父は大変怒りました。親を騙すような不埒なものに学資を送る事ではできないという厳しい返事をすぐ寄こしたのです。Kはそれを私に見せました。Kはまたそれと前後して実家から受け取った書翰も見せました。これにも前に劣らないほど厳しい詰責の言葉がありました。養家先へ対して済まないという義理が加わっているからでもありませんが、こつちでも一切構わないと書いてありました。Kがこの事件のために復讐してしまうか、それとも他に妥協の道を講じて、依然養家に留まるか、そこはこれから起る問題として、差し当りどうかしなければならぬのは、月々に必要な学資でした。

私はその点についてKに何か考えがあるのかと尋ねました。Kは夜学校の教師でもするつもりだと答えました。その時分は今に比べると、存外世の中が寛ろいでいましたから、内職の口はあなたが考えるほど払底でもなかったのです。私はKがそれで充分やって行けるだろうと考えました。しかし私には私の責任があります。Kが養家の希望に背いて、自分の行きたい道を行こうとした時、賛成したものは私です。私はそうかといって手を拱い

でいる訳にゆきません。私はその場で物質的の補助をすぐ申し出しました。するとKは一つより遙はるかに快よく思われたのでしよう。彼は大学へはいった以上、自分一人ぐらいどうかできなければ男でないような事をいいました。私は私の責任を完まっくうするために、Kの感情を傷つけるに忍びませんでした。それで彼の思う通りにさせて、私は手を引きました。

Kは自分の望むような口をほどなく探し出しました。しかし時間を惜しむ彼にとって、この仕事がどのくらい辛つらかったかは想像するまでもない事です。彼は今まで通り勉強の手をちつとも緩ゆるめずに、新しい荷を背負しよって猛進したのです。私は彼の健康を気遣きづかいました。しかし剛ごう氣な彼は笑うだけで、少しも私の注意に取り合いませんでした。

同時に彼と養家との関係は、段々こん絡がらがつて来ました。時間に余裕のなくなった彼は、前のように私と話す機会を奪われたので、私はついにその顛末てんまつを詳しく聞かずにしまいました。人が仲に入って調停を試みた事も知っていました。その人は手紙でKに帰国うなかを促したのですが、Kは到底駄目だめだといって、応じませんでした。この剛情ごうじやうなところが、——Kは学年中で帰れないの

だから仕方がないといいましたけれども、向うから見れば剛情でしょう。そこが事態をますます険悪にしたようにも見えました。彼は養家の感情を害すると共に、実家の怒りも買うようになりました。私が心配して双方を融和するために手紙を書いた時は、もう何の効果もありませんでした。私の手紙は一言の返事さえ受けずに葬られてしまったのです。私も腹が立ちました。今までも行掛り上、Kに同情していた私は、それ以後は理否を度外に置いてKの味方をする気になりました。

最後にKはとうとう復籍に決しました。養家から出してもらった学資は、実家で弁償する事になったのです。その代り実家の方でも構わないから、これからは勝手にしろというのです。昔の言葉でいえば、まあ勘当なのでしょう。あるいはそれほど強いものでなかったかも知れませんが、当人はそう解釈していました。Kは母のない男でした。彼の性格の一面は、たしかに継母に育てられた結果とも見る事ができるようです。もし彼の実の母が生きていたら、あるいは彼と実家との関係に、こうまで隔たりができずに済んだかも知れないと私は思うのです。彼の父はいうまでもなく僧侶でした。けれども義理堅い点において、むしろ武士に似たところがありはしないかと疑われます。

二十二

「Kの事件が一段落ついた後あとで、私は彼の姉の夫から長い封書を受け取りました。Kの養子に行った先は、この人の親類に当るのですから、彼を周旋した時にも、彼を復籍させた時にも、この人の意見が重きをなしていたのだと、Kは私に話して聞かせました。

手紙にはその後Kがどうしているか知らせてくれと書いてありました。姉が心配しているから、なるべく早く返事を貰もらいたいという依頼も付け加えてありました。Kは寺を嗣ついだ兄よりも、他家たけへ縁づいたこの姉を好いていました。彼らはみんな一つ腹から生れた姉弟きょうだいですけれども、この姉とKとの間には大分年齒としの差があつたのです。それでKの小供こどもの時分には、継母まははよりもこの姉の方が、かえつて本当の母らしく見えたのでしよう。

私はKに手紙を見せました。Kは何ともいいませんでしたけれども、自分の所へこの姉から同じような意味の書状が二、三度来たという事を打ち明けました。Kはそのたびに心配するに及ばないと答えてやったのだそうです。運悪くこの姉は生活に余裕のない家に片

夏目漱石

付いたために、いくらKに同情があつても、物質的に弟をどうしてやる訳にも行かなかつたのです。

私はKと同じような返事を彼の義兄宛あてで出しました。その中に、万一の場合には私がどうでもするから、安心するようにという意味を強い言葉で書き現わしました。これは固もとより私の一存いちぞんでした。Kの行先を心配するこの姉に安心を与えようという好意は無論含まれていましたが、私を輕蔑けいべつしたとより外ほかに取りようのない彼の実家や養家ようかに対する意地もあつたのです。

Kの復籍したのは一年生の時でした。それから二年生の中頃なかごろになるまで、約一年半の間、彼は独力おので己れを支えていったのです。ところがこの過度の労力が次第に彼の健康と精神の上に影響して来たように見え出しました。それには無論養家を出る出ないの蒼蠅うるぎい問題も手伝つていたでしょう。彼は段々感傷センチメンタル的になつて来たのです。時によると、自分だけが世の中の不幸を一人で背負しよつて立つているような事をいいます。そうしてそれを打ち消せばすぐ激するのです。それから自分の未来に横たよこたわる光明こうみょうが、次第に彼の眼を遠退とおのいて行くようにも思つて、いらいらするのです。学問をやり始めた時には、誰しも偉大な抱負を

夏目漱石

もって、新しい旅に上るのぼるのが常ですが、一年と立ち二年と過ぎ、もう卒業も間近になると、急に自分の足の運びの鈍いのろのに気が付いて、過半はそこで失望するのが当り前になっていきますから、Kの場合も同じなのですが、彼の焦慮あせり方はまた普通に比べると遙はるかに甚はなはだしかったのです。私はついに彼の気分を落ち付けるのが専一せんいちだと考えました。

私は彼に向って、余計な仕事をするのは止せよといいました。そうして当分身体からだを楽にして、遊ぶ方が大きな将来のために得策だと忠告しました。剛情ごうじやうなKの事ですから、容易に私のいう事などは聞かまいと、かねて予期していたのですが、実際にい出して見ると、思ったよりも説き落すのに骨が折れたので弱りました。Kはただ学問が自分の目的ではないと主張するのです。意志の力を養って強い人になるのが自分の考えだということです。それにはなるべく窮屈な境遇にいらなくてはならないと結論するのです。普通の人から見れば、まるで酔興すいきやうです。その上窮屈な境遇にいる彼の意志は、ちつとも強くなっていないのです。彼はむしろ神経衰弱に罹かかっているくらいなのです。私は仕方がないから、彼に向って至極しごく同感であるような様子を見せました。自分もそういう点に向って、人生を進むつもりだったとついには明言しました。(もつともこれは私に取ってまんざら空虚な言葉でもなかった

夏目漱石

たのです。Kの説を聞いていると、段々そういうところに釣り込まれて来るくらい、彼には力があつたのですから。最後に私はKといっしょに住んで、いっしょに向上の路を辿^{たど}って行きたいと発議^{はつぎ}しました。私は彼の剛情を折り曲げるために、彼の前に跪^{ひざまず}く事をあえてしたのです。そうして漸^{やっ}との事で彼を私の家に連れて来しました。

二十三

「私の座敷には控えの間^まというような四畳が付属していました。玄関を上がつて私のいる所へ通ろうとするには、ぜひこの四畳を横切らなければならぬのだから、実用の点から見ると、至極^{しごく}不便な室^{へや}でした。私はここへKを入れたのです。もつとも最初は同じ八畳に二つ机を並べて、次の間を共有にして置く考えだったのですが、Kは狭苦しくつても一人でいる方が好い^いといって、自分でそつちのほうを択^{えら}んだのです。

前にも話した通り、奥さんは私のこの所置に対して始めは不賛成だったのです。下宿屋ならば、一人より二人が便利だし、二人より三人が得になるけれども、商売でないのだから、なるべくなら止^よめた方が好い^いというのです。私が決して世話の焼ける人でないから構うまいというと、世話は焼けないでも、氣心の知れない人は厭^{いや}だと答えるのです。それでは今厄介^{やっかい}になっている私だって同じ事ではないかと詰^なると、私の氣心は初めからよく分つていると弁解^{べんげ}して已^やまないので。私は苦笑しました。すると奥さんはまた理屈の方向を

夏目漱石

更^かえます。そんな人を連れて来るのは、私のために悪いから止^よせといひ直します。なぜ私のために悪いかと聞くと、今度は向うで苦笑するのです。

実をいうと私だつて強^しいてKといつしよにいる必要はなかつたのです。けれども月々の費用を金の形で彼の前に並べて見せると、彼はきつとそれを受け取る時に躊躇^{ちゆうちよ}するだらうと思つたのです。彼はそれほど独立心の強い男でした。だから私は彼を私の宅^{うち}へ置いて、二人^{ふたりまえ}前の食料を彼の知らない間^まにそつと奥さんの手に渡そうとしたのです。しかし私はKの経済問題について、一言^{いちごん}も奥さんに打ち明ける気はありませんでした。

私はただKの健康について云々^{うんぬん}しました。一人で置くとますます人間が偏屈^{へんくつ}になるばかりだからといひました。それに付け足して、Kが養家^{ようか}と折合^{おりあひ}の悪かつた事や、実家と離れてしまつた事や、色々話して聞かせました。私は溺^{おぼ}れかかつた人を抱いて、自分の熱を向うに移してやる覚悟で、Kを引き取るのだと告げました。そのつもりであたたかい面倒を見てやつてくれと、奥さんにもお嬢さんにも頼みました。私はここまで来て漸々^{ようよう}奥さんを説き伏せたのです。しかし私から何にも聞かないKは、この顛末^{てんまつ}をまるで知らずにいまし

夏目漱石

た。私もかえつてそれを満足に思つて、のっそり引き移つて来たKを、知らん顔で迎へました。

奥さんとお嬢さんは、親切に彼の荷物を片付ける世話や何かをしてくれました。すべてそれを私に対する好意から来たのだと解釈した私は、心のうちで喜びました。――Kが相変らずむつちりした様子をしているにもかかわらず。

私がKに向つて新しい住居すまいの心持はどうだと聞いた時に、彼はただ一言悪くないといつただけでした。私からいわせれば悪くないどころではないのです。彼の今までいた所は北向きの湿つぽい臭いにおのする汚い室へやでした。食物くいものも室相応そうおうに粗末でした。私の家へ引き移つた彼は、幽谷ゆうこくから喬木きやうぼくに移つた趣があつたくらいです。それをさほどに思う気色けしきを見せないのは、一つは彼の強情から来ているのですが、一つは彼の主張からも出ているのです。仏教の教義で養われた彼は、衣食住についてとかくの贅沢ぜいたくをいうのをあたかも不道德のように考へていました。なまじい昔の高僧だとか聖徒せいとだとかの伝でんを読んだ彼には、ややともすると精神と肉体とを切り離したがる癖がありました。肉を鞭撻べんたつすれば霊の光輝が増すように感ずる場合さえあつたのかも知れません。

夏目漱石

私はなるべく彼に逆^{さか}らわないう方針を取りました。私は氷を日^ひ向^{なた}へ出して溶^とかす工夫をしたのです。今に融^とけて温かい水になれば、自分で自分に気が付く時機が来るに違いないと思つたのです。

二十四

「私は奥さんからそういう風に取り扱われた結果、段々快活になつて来たのです。それを自覚していたから、同じものを今度はKの上に応用しようと試みたのです。Kと私とが性格の上において、大分相違のある事は、長く交際つて来た私によく解つていましたけれども、私の神経がこの家庭に入ってから多少角が取れたごとく、Kの心もここに置けばいつか沈まる事があるだろうと考えたのです。

Kは私より強い決心を有している男でした。勉強も私の倍ぐらいはしたでしょう。その上持つて生れた頭の質が私よりもずっとよかったです。後では専門が違いましたから何ともいえませんが、同じ級にいる間は、中学でも高等学校でも、Kの方が常に上席を占めていました。私には平生から何をしてもKに及ばないという自覚があつたくらいです。けれども私が強いてKを私の宅へ引っ張つて来た時には、私の方がよく事理を弁えていたと信じていました。私にいわせると、彼は我慢と忍耐の区別を了解していないように思われたのです。これはとくにあなたのために付け足しておきたいのですから聞いて下さい。肉

夏目漱石

体なり精神なりすべて我々の能力は、外部の刺戟^{しげき}で、発達もするし、破壊されもするでしょうが、どっちにしても刺戟を段々に強くする必要のあるのは無論ですから、よく考えないと、非常に険悪な方向へむいて進んで行きながら、自分はもちろん傍^{はた}のものも気が付かずにいる恐れが生じてきます。医者の説明を聞くと、人間の胃袋ほど横着なものはないそうです。粥^{かゆ}ばかり食っていると、それ以上の堅いものを消化^{こな}す力がいつの間にかなくなってしまうのだそうです。だから何でも食う稽古^{けいこ}をしておくと医者はいうのです。けれどもこれはただ慣れるという意味ではなからうと思います。次第に刺戟を増すに従って、次第に營養機能の抵抗力が強くなるという意味でなくてはなりません。もし反対に胃の力の方がじりじり弱って行つたなら結果はどうなるだろうと想像してみればすぐ解^{わか}る事です。Kは私より偉大な男でしたけれども、全くここに気が付いていなかったのです。ただ困難に慣れてしまえば、しまいにその困難は何でもなくなるものだと思^きめていたらしいのです。艱苦^{かんく}を繰り返せば、繰り返すというだけの功德^{くどく}で、その艱苦が気にかからなくなる時機^{めぐりあ}に邂逅^{めぐりあ}えるものと信じ切っていたらしいのです。

私はKを説くときに、ぜひそこを明らかにしてやりたかったのです。しかしいえばきつと反抗されるに極きまっていました。また昔の人の例などを、引合ひきあひに持つて来るに違いないと思いました。そうなれば私だつて、その人たちとKと違っている点を明白に述べなければならなくなります。それを首肯うけがしてくれるようなKならいいのですけれども、彼の性質として、議論がそこまでゆくと容易あとしに後へは返りません。なお先へ出ます。そうして、口で先へ出た通りを、行為で実現しに掛かります。彼はこうなると恐るべき男でした。偉大でした。自分で自分を破壊しつつ進みます。結果から見れば、彼はただ自己の成功を打ち砕く意味において、偉大なのに過ぎないのですけれども、それでも決して平凡ではありませんでした。彼の気性きしょうをよく知った私はついに何ともいう事ができなかったのです。その上私から見ると、彼は前にも述べた通り、多少神経衰弱に罹かかつていたように思われたのです。よし私が彼を説き伏せたところで、彼は必ず激するに違いないのです。私は彼と喧嘩けんかをする事は恐れてはいませんでしたけれども、私が孤独の感に堪たえなかつた自分の境遇を顧みると、親友の彼を、同じ孤独の境遇に置くのは、私に取つて忍びない事でした。一步進んで、より孤独な境遇に突き落すのはなお厭いやでした。それで私は彼が宅うちへ引き移つてからも、

石漱目夏

当分の間は批評がましい批評を彼の上に加えずにいました。ただ穏やかに周囲の彼に及ぼす結果を見る事にしたのです。

二十五

「私は陰^{かげ}へ廻^{まわ}って、奥さんとお嬢さんに、なるべくKと話をするように頼みました。私は彼のこれまで通って来た無言生活が彼に祟^{たた}っているのだろうと信じたからです。使わない鉄が腐るように、彼の心には錆^{さび}が出ていたとしか、私には思われなかったのです。

奥さんは取り付き把^はのない人だといって笑っていました。お嬢さんはまたわざわざその例を挙げて私に説明して聞かせるのです。火鉢に火があるかと尋ねると、Kはないと答えるそうです。では持つて来^きようという、要^いらないと断るそうです。寒くはないかと聞くと、寒いけれども要らないんだといったぎり応対をしないのだそうです。私はただ苦笑している訳にもゆきません。気の毒だから、何とかいつてその場を取り繕^{つくろ}っておかなければ済まなくなります。もつともそれは春の事ですから、強^しいて火にあたる必要もなかったのですが、これでは取り付き把^はがないといわれるのも無理はないと思いました。

それで私はなるべく、自分が中心になつて、女二人とKとの連絡をはかるように力^{つと}めました。Kと私が話している所^{うち}へ家の人と呼ぶとか、または家の人と私が一つ室^{へや}に落ち合っ

夏目漱石

た所へ、Kを引つ張り出すとか、どっちでもその場合に応じた方法をとつて、彼らを接近させようとしたのです。もちろんKはそれをあまり好みませんでした。ある時はふいと起つて室の外へ出ました。またある時はいくら呼んでもなかなか出て来ませんでした。Kはあんな無駄話をしてどこが面白いというのです。私はただ笑っていました。しかし心の中では、Kがそのために私を軽蔑していることがよく解りました。

私はある意味から見ても實際彼の軽蔑に値してゐたかも知れません。彼の眼の着け所は私より遙かに高いところにあつたともいわれるでしょう。私もそれを否みはしません。しかし眼だけ高くつて、外が釣り合わないのは手もなく不具です。私は何を措いても、この際彼を人間らしくするのが専一だと考えたのです。いくら彼の頭が偉い人の影像で埋まつていても、彼自身が偉くなつてゆかない以上は、何の役にも立たないという事を発見したのです。私は彼を人間らしくする第一の手段として、まず異性の傍に彼を坐らせる方法を講じたのです。そうしてそこから出る空氣に彼を曝した上、錆び付きかかった彼の血液を新しくしようと試みたのです。

この試みは次第に成功しました。初めのうち融合しにくいように見えたものが、段々一つに纏^{まと}まって来^きだしました。彼は自分以外に世界のある事を少しづつ悟^{さと}つてゆくようでした。彼はある日私に向つて、女はそう軽蔑^{けいべつ}すべきものでないというような事をいいました。Kははじめ女からも、私同様の知識と学問を要求していたらしいのです。そうしてそれが見付からないと、すぐ軽蔑の念を生じたものと思われまふ。今までの彼は、性によつて立場を変える事を知らずに、同じ視線ですべての男女^{なんによ}を一樣に觀察していたのです。私は彼に、もし我ら二人だけが男同志で永久に話を交換しているならば、二人はただ直線的に先へ延びて行くに過ぎないだろうといいました。彼はもつともだと答えました。私はその時お嬢さんの事で、多少夢中になっている頃^{ころ}でしたから、自然そんな言葉も使うようになったのでしよう。しかし裏面の消息は彼には一口^{ひとくち}も打ち明けませんでした。

今まで書物で城壁をきずいてその中に立て籠^{こも}つていたようなKの心が、段々打ち解けて来るのを見ているのは、私に取つて何よりも愉快でした。私は最初からそうした目的で事をやり出したのですから、自分の成功に伴う喜悦を感じずにはいられなかつたのです。私

夏目漱石

は本人にいわない代りに、奥さんとお嬢さんに自分の思った通りを話しました。二人も満足の様子でした。

二十六

「Kと私は同じ科におりながら、専攻の学問が違っていましたから、自然出る時や帰る時に遅速がありました。私の方が早ければ、ただ彼の空室くうしつを通り抜けるだけですが、遅いと簡単な挨拶あいさつをして自分の部屋へはいるのを例にしました。Kはいつもの眼を書物からはなして、襖ふすまを開ける私をちよつと見ます。そうしてきつと今帰ったのかといいます。私は何も答えないで点頭うなずく事もありますし、あるいはただ「うん」と答えて行き過ぎる場合もあります。」

ある日私は神田かんだに用があつて、帰りがいつもよりずっと後おくれました。私は急ぎ足に門前まで来て、格子こうしをがらりと開けました。それと同時に、私はお嬢さんの声を聞いたのです。声は慥たしかにKの室へやから出たと思ひました。玄関から真直まっすぐに行けば、茶の間、お嬢さんの部屋と二つ続いていて、それを左へ折れると、Kの室、私の室、という間取まどりなのですから、どこで誰の聲がしたくらいは、久しく厄介やっかいになつてゐる私にはよく分るのです。私はすぐ格子を締めました。するとお嬢さんの声もすぐ已やみました。私が靴を脱いでゐるうち、――

夏目漱石

私はその時分からハイカラで手数^{てかず}のかかる編上^{あみあげ}を穿^はいていたのですが、——私がここんでその靴紐^{くつひも}を解^といているうち、Kの部屋では誰の声もしませんでした。私は変に思いました。ことによると、私の疳違^{かんちがい}かも知れないと考えたのです。しかし私がいつもの通りKの室を抜けようとして、襖を開けると、そこに二人はちゃんと坐^{すわ}っていました。Kは例の通り今帰ったかといいました。お嬢さんも「お帰り」と坐ったままで挨拶しました。私には気のせいかその簡単な挨拶が少し硬^{かた}いように聞こえました。どこかで自然を踏^ふみ外^{はず}しているような調子として、私の鼓膜^{こまく}に響いたのです。私はお嬢さんに、奥さんはと尋ねました。私の質問には何の意味もありませんでした。家のうちが平常より何だかひっそりしていたから聞いて見ただけの事です。

奥さんははたして留守でした。下女^{げじょ}も奥さんといっしょに出たのでした。だから家に残っているのは、Kとお嬢さんだけだったのです。私はちよつと首を傾けました。今まで長い間世話^{ためし}になつていたけれども、奥さんがお嬢さんと私だけを置き去りにして、宅^{うち}を空した。お嬢さんはただ笑っているのです。私はこんな時に笑う女が嫌いでした。若い女に

共通な点だといえはそれまでかも知れませんが、お嬢さんも下らない事によく笑いたがる女でした。しかしお嬢さんは私の顔色を見て、すぐ不斷の表情に帰りました。急用ではないが、ちよつと用があつて出たのだと真面目に答えました。下宿人の私にはそれ以上問ひ詰める権利はありません。私は沈黙しました。

私が着物を改めて席に着くか着かないうちに、奥さんも下女も帰つて来ました。やがて晩食の食卓でみんなが顔を合わせる時刻が来ました。下宿した当座は万事客扱いだったので、食事のたびに下女が膳を運んで来てくれたのですが、それがいつの間にか崩れて、飯時には向うへ呼ばれて行く習慣になつていたのです。Kが新しく引き移った時も、私が主張して彼を私と同じように取り扱わせる事に極めました。その代り私は薄い板で造った足の畳み込める華奢な食卓を奥さんに寄附しました。今ではどこの宅でも使っているようですが、その頃そんな卓の周囲に並んで飯を食う家族はほとんどなかったのです。私はわざわざ御茶の水の家具屋へ行つて、私の工夫通りにそれを造り上げさせたのです。

私はその卓上で奥さんからその日いつもの時刻に肴屋が来なかつたので、私たちに食わせるものを買ひに町へ行かなければならなかつたのだという説明を聞かされました。なる

夏目漱石

ほど客を置いて以上の、それももつともな事だと私が考えた時、お嬢さんは私の顔を見てまた笑い出しました。しかし今度は奥さんに叱^{しか}られてすぐ已^やめました。

二十七

「二週間ばかりして私はまたKとお嬢さんがいつしよに話している室を通り抜けました。その時お嬢さんは私の顔を見るや否や笑い出しました。私はすぐ何がおかしいのかと聞けばよかったのでしよう。それをつい黙って自分の居間まで来てしまったのです。だからKもいつものように、今帰ったかと声を掛ける事ができなくなりました。お嬢さんはすぐ障子しょうじを開けて茶の間へ入ったようでした。

夕飯ゆうめしの時、お嬢さんは私を変な人だといいました。私はその時もなぜ変なのか聞かずにしまいました。ただ奥さんが睨にらめるような眼をお嬢さんに向けるのに気が付いただけでした。

私は食後Kを散歩に連れ出しました。二人は伝通院でんずういんの裏手から植物園の通りをぐるりと廻まわつてまた富坂とみざかの下へ出ました。散歩としては短い方ではありませんでしたが、その間に話した事は極めて少なかつたのです。性質きざからいうと、Kは私よりも無口な男でした。私も多弁な方ではなかつたのです。しかし私は歩きながら、できるだけ話を彼に仕掛しかけてみ

夏目漱石

ました。私の問題はおもに二人の下宿している家族についてでした。私は奥さんやお嬢さんを彼がどう見ているか知りたかったのです。ところが彼は海のものとも山のものとも見分けの付かないような返事ばかりするのです。しかもその返事は要領を得ないくせに、極めて簡単でした。彼は二人の女に関してよりも、専攻の学科の方に多くの注意を払っているように見えました。もつともそれは二年目目の試験が目の前に逼せまっている頃ころでしたから、普通の人間の立場から見て、彼の方が学生らしい学生だったのでしょう。その上彼はシュエデンボルグがどうかこうだとかいつて、無学な私を驚かせました。

我々が首尾よく試験を済ゆしました時、二人とももう後あと一年だといつて奥さんは喜んでくれました。そういう奥さんの唯一ゆいいつの誇ほこりとも見られるお嬢さんの卒業も、間もなく来る順になっていたのです。Kは私に向つて、女というものは何にも知らないで学校を出るのだといいました。Kはお嬢さんが学問以外に稽古けいこしている縫針ぬいはりだの琴だの活花いけばなだのを、まるで眼中に置いていないようでした。私は彼の迂闊うかつを笑つてやりました。そうして女の価値はそんな所にあるものでないという昔の議論をまた彼の前で繰り返しました。彼は別段反駁はんぱくもしませんでした。その代りなるほどという様子も見せませんでした。私にはそこが

夏目漱石

愉快でした。彼のふんといったような調子が、依然として女を軽蔑けいべつしているように見えたからです。女の代表者として私の知っているお嬢かさんを、物の数かずとも思っていないいらしかったからです。今から回顧すると、私のKに対する嫉妬しつとは、その時にもう充分萌きざしていたのです。

私は夏休みにどこかへ行こうかとKに相談しました。Kは行きたくないような口振くちぶりを見せました。無論彼は自分の自由意志でどこへも行ける身体からだではありませんが、私が誘いさえすれば、またどこへ行っても差支さしかえない身体だったのです。私はなぜ行きたくないのかと彼に尋ねてみました。彼は理由も何にもないというのです。宅うちで書物を読んだ方が自分の勝手だということです。私が避暑地へ行つて涼しい所で勉強した方が、身体のためだと主張すると、それなら私一人行ったらよかろうというのです。しかし私はK一人をここに残して行く気にはなれないのです。私はただでさえKと宅のものが段々親しくなつて行くのを見ているのが、余り好いい心持ではなかったのです。私が最初希望した通りになるのが、何で私の心持を悪くするのかわれればそれまでです。私は馬鹿に違いないのです。果はて

石漱目夏

しのつかない二人の議論を見るに見かねて奥さんが仲へ入りました。二人はとうとういつしよに房州^{ぼうしゅう}へ行く事になりました。

二十八

「Kはあまり旅へ出ない男でした。私にも房州は始めてでした。二人は何にも知らないで、船が一番先へ着いた所から上陸したのです。たしか保田とかいいました。今ではどんなに変わっているか知りませんが、その頃はひどい漁村でした。第一どこもかしこも腥いのです。それから海へ入ると、波に押し倒されて、すぐ手だの足だのを擦り剥くのです。拳のような大きな石が打ち寄せる波に揉まれて、始終ごろごろしているのです。」

私はすぐ厭になりました。しかしKは好いとも悪いともいいません。少なくとも顔付だけは平気なものでした。そのくせ彼は海へ入るたんびにどこかに怪我をしない事はなかったのです。私はとうとう彼を説き伏せて、そこから富浦に行きました。富浦からまた那古に移りました。すべてこの沿岸はその時分から重に学生の集まる所でしたから、どこでも我々にはちょうど手頃の海水浴場だったのです。Kと私はよく海岸の岩の上に坐つて、遠い海の色や、近い水の底を眺めました。岩の上から見下す水は、また特別に綺麗なもので

した。赤い色だの藍あゐの色だの、普通市場しじょうに上のぼらないような色をした小魚こうおが、透き通る波の中をあちらこちらと泳いでいるのが鮮やかに指さされました。

私はそこに坐つて、よく書物をひろげました。Kは何もせずに黙っている方が多かったです。私にはそれが考えに耽ふけっているのか、景色に見惚みとれているのか、もしくは好きに想像を描えがいているのか、全く解わからなかつたのです。私は時々眼を上げて、Kに何をしているのだと聞きました。Kは何もしてないと一口答ひとくちえるだけでした。私は自分の傍そばにこうじつとして坐っているものが、Kでなくつて、お嬢さんだつたらさぞ愉快だろうと思う事がよくありました。それだけならまだいいのですが、時にはKの方でも私と同じような希望を抱いだいて岩の上に坐っているのではないかしらと忽然こつぜん疑い出すのです。すると落ち付いてそこに書物をひろげているのが急に厭になります。私は不意に立ち上あがります。そうして遠慮のない大きな声を出して怒鳴どなります。纏まとまつた詩だの歌だのを面白そうに吟ぎんずるような手緩てぬるい事はできないのです。ただ野蛮人のごとくにわめくのです。ある時私は突然彼の襟えりくび頸くびを後ろからぐいと攫つかみました。こうして海の中へ突き落したらどうするといつてKに

夏目漱石

聞きました。Kは動きませんでした。後ろ向きのまま、ちょうど好い、やつてくれと答えました。私はすぐ首筋を抑えた手を放しました。

Kの神経衰弱はこの時もう大分よくなっていたらしいのです。それと反比例に、私の方は段々過敏になって来ていたのです。私は自分より落ち付いているKを見て、羨ましがりました。また憎らしがりました。彼はどうしても私に取り合う気色を見せなかったからです。私にはそれが一種の自信のごとく映りました。しかしその自信を彼に認めたところで、私は決して満足できなかったのです。私の疑いはもう一步前へ出て、その性質を明らかにすることがりました。彼は学問なり事業なりについて、これから自分の進んで行くべき前途の光明を再び取り返した心持になったのだろうか。単にそれだけならば、Kと私との利害に何の衝突の起る訳はないのです。私はかえって世話のし甲斐があつたのを嬉しく思うくらいなものです。けれども彼の安心がもしお嬢さんに対してであるとすれば、私は決して彼を許す事ができなくなるのです。不思議にも彼は私のお嬢さんを愛している素振に全く気が付いていないように見えました。無論私もそれがKの眼に付くようにわざとらしくは振舞い

夏目漱石

K なら大丈夫という安心があつたので、彼をわざわざ宅^{うち}へ連れて来たのです。私には最初から
ませんでしたけれども。Kは元来そういう点にかけると鈍^{にぶ}い人なのです。

二十九

「私は思い切つて自分の心をKに打ち明けようと思いました。もつともこれはその時に始まった訳でもなかったのです。旅に出ない前から、私にはそうした腹ができていたのですけれども、打ち明ける機会をつらまえる事も、その機会を作り出す事も、私の手際では旨くゆかなかつたのです。今から思うと、その頃私の周囲にいた人間はみんな妙でした。女に関して立ち入った話などをするものは一人もありませんでした。中には話す種をもたないのも大分いたでしょうが、たといもつていても黙っているのが普通のようにでした。比較的自由的な空気を呼吸している今のあなたがたから見たら、定めし変に思われるでしょう。それが道学の余習なのか、または一種のはにかみなのか、判断はあなたの理解に任せておきます。

Kと私は何でも話し合える中でした。偶には愛とか恋とかいう問題も、口に上らないではありませんでした。いつでも抽象的な理論に落ちてしまふだけでした。それも滅多には話題にならなかつたのです。大抵は書物の話と学問の話と、未来の事業と、抱負と、修

夏目漱石

養の話ぐらいで持ち切っていたのです。いくら親しくつてもこう堅くなつた日には、突然調子を崩せるものではありません。二人はただ堅いなりに親しくなるだけです。私はお嬢さんの事をKに打ち明けようと思い立つてから、何遍齒がゆい不快に悩まされたか知れません。私はKの頭のどこか一カ所を突き破つて、そこから柔らかな空気を吹き込んでやりたい気がしました。

あなたがたから見て笑止千萬な事もその時の私には実際大困難だったのです。私は旅先でも宅にいた時と同じように卑怯でした。私は始終機会を捕える気でKを観察していながら、変に高踏的な彼の態度をどうする事もできなかったのです。私にいわせると、彼の心臓の周囲は黒い漆で重く塗り固められたのも同然でした。私の注ぎ懸けようとする血潮は、一滴もその心臓の中へは入らないで、悉く弾き返されてしまうのです。

或る時はあまりKの様子が強くて高いので、私はかえつて安心した事もあります。そうして自分の疑いを腹の中で後悔すると共に、同じ腹の中で、Kに詫びました。詫びながら自分が非常に下等な人間のように見えて、急に厭な心持になるのです。しかし少時すると、以前の疑いがまた逆戻りをして、強く打ち返して来ます。すべてが疑いから割り出される

のですから、すべてが私には不利益でした。容貌もKの方が女に好かれるように見えましたが、性質も私のようにこせこせしていないところが、異性には気に入るだろうと思われしました。どこか間が抜けていて、それでどこかに確かりした男らしいところのある点も、私よりは優勢に見えました。学力になれば専門こそ違いますが、私は無論Kの敵でないと自覚していました。――すべて向うの好いところだけがこう一度に眼先へ散らつき出すと、ちよつと安心した私はすぐ元の不安に立ち返るのです。

Kは落ち付かない私の様子を見て、厭ならひとまず東京へ帰つてもいいといったのですが、そういわれると、私は急に帰りたくなりませんでした。実はKを東京へ帰したくなかつたのかも知れません。二人は房州の鼻を廻つて向う側へ出しました。我々は暑い日に射られながら、苦しい思いをして、上総のそこ一里に騙されながら、うんうん歩きました。私にはそうして歩いている意味がまるで解らなかつたくらいです。私は冗談半分Kにそういいました。するとKは足があるから歩くのだと答えました。そうして暑くなると、海に入つて行こうといつて、どこでも構わず潮へ漬りました。その後をまた強い日で照り付けられるのですから、身体が倦怠くてぐたぐたになりました。

三十

「こんな風ふうにして歩いてみると、暑さと疲労とで自然身体からだの調子が狂つて来るものです。もつとも病氣とは違います。急に他ひとの身体の中へ、自分の靈魂が宿替やどがえをしたような気分になるのです。私は平生わたしへいぜいの通りKと口を利ききながら、どこかで平生の心持と離れるようになりました。彼に対する親しみも憎しみも、旅中限りよちゅうかぎりという特別な性質を帯おびる風になったのです。つまり二人は暑さのため、潮しほのため、また歩行のため、在来と異なつた新しい関係に入る事ができたのでしょう。その時の我々はあたかも道づれになつた行商ぎやうしょうのようなものでした。いくら話をしていとも違つて、頭を使う込み入つた問題には触れませんした。

我々はこの調子でとうとう銚子ちようしまで行つたのですが、道中たつた一つの例外があつたのを今に忘れる事ができないのです。まだ房州を離れない前、二人は小湊こみなとという所で、鯛たいの浦うらを見物しました。もう年数ねんすうもよほど経たつていますし、それに私にはそれほど興味の無い事です。判然はんぜんとは覚えていませんが、何でもそこは日蓮にちれんの生れた村だとかいう話でした。

夏目漱石

た。日蓮の生れた日に、鯛が二尾磯^{びいそ}に打ち上げられていたとかいう言伝^{いいつた}えになつてゐるのです。それ以来村の漁師が鯛をとる事を遠慮して今に至つたのだから、浦には鯛が沢山ゐるのです。我々は小舟^{やと}を傭^{やと}つて、その鯛をわざわざ見に出掛けたのです。

その時私はただ一図^{いちず}に波を見ていました。そうしてその波の中に動く少し紫がかつた鯛の色を、面白い現象の一つとして飽かず眺めました。しかしKは私ほどそれに興味をもち得なかつたものとみえます。彼は鯛よりもかえつて日蓮の方を頭の中で想像していたらしいのです。ちようどそこに誕生寺^{たんじょうじ}という寺がありました。日蓮の生れた村だから誕生寺とでも名を付けたものでしょう、立派な伽藍^{がらん}でした。Kはその寺に行つて住持^{じゅうじ}に会つてみるといい出しました。実をいうと、我々はずいぶん変な服装^{なふり}をしていたのです。ことにKは風のために帽子を海に吹き飛ばされた結果、菅笠^{すががさ}を買つて被^{かぶ}つていました。着物は固^{もと}より双方とも垢^{あか}じみた上に汗で臭^{くさ}くなつていました。私は坊さんなどに会うのは止^とそうといいました。Kは強情^{じやうじやう}だから聞きません。厭^{いや}なら私だけ外に待つていろというのです。私は仕方がないからいっしょに玄関にかかりましたが、心のうちではきつと断られるに違いないと思つていました。ところが坊さんというものは案外^{ていねい}丁寧なもので、広い立派な座敷へ私

夏目漱石

たちを通して、すぐ会ってくれました。その時分の私はKと大分^{だいぶん}考えが違っていましたから、坊さんとKの談話にそれほど耳を傾ける気も起きませんでした。Kはしきりに日蓮の事を聞いていたようです。日蓮は草日蓮^{そうにちれん}といわれるくらいで、草書^{そうしょ}が大変上手であつたと坊さんがいった時、字の拙^{ます}いKは、何だ下らないという顔をしたのを私はまだ覚えています。Kはそんな事よりも、もつと深い意味の日蓮が知リたかつたのでしよう。坊さんがその点でKを満足させたかどうかは疑問ですが、彼は寺の境内^{けいだい}を出ると、しきりに私に向つて日蓮の事を云々^{うんぬん}し出しました。私は暑くて草臥^{くたび}れて、それどころではありませんでしたから、ただ口の先で好^いい加減な挨拶^{あいさつ}をしていました。それも面倒になつてしまひには全く黙つてしまつたのです。

たしかその翌^{あく}の晩の事だと思ひますが、二人は宿へ着いて飯^{めし}を食つて、もう寝ようといふ少し前になつてから、急にむずかしい問題を論じ合ひ出しました。Kは昨日^{きのう}自分の方から話しかけた日蓮の事について、私を取り合ひなかつたのを、快く思つていなかったのです。精神的に向上心がないものは馬鹿だといつて、何だか私をさも輕薄もののようにやり

石漱目夏

込めるのです。ところが私の胸にはお嬢さんの事が蟠わだかまっていますから、彼の侮蔑おごべつに近い言葉をただ笑って受け取る訳にいきません。私は私で弁解を始めたのです。

三十一

「その時私はしきりに人間らしいという言葉を使いました。Kはこの人間らしいという言葉のうちに、私が自分の弱点のすべてを隠しているというのです。なるほど後から考えれば、Kのいう通りでした。しかし人間らしくない意味をKに納得させるためにその言葉を使い出した私には、^{しゅったつてん}出立点がすでに反抗的でしたから、それを反省するような余裕はありません。私はなおの事自説を主張しました。するとKが彼のどこをつらまえて人間らしくないというのかと私に聞くのです。私は彼に告げました。――君は人間らしいのだ。あるいは人間らし過ぎるかも知れないのだ。けれども口の前だけでは人間らしくないような事をいうのだ。また人間らしくないように振舞おうとするのだ。

私がこういった時、彼はただ自分の修養が足りないから、^{ひと}他にはそう見えるかも知れないと答えただけで、^{いつしう}一向私を反駁^{はんぱく}しようとしませんでした。私は張合いが抜けたというよりも、かえって気の毒になりました。私はすぐ議論をそこで切り上げました。彼の調子もだんだん沈んで来ました。もし私が彼の知っている通り昔の人を知るならば、そんな攻撃

はしないだろうといつて悵然^{ちやうぜん}としていました。Kの口にした昔の人とは、無論英雄でもなければ豪傑でもないのです。霊のために肉を虐^{しいた}げたり、道のために体を鞭^{むち}うったりしたいわゆる難行苦行^{なんぎょうくぎやう}の人を指すのです。Kは私に、彼がどのくらいそのために苦しんでいるかわ^わか解^わらないのが、いかにも残念だと明言しました。

Kと私とはそれぎり寝てしまいました。そうしてその翌^{あぐ}る日からまた普通の行商^{ぎやうしやう}の態度に返つて、うんうん汗を流しながら歩き出したのです。しかし私は路々^{みちみち}その晩の事をひよいひよいと思ひ出しました。私にはこの上もない好^いい機会が与えられたのに、知らない振^ふりをしてなぜそれをやり過^{すご}したのだろうという悔恨^{ちやくせつ}の念が燃えたのです。私は人間らしいという抽象的な言葉を用いる代りに、もつと直截^{ちやくせつ}で簡単な話をKに打ち明けてしまえば好かつたと思ひ出したのです。実をいうと、私がそんな言葉を創造したものも、お嬢さんに対する私の感情が土台になつていたのですから、事実^{じやうじつ}を蒸溜^{じやうりゆう}して拵^{こしら}えた理論などをKの耳に吹き込むよりも、原^{もと}の形^{かたち}そのままを彼の眼の前に露出した方が、私にはたしかに利益だつたでしょう。私にそれができなかったのは、学問の交際が基調を構成している二人の親^{おのず}しみに、自^{おのず}から一種の惰性^{おのず}があつたため、思ひ切つてそれを突き破るだけの勇氣が私に

夏目漱石

欠けていたのだという事をここに自白します。気取り過ぎたといつても、虚栄心が祟^{たた}つたといつても同じでしょうが、私のいう気取るとか虚栄とかいう意味は、普通のとは少し違います。それがあなたに通じさえすれば、私は満足なのです。

我々は真黒になつて東京へ帰りました。帰つた時は私の気分がまた變つていました。人間らしいとか、人間らしくないとかいう小理屈^{こりくつ}はほとんど頭の中に残つていませんでした。Kにも宗教家らしい様子が全く見えなくなりました。おそらく彼の心のどこにも靈がどうの肉がどうのという問題は、その時宿つていなかったでしょう。二人は異人種のような顔をして、忙しそうに見える東京をぐるぐる眺^{なが}めました。それから両国^{りやうごく}へ来て、暑いのに軍鶏^{しやも}を食いました。Kはその勢^{いきお}いで小石川^{こいしかわ}まで歩いて帰ろうというのです。体力からいえばKよりも私の方が強いのですから、私はすぐ応じました。

宅^{うち}へ着いた時、奥さんは二人の姿を見て驚きました。二人はただ色が黒くなつたばかりでなく、むやみに歩いていたうちに大変瘡^やせてしまつたのです。奥さんはそれでも丈夫そうになつたといつて賞^ほめてくれるのです。お嬢さんは奥さんの矛盾がおかしいといつてま

石漱目夏

た笑い出しました。旅行前時々腹の立つた私も、その時だけは愉快な心持がしました。場合場合なのと、久しぶりに聞いたせいでしょう。場

三十二

「それのみならず私はお嬢さんの態度の少し前と変っているのに気が付きました。久しぶりで旅から帰った私たちが平生の通り落ち付くまでには、万事について女の手が必要だったので、その世話をしてくれる奥さんとはにかく、お嬢さんがすべて私の方を先にして、Kを後廻しあとまわしにするように見えたのです。それを露骨にやられては、私も迷惑したかも知れません。場合によってはかえって不快の念さえ起しかねなかつたろうと思うのですが、お嬢さんの所作しよさはその点で甚だ要領を得ていたから、私は嬉うれしかつたのです。つまりお嬢さんは私だけに解わかるように、持前もちまえの親切を余分に私の方へ割り宛あててくれたのです。だからKは別に厭いやな顔もせず平気でいました。私は心の中うちでひそかに彼に対する愷歌がいかを奏しました。

やがて夏も過ぎて九月の中頃なかごろから我々はまた学校の課業に出席しなければならぬ事になりました。Kと私とは各自てんでんの時間の都合で出入りの刻限にまた遅速ができてきました。私がKより後おくれて帰る時は一週に三度ほどありましたが、いつ帰ってもお嬢さんの影をK

夏目漱石

の室^{へや}に認める事はないようになりました。Kは例の眼を私の方に向けて、「今帰ったのか」を規則のごとく繰り返しました。私の会釈もほとんど器械のごとく簡単でかつ無意味でした。

たしか十月の中頃と思います。私は寢坊^{ねぼう}をした結果、日本服^{にほんふく}のまま急いで学校へ出た事があります。穿物^{はきもの}も編上^{あみあげ}などを結んでいる時間が惜しいので、草履^{ぞうり}を突っつけたなり飛び出したのです。その日は時間割からいうと、Kよりも私の方が先へ帰るはずになっていました。私は戻って来ると、そのつもりで玄関の格子^{こうし}をがらりと開けたのです。するといいと思っていたKの声がひよいと聞こえました。同時にお嬢さんの笑い声が私の耳に響きました。私はいつものように手数^{てかず}のかかる靴^はを穿いていないから、すぐ玄関に上がって仕切^{ふすま}の襖を開けました。私は例の通り机の前に坐^{すわ}っているKを見ました。しかしお嬢さんはもうそこにはいなかったのです。私はあたかもKの室^{へや}から逃^{のが}れ出るように去るその後姿^{うしろすがた}をちらりと認めただけでした。私はKにどうして早く帰ったのかと問いました。Kは心持が悪いから休んだのだと答えました。私が自分の室^{へや}にはいつてそのまま坐っていると、間もなくお嬢さんが茶を持って来てくれました。その時お嬢さんは始めてお帰りといつて私

夏目漱石

に挨拶あいさつをしました。私は笑いながらさつきはなぜ逃げたんですと聞けるような捌さばけた男ではありません。それでいて腹の中では何だかその事が気にかかるような人間だったのです。お嬢さんはすぐ座を立てて縁側えんがわづた伝いに向うへ行つてしまいました。しかしKの室の前に立ち留ふたことみことまつて、二言三言内と外とで話をしていました。それは先刻さつきの続きらしかったのですが、前を聞かない私にはまるで解りませんでした。

そのうちお嬢さんの態度がだんだん平気になつて来ました。Kと私がいつしよに宅うちにいる時でも、よくKの室へやの縁側へ来て彼の名を呼びました。そうしてそこへ入つて、ゆつくりしていました。無論郵便を持つて来る事もあるし、洗濯物を置いてゆく事もあるのでから、そのくらいの交通は同じ宅にいる二人の関係上、当然と見なければならぬのでしようが、ぜひお嬢さんを専有したいという強烈な一念に動かされている私には、どうしてもそれが当然以上に見えたのです。ある時はお嬢さんがわざわざ私の室へ来るのを回避して、Kの方ばかりへ行くように思われる事さえあつたくらいです。それならなぜKに宅を出てもらわないのかとあなたは聞くでしょう。しかしそうすれば私がKを無理に引張ひっぱつて来た主意が立たなくなるだけです。私にはそれができないのです。

三十三

「十一月の寒い雨の降る日の事でした。私は外套わたくしがいとうを濡ぬらして例の通り蒟蒻こんにやくえんま魔まを抜けて細い坂路さかみちを上あがって宅うちへ帰りました。Kの室は空虚がらんどうでしたけれども、火鉢には継つぎたての火が暖かそうに燃えていました。私も冷たい手を早く赤い炭の上に翳かきそうと思つて、急いで自分の室の仕切りしきを開けました。すると私の火鉢には冷たい灰が白く残つていただけで、火種ひだねさえ尽きているのです。私は急に不愉快になりました。

その時私の足音を聞いて出て来たのは、奥さんでした。奥さんは黙つて室の真中に立つている私を見て、気の毒そうに外套を脱がせてくれたり、日本服を着せてくれたりしました。それから私が寒いというのを聞いて、すぐ次の間まからKの火鉢を持つて来てくれました。私がKはもう帰つたのかと聞きましたら、奥さんは帰つてまた出たと答えました。その日もKは私おくより後おくれて帰る時間割だったのですから、私はどうした訳かと思いました。奥さんは大方用事おおかたでもできたのだらうといつていました。

私はしばらくそこに坐^{すわ}ったまま書見^{しよけん}をしました。宅^{たく}の中がしんと静まつて、誰^{だれ}の話^わし声^{こゑ}も聞^{きこ}えないうちに、初冬^{はつふゆ}の寒^ふさと佗^わびしきとが、私の身体^{からだ}に食い込むような感じがしました。私はすぐ書物を伏せて立ち上りました。私はふと賑^{にぎ}やかな所へ行きたくなつたのです。雨はやつと歇^{あが}つたようですが、空はまだ冷たい鉛^{えん}のように重く見えたので、私は用心のため、蛇^{じゃ}の目^めを肩^{かた}に担^かいで、砲兵工廠^{ほうへいこうしやう}の裏手の土塀^{どべい}について東へ坂を下^おりました。その時分はまだ道路の改正ができない頃^{ころ}なので、坂の勾配^{こうばい}が今よりもずっと急でした。道幅も狭くて、ああ真直^{まつすぐ}ではなかつたのです。その上あの谷へ下^{くだ}りると、南が高い建物で塞^{ふさ}がつているのと、放水^{みずはき}がよくないので、往来はどろどろでした。ことに細い石橋を渡つて柳町^{やなぎまち}の通りへ出る間が非道^{ひど}かつたのです。足駄^{あしだ}でも長靴でもむやみに歩く訳にはゆきません。誰でも路^{みち}の真中に自然と細長く泥が掻^かき分けられた所を、後生大事^{ごしやうだいじ}に辿^{たど}つて行かなければならないのです。その幅は僅^{わず}か一、二尺^{しやく}しかないのでから、手もなく往来に敷いてある帯の上を踏んで向うへ越すのと同じ事です。行く人はみんな一列になつてそろそろ通り抜けます。私はこの細帯の上で、はたりとKに出合いました。足の方にばかり気を取られていた私は、彼と向き合うまで、彼の存在にまるで気が付かず^きにいたのです。私は不意

に自分の前が塞^{ふさ}がったので偶然眼を上げた時、始めてそこに立っているKを認めたのです。私はKにどこへ行つたのかと聞きました。Kはちよつとそこまでといったぎりでした。彼の答えはいつもの通りふんという調子でした。Kと私は細い帯の上で身体を替^かせました。するとKのすぐ後ろに一人の若い女が立っているのが見えました。近眼の私には、今までそれがよく分らなかつたのですが、Kをやり越した後^{あと}で、その女の顔を見ると、それが宅のお嬢さんだったので、私は少なからず驚きました。お嬢さんは心持薄赤い顔をして、私に挨拶^{あいさつ}をしました。その時分の束髪^{そくはつ}は今と違つて廂^{ひさし}が出ていないのです、そうして頭の真中^{まんなか}に蛇^{へび}のようにぐるぐる巻きつけてあつたものです。私はぼんやりお嬢さんの頭を見えていましたが、次の瞬間に、どつちか路^{みち}を譲らなければならぬのだという事に気が付きました。私は思い切つてどろどろの中へ片足踏^ふん込みました。そうして比較的通りやすい所を空^あけて、お嬢さんを渡してやりました。

それから柳町の通りへ出た私はどこへ行つて好^いいか自分にも分らなくなりました。どこへ行つても面白くないような心持がするのです。私は飛泥^{はね}の上がるのも構わずに、糠^{ぬか}る海^みの中を自暴^{やけ}にどしどし歩きました。それから直^すぐ宅へ歸つて来ました。

三十四

「私はKに向つてお嬢さんといつしよに出たのかと聞きました。Kはそうではないと答えました。真砂町で偶然出会ったから連れ立つて帰つて来たのだと説明しました。私はそれ以上に立ち入った質問を控えなければなりませんでした。しかし食事の時、またお嬢さんに向つて、同じ問いを掛けたくなりました。するとお嬢さんは私の嫌いな例の笑い方をするのです。そうしてどこへ行つたか中ててみるとしまいというのです。その頃の私はまだ癩癩持ちでしたから、そう不真面目に若い女から取り扱われると腹が立ちました。ところがそこに気の付くのは、同じ食卓に着いているもののうちで奥さん一人だったのです。Kはむしろ平気でした。お嬢さんの態度になると、知つてわざとやるのか、知らないで無邪気にやるのか、その区別がちよつと判然しない点がありました。若い女としてお嬢さんは思慮に富んだ方でしたけれども、その若い女に共通な私の嫌いなところも、あると思えば思えなくなかつたのです。そうしてその嫌いなところは、Kが宅へ来てから、始めて私の眼に着き出したのです。私はそれをKに対する私の嫉妬に歸していいものか、ま

たは私に對するお嬢さんの技巧と見倣みなしてしかるべきものか、ちよつと分別に迷いました。私は今でも決してその時の私の嫉妬心を打ち消す気はありません。私はたびたび繰り返した通り、愛の裏面りめんにこの感情の働きを明らかに意識していたのですから。しかも傍はたのものから見ると、ほとんど取るに足りない瑣事さじに、この感情がきつと首を持ち上げたがるのでしたから。これは余事よじですが、こういう嫉妬しつとは愛の半面じゃないでしょうか。私は結婚してから、この感情がだんだん薄らいで行くのを自覚しました。その代り愛情の方も決して元のように猛烈ではないのです。

私はそれまで躊躇ちゅうちよしていた自分の心を、一思ひとおもいに相手の胸へ擲たたき付けようかと考え出しました。私の相手というのはお嬢さんではありません、奥さんの事です。奥さんにお嬢さんを呉くれろと明白な談判を開こうかと考えたのです。しかしそう決心しながら、一日一日と私は断行の日を延ばして行つたのです。そういうと私はいかにも優柔な男のように見えます、また見えても構いませんが、實際私の進みかねたのは、意志の力に不足があつたためではありません。Kの来ないうちは、他の手ひとに乗るのが厭いやだという我慢が私を抑え付けて、一步も動けないようにしていました。Kの来た後のちは、もしかするとお嬢さんがKの方

に意があるのではなからうかという疑念が絶えず私を制するようになったのです。はたしてお嬢さんが私よりもKに心を傾けているならば、この恋は口へいい出す価値のないものと私は決心していたのです。恥を掻かせられるのが辛いなどというのとは少し訳が違います。こつちでいくら思っても、向うが内心他の人に愛の眼を注いでいるならば、私はそんな女といっしょになるのは厭なのです。世の中では否応なしに自分の好いた女を嫁に貰って嬉しがっている人もありますが、それは私たちよりよっぽど世間ずれのした男か、さもなければ愛の心理がよく呑み込めない鈍物のする事と、当時の私は考えていたのです。一度貰ってしまえばどうかこうか落ち付くものだらうの哲理では、承知する事ができないくらい私は熱していました。つまり私は極めて高尚な愛の理論家だったのです。同時にもつとも迂遠な愛の実際家だったのです。

肝心のお嬢さんに、直接この私というものを打ち明ける機会も、長くいっしょにいるうちには時々出て来たのですが、私はわざとそれを避けました。日本の習慣として、そういう事は許されていないのだという自覚が、その頃の私には強くありました。しかし決してそればかりが私を束縛したとはいえません。日本人、ことに日本の若い女は、そんな場合

夏目漱石

に、相手に気^き兼^{かね}なく自分の思った通りを遠慮せずに口にするだけの勇氣に乏しいものと私は見込んでいたのです。

三十五

「こんな訳で私はどちらの方面へ向つても進む事ができずに立ち竦んでいました。身体からだの悪い時に午睡ひるねなどを見ると、眼だけ覚めて周囲のものが判然はつきり見えるのに、どうしても手足の動かせない場合があります。私は時としてああいう苦しみを人知れず感じたのです。その内年うちが暮れて春になりました。ある日奥さんがKに歌留多かるたをやるから誰か友達だれを連れて来ないかといった事があります。するとKはすぐ友達などは一人もないと答えたので、奥さんは驚いてしまいました。なるほどKに友達というほどの友達は一人もなかったのです。往来で会った時挨拶あいさつをするくらいのもは多少ありました、それらだつて決して歌留多かるたなどを取る柄がらではなかったのです。奥さんはそれじゃ私の知ったものでも呼んで来たらどうかといひ直しましたが、私も生憎あいにくそんな陽気な遊びをする心持になれないので、好い加減な生返事なまへんじをしたなり、打ちやつておきました。ところが晩になつてKと私はとうとうお嬢さんに引つ張り出されてしまいました。客も誰も来ないので、内々うちうちの小人数こにんずだけで取ろうという歌留多ですからすこぶる静かなものでした。その上こういう遊技をやり付

夏目漱石

けないKは、まるで懷手ふところをしている人と同様でした。私はKに一体百人一首ひやくにんいつしゅの歌を知っているのかと尋ねました。Kはよく知らないと答えました。私の言葉を聞いたお嬢さんは、大方おおかたKを輕蔑けいべつするとても取ったのでしよう。それから眼に立つようにKの加勢をし出しました。しまいには二人がほとんど組になつて私に当るといふ有様になつて来ました。私は相手次第では喧嘩けんかを始めたかも知れなかつたのです。幸いにKの態度は少しも最初と変わりませんでした。彼のどこにも得意らしい様子を認めなかつた私は、無事にその場を切り上げる事ができました。

それから二、三日経たつた後の事のちでしたらう、奥さんとお嬢さんは朝から市ヶ谷にいる親類の所へ行くといつて宅うちを出ました。Kも私もまだ学校の始まらない頃ころでしたから、留守居同様あとに残っていました。私は書物を読むのも散歩に出るのも厭いやだつたので、ただ漠然と火鉢の縁ふちに肱ひじを載せて凝じつと頤あごを支えたなり考えていました。隣の室とまりにいるKも一向音を立てませんでした。双方ともいるのだから分らないくらい静かでした。もつともこういう事は、二人の間柄として別に珍しくも何ともなかつたのですから、私は別段それを氣にも留めませんでした。

十時頃になって、Kは不意に仕切りの襖を開けて私と顔を見合せました。彼は敷居の上に立ったまま、私に何を考えていると聞きました。私はもとより何も考えていなかったのです。もし考えていたとすれば、いつもの通りお嬢さんが問題だったかも知れません。そのお嬢さんには無論奥さんも食つ付いていますが、近頃ではK自身が切り離すべからざる人のように、私の頭の中をぐるぐる回つて、この問題を複雑にしているのです。Kと顔を見合せた私は、今まで臆氣に彼を一種の邪魔ものの如く意識していながら、明らかにそうと答える訳にいなかったのです。私は依然として彼の顔を見て黙っていました。するとKの方からつかつかと私の座敷へ入つて来て、私のあたつてゐる火鉢の前に坐りました。私はすぐ両脇を火鉢の縁から取り除けて、心持それをKの方へ押しやるようにしました。Kはいつもに似合わない話を始めました。奥さんとお嬢さんは市ヶ谷のどこへ行つたのだらうというのです。私は大方叔母さんの所だらうと答えました。Kはその叔母さんは何だともた聞きます。私はやはり軍人の細君だと教えてやりました。すると女の年始は大抵十五日過だのに、なぜそんなに早く出掛けたのだらうと質問するのです。私はなぜだか知らないとい挨拶するより外に仕方がありませんでした。

三十六

「Kはなかなか奥さんとお嬢さんの話を已めませんでした。しまいには私も答えられないような立ち入った事まで聞くのです。私は面倒よりも不思議の感に打たれました。以前私の方から二人を問題にして話しかけた時の彼を思い出すと、私はどうしても彼の調子の変つているところに気が付かずにはいられないのです。私はとうとうなぜ今日に限つてそんな事ばかりいうのかと彼に尋ねました。その時彼は突然黙りました。しかし私は彼の結んだ口元の肉が顫えるように動いているのを注視しました。彼は元来無口な男でした。平生から何かいおうとすると、いう前によく口のあたりをもぐもぐさせる癖がありました。彼の唇がわざと彼の意志に反抗するように容易く開かないところに、彼の言葉の重みも籠つていたのでしよう。一旦声が口を破つて出るとなると、その声には普通の人よりも倍の強い力がありました。

彼の口元をちよつと眺めた時、私はまた何か出て来るなとすぐ瘡付いたのですが、それがはたして何の準備なのか、私の予覚はまるでなかったのです。だから驚いたのです。彼

の重々しい口から、彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像してみ
て下さい。私は彼の魔法棒のために一度に化石されたようなものです。口をもぐもぐさせ
る働きさえ、私にはなくなつてしまつたのです。

その時の私は恐ろしさの塊りかたまりといひましようか、または苦しさの塊りといひましようか、
何しろ一つの塊りでした。石か鉄のように頭から足の先までが急に固くなつたのです。呼
吸をする弾力性さえ失われたくらいに堅くなつたのです。幸いな事にその状態は長く続き
ませんでした。私は一瞬間のちの後に、また人間らしい気分を取り戻しました。そうして、す
ぐ失策しまつたと思ひました。先を越せんされたなと思ひました。

しかしその先をどうしようという分別はまるで起りません。恐らく起るだけの余裕がな
かつたのでしよう。私は腋わきの下から出る気味のわるい汗が襯衣シャツに滲しみみ透とおるのを凝じつと我慢し
て動かずにいました。Kはその間あいだいつもの通り重い口を切つては、ぽつりぽつりと自分の
心を打ち明けてゆきます。私は苦しくつて堪たりませんでした。おそらくその苦しさは、大
きな広告のように、私の顔の上に判然はつきりした字で貼り付けられてあつたらうと私は思うの
です。いくらKでもそこに氣の付かないはずはないのですが、彼はまた彼で、自分の事に

夏目漱石

一切を集中しているから、私の表情などに注意する暇がなかったのでしょう。彼の告白は最初から最後まで同じ調子で貫いていました。重くて鈍い代りに、とても容易な事では動かせないという感じを私に与えたのです。私の心は半分その告白を聞いていながら、半分どうしようどうしようという念に絶えず掻き乱されていましたから、細かい点になるとほとんど耳へ入らないと同様でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子だけは強く胸に響きました。そのために私は前いつた苦痛ばかりでなく、ときには一種の恐ろしきを感じるようになったのです。つまり相手は自分より強いのだという恐怖の念が萌し始めたのです。Kの話が一通り済んだ時、私は何ともいう事ができませんでした。こつちも彼の前に同じ意味の告白をしたものだろうか、それとも打ち明けずにいる方が得策だろうか、私はそんな利害を考えて黙っていたのではありません。ただ何事もいえなかったのです。またいう気にもならなかったのです。

夕食の時、Kと私は向い合せて席を占めました。下女に給仕をしてもらって、私はいつにない不味い飯を済ませました。二人は食事中もほとんど口を利きませんでした。奥さんとお嬢さんはいつ帰るのだから分りませんでした。

三十七

「二人は各自の室に引き取ったがり顔を合わせませんでした。Kの静かな事は朝と同じでした。私も凝^{わたくし}と考え込んでいました。

私は当然自分の心をKに打ち明けるべきはずだと思いました。しかしそれにはもう時機^{おき}が後れてしまったという気も起りました。なぜ先刻^{さつき}Kの言葉を遮^{さへぎ}って、こつちから逆襲しなかったのか、そこが非常な手落^{てぬか}りのように見えて来ました。せめてKの後に続いて、自分^{おれ}は自分の思う通りをその場で話してしまつたら、まだ好かつたろうにとも考えました。

Kの自白に一段落が付いた今となつて、こつちからまた同じ事を切り出すのは、どう思案しても変でした。私はこの不自然に打ち勝つ方法を知らなかったのです。私の頭は悔恨に揺^ゆられてぐらぐらしました。

私はKが再び仕切^{しき}りの襖^{ふすま}を開^あけて向うから突進してきてくれれば好いと思ひました。私にいわせれば、先刻はまるで不意撃^{ふいうち}に会つたものと同じでした。私にはKに応ずる準備も何もなかったのです。私は午前に失つたものを、今度は取り戻そうという下心^{したこころ}を持っています。

夏目漱石

た。それで時々眼を上げて、襖を眺めました。しかしその襖はいつまで経つても開きません。そうしてKは永久に静かなのです。

その内私の頭は段々この静かさに掻き乱されるようになって来ました。Kは今襖の向うで何を考えているだろうと思うと、それが気になつて堪らないのです。不断もこんな風にお互いが仕切一枚を間に置いて黙り合つている場合は始終あつたのですが、私はKが静かであればあるほど、彼の存在を忘れるのが普通の状態だつたのですから、その時の私はよほど調子が狂つていたものと見なければなりません。それでいて私はこつちから進んで襖を開ける事ができなかつたのです。一旦いいそびれた私は、また向うから働き掛けられる時機を待つより外に仕方がなかつたのです。

しまいに私は凝としておられなくなりました。無理に凝としていれば、Kの部屋へ飛び込みたくなるのです。私は仕方なしに立つて縁側へ出ました。そこから茶の間へ来て、何という目的もなく、鉄瓶の湯を湯呑に注で一杯呑みました。それから玄関へ出ました。私はわざとKの室を回避するようにして、こんな風に自分を往來の真中に見出したのです。私には無論どこへ行くという的もありません。ただ凝としていられないだけでした。それ

夏目漱石

で方角も何も構わずに、正月の町を、むやみに歩き廻まわったのです。私の頭はいくら歩いてもKの事でいっぱいになっていました。私もKを振り落ふるす気で歩き廻る訳ではなかったのです。むしろ自分から進んで彼の姿を咀嚼そじやくしながらうろついていたのです。

私には第一に彼が解かいしがたい男のように見えました。どうしてあんな事を突然私に打ち明けたのか、またどうして打ち明けないといけないほどに、彼の恋が募つつて来たのか、そうして平生の彼はどこに吹き飛ばされてしまったのか、すべて私には解しにくい問題でした。私は彼の強い事を知っていました。また彼の真面目まじめな事を知っていました。私はこれから私の取るべき態度を決する前に、彼について聞かなければならない多くをもつていると信じました。同時にこれからさき彼を相手にするのが変に気味が悪かったのです。私は夢中に町の中を歩きながら、自分の室に凝じつと坐すわっている彼の容貌ようぼうを始終眼の前に描えがき出しました。しかもいくら私が歩いても彼を動かす事は到底できないのだという声がどこかで聞こえるのです。つまり私には彼が一種の魔物のように思えたからでしょう。私は永久彼に祟たたられたのではなからうかという気さえしました。

私が疲れて宅うちへ帰った時、彼の室は依然として人氣ひとけのないように静かでした。

三十八

「私が家へはいると間もなく俾くるまの音が聞こえました。今のように護謄輪ゴムワのない時分でしたから、がらがらいう厭いやな響ひびきがかなりの距離でも耳に立つのです。車はやがて門前で留まりました。

私が夕飯ゆうめしに呼び出されたのは、それから三十分ばかり経たった後の事でしたが、まだ奥さんとお嬢さんの晴着はれぎが脱ぎ棄すてられたまま、次の室を乱雑いらどに彩いろどっていました。二人は遅くなると私たちに済まないというので、飯の支度に間に合うように、急いで帰って来たのだそうです。しかし奥さんの親切はKと私とに取ってほとんど無効も同じ事でした。私は食卓に坐りながら、言葉を惜しがる人のように、素気そっけない挨拶あいさつばかりしていました。Kは私よりもなお寡言かげんでした。たまに親子連おやこづれで外出した女二人の気分が、また平生へいぜいよりは勝すぐれて晴れやかだったので、我々の態度はなおの事眼に付きます。奥さんは私にどうかしたのかと聞きました。私は少し心持が悪いと答えました。実際私は心持が悪かったのです。すると今度はお嬢さんがKに同じ問いを掛けました。Kは私のように心持が悪いとは答えませ

夏目漱石

ん。ただ口が利きたくないからだといいました。お嬢さんはなぜ口が利きたくないのかと追窮ついぎゅうしました。私はその時ふと重たい瞼まぶたを上げてKの顔を見ました。私にはKが何と答えるだろうかという好奇心があつたのです。Kの唇は例のように少し顫ふるえていました。それが知らない人から見ると、まるで返事に迷っていると思われのです。お嬢さんは笑いながらまた何かむずかしい事を考えているのだろうといいました。Kの顔は心持薄赤くなりました。

その晩私はいつもより早く床とこへ入りました。私が食事の時気分が悪いといったのを気にして、奥さんは十時頃蕎麦湯そばゆを持って来てくれました。しかし私の室へやはもう真暗まっくらでした。奥さんはおやおやといつて、仕切りの襖ふすまを細目に開けました。洋燈ランブの光がKの机ななから斜めにぼんやりと私の室に差し込みました。Kはまだ起きていたものとみえます。奥さんは枕元まくらもとに坐つて、大方風邪おおかたかぜを引いたのだろうから身体からだを暖あつためるがいいといつて、湯呑ゆのみを顔の傍そばへ突き付けるのです。私はやむをえず、どろどろした蕎麦湯を奥さんの見ている前で飲みました。

私は遅くなるまで暗いなかで考えていました。無論一つ問題をぐるぐる廻転かいてんさせるだけで、外ほかに何の効力もなかったのです。私は突然Kが今隣りの室で何をしているだろうと思ひ出しました。私は半ば無意識においと声を掛けました。すると向うでもおいと返事をしました。Kもまだ起きていたのです。私はまだ寝ないのかと襖ふすまごしに聞きました。もう寝るといふ簡単な挨拶あいさつがありました。何をしているのだと私は重ねて問いました。今度はKの答えがありません。その代り五、六分経ったと思う頃に、押入おし入れをがらりと開けて、床とこを延べる音が手取るように聞こえました。私はもう何時なんじかとまた尋ねました。Kは一時二十分だと答えました。やがて洋燈ランペをふつと吹き消す音がして、家中うちじゅうが真暗なうちに、しんと静まりました。

しかし私の眼はその暗いなかでいよいよ冴さえて来るばかりです。私はまた半ば無意識な状態で、おいとKに声を掛けました。Kも以前と同じような調子で、おいと答えました。私は今朝けさ彼から聞いた事について、もつと詳しい話をしたいが、彼の都合はどうだと、とうとうこつちから切り出しました。私は無論襖ふすま越しにそんな談話を交換する気はなかったのですが、Kの返答だけは即坐に得られる事と考えたのです。ところがKは先刻さつぎから二度

夏目漱石

おいと呼ばれて、二度おいと答えたような素直すなおな調子で、今度は応じません。そうだなあ
と低い声で渋っています。私はまたはつと思わせられました。

三十九

「Kの生返事は翌日になつても、その翌日になつても、彼の態度によく現われていました。彼は自分から進んで例の問題に触れようとする気色を決して見せませんでした。もつとも機会もなかったのです。奥さんとお嬢さんが揃つて一日宅を空けでもしなければ、二人はゆっくり落ち付いて、そういう事を話し合う訳にも行かないのですから。私はそれをよく心得ていました。心得ていながら、変にいらいらし出すのです。その結果始めは向うから来るのを待つつもりで、暗に用意をしていた私が、折があつたらこつちで口を切ろうと決心するようになったのです。」

同時に私は黙つて家のものの様子を観察して見ました。しかし奥さんの態度にもお嬢さんの素振にも、別に平生と変つた点はありませんでした。Kの告白以前と告白以後とで、彼らの挙動にこれという差違が生じないならば、彼の告白は単に私だけに限られた告白で、肝心の本人にも、またその監督者たる奥さんにも、まだ通じていないのは慥かでした。そう考えた時私は少し安心しました。それで無理に機会を拵えて、わざとらしく話を持ち出

すよりは、自然の与えてくれるものを取り逃さないようにする方が好かろうと思つて、例の問題にはしばらく手を着けずにそつとしておく事にしました。

こういつてしまえば大変簡単に聞こえますが、そうした心の経過には、潮の満干と同じように、色々の高低があつたのです。私はKの動かない様子を見て、それにさまざまの意味を付け加えました。奥さんとお嬢さんの言語動作を観察して、二人の心がはたしてそこに現われている通りなのだろうかと思つてもみました。そうして人間の胸の中に装置された複雑な器械が、時計の針のように、明瞭に偽りなく、盤上の数字を指し得るものだろうかと思えました。要するに私は同じ事をこうも取り、ああも取りした揚句、漸くここに落ち付いたものと思つて下さい。更にむずかしくいえば、落ち付くなどという言葉は、この際決して使われた義理でなかつたのかも知れません。

その内学校がまた始まりました。私たちは時間の同じ日には連れ立つて宅を出ます。都合がよければ帰る時にもやはりいっしょに帰りました。外部から見たKと私は、何にも前と違つたところがないように親しくなつたのです。けれども腹の中では、各自に各自の事を勝手に考えていたに違いありません。ある日私は突然往来でKに肉薄しました。私が第

一に聞いたのは、この間の自白が私だけに限られているか、または奥さんやお嬢さんにも通じているかの点にあったのです。私のこれから取るべき態度は、この問いに対する彼の答え次第で極めなければならぬと、私は思ったのです。すると彼は外ほかの人にはまだ誰にも打ち明けていないと明言しました。私は事情が自分の推察通りだったので、内心嬉うれしがりました。私はKの私より横着なのをよく知っていました。彼の度胸にも敵かなわないという自覚があったのです。けれども一方ではまた妙に彼を信じていました。学資ようかの事で養家ようかを三年も欺あざむいていた彼ですけれども、彼の信用は私に対して少しも損われていなかったのです。私はそれがためにかえって彼を信じ出したくらいです。だからいくら疑い深い私でも、明白な彼の答えを腹の中で否定する気は起りようがなかったのです。

私はまた彼に向って、彼の恋をどう取り扱うつもりかと尋ねました。それが単なる自白に過ぎないのか、またはその自白について、実際の効果をも収める気なのかと問うたのです。しかるに彼はそこになると、何にも答えません。黙って下を向いて歩き出します。私は彼に隠かくし立てをしてくれるな、すべて思った通りを話してくれと頼みました。彼は何も私に隠す必要はないと判然断言はつきりしました。しかし私の知ろうとする点には、一言いちごんの返事

夏目漱石

も与えないのです。私も往来だからわざわざ立ち留まつて底^{そこ}まで突き留める訳にいきませ
ん。ついそれなりにしてしまいました。

四十

「ある日私は久しぶりに学校の図書館に入りました。私は広い机の片隅で窓から射す光線を半身に受けながら、新着の外国雑誌を、あちらこちらと引つ繰り返して見ていました。

私は担任教師から専攻の学科に関して、次の週までにある事項を調べて来いと命ぜられたのです。しかし私に必要な事柄がなかなか見付からないので、私は二度も三度も雑誌を借り替えなければなりませんでした。最後に私はやっと自分に必要な論文を探し出して、一心にそれを読み出しました。すると突然幅の広い机の向う側から小さな声で私の名を呼ぶものがあります。私はふと眼を上げてそこに立っているKを見ました。Kはその上半身を机の上に折り曲げるようにして、彼の顔を私に近付けました。ご承知の通り図書館では他の人の邪魔になるような大きな声で話をする訳にゆかないのですから、Kのこの所作は誰でもやる普通の事なのですが、私はその時に限って、一種変な心持がしました。

Kは低い声で勉強かと聞きました。私はちよつと調べものがあるのだと答えました。それでもKはまだその顔を私から放しません。同じ低い調子でいつしよに散歩をしないかと

いうのです。私は少し待っていればしてもいいと答えました。彼は待っているといったまま、すぐ私の前の空席に腰をおろしました。すると私は気が散って急に雑誌が読めなくなりました。何だかKの胸に一物いちものがあつて、談判でもしに來られたように思われて仕方がないのです。私はやむをえず読みかけた雑誌を伏せて、立ち上がりうとしました。Kは落着き払つてもう済んだのかと聞きます。私はどうでもいいのだと答えて、雑誌を返すと共に、Kと図書館を出ました。

二人は別に行く所もなかったので、竜岡町たつおかちやうから池の端いけはたへ出て、上野うえのの公園の中へ入りました。その時彼は例の事件について、突然向うから口を切りました。前後の様子を綜合そうごうして考えると、Kはそのために私をわざわざ散歩に引ひつ張り出だしたらしいのです。けれども彼の態度はまだ實際的の方面へ向つてちつとも進んでいませんでした。彼は私に向つて、ただ漠然と、どう思うというのです。どう思うというのは、そうした恋愛の淵ふちに陥おちいつた彼を、どんな眼で私が眺ながめるかという質問なのです。一言いちごんでいうと、彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなのです。そこに私は彼の平生へいぜいと異なる点を確かに認める事ができたと思いました。たびたび繰り返すようですが、彼の天性は他の思ひとわくを憚はばかるほ

夏目漱石

ど弱くでき上つてはいなかったのです。こうと信じたら一人でどんどん進んで行くだけの度胸もあり勇氣もある男なのです。養家事件でその特色を強く胸の裏に彫り付けられた私が、これは様子が違ふと明らかに意識したのは当然の結果なのです。

私がKに向つて、この際何^なんで私の批評が必要なのかと尋ねた時、彼はいつもにも似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが實際恥ずかしいといいました。そうして迷っているから自分で自分が分らなくなつてしまつたので、私に公平な批評を求めるより外に仕方がないといいました。私は隙^すかさず迷うという意味を聞き糺^{ただ}しました。彼は進んでいいか退いていいか、それに迷うのだと説明しました。私はすぐ一步先へ出ました。そうして退こうと思えば退けるのかと彼に聞きました。すると彼の言葉がそこで不意に行き詰りました。彼はただ苦しいといつただけでした。實際彼の表情には苦しうなところがありありと見えていました。もし相手がお嬢さんでなかったならば、私はどんなに彼に都合のいい返事を、その渴^{かわ}き切つた顔の上に慈雨^{じう}の如く注^{そそ}いでやつたか分りません。私はそのくらいの美しい同情をもつて生れて来た人間と自分ながら信じています。しかしその時の私は違つていました。

四十一

「私はちやうど他流試合でもする人のようにKを注意して見ていたのです。私は、私の眼、私の心、私の身体、すべて私という名の付くものを五分の隙間もないように用意して、Kに向つたのです。罪のないKは穴だらけというよりむしろ明け放しと評するのが適當なくらいに無用心でした。私は彼自身の手から、彼の保管している要塞の地図を受け取つて、彼の眼の前でゆつくりそれを眺める事ができたと同じでした。

Kが理想と現実の間に彷徨してふらふらしているのを発見した私は、ただ一打で彼を倒す事ができるだろうという点にばかり眼を着けました。そうしてすぐ彼の虚に付け込んだのです。私は彼に向つて急に嚴肅な改まつた態度を示し出しました。無論策略からですが、その態度に相応するくらいな緊張した気分もあつたのですから、自分に滑稽だの羞恥だのを感じずる余裕はありませんでした。私はまず「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」といい放ちました。これは二人で房州を旅行している際、Kが私に向つて使つた言葉です。私は彼の使つた通りを、彼と同じような口調で、再び彼に投げ返したのです。しかし決して

夏目漱石

復讐ふくしゅうではありません。私は復讐以上に残酷な意味をもつていたという事を自白します。私はその一言いちごんでKの前に横たわる恋の行手ゆくてを塞ふさごうとしたのです。

Kは真宗寺しんしゅうでらに生れた男でした。しかし彼の傾向は中学時代から決して生家の宗旨しゅうしに近いものではなかったのです。教義上の区別をよく知らない私が、こんな事をいう資格に乏しいのは承知していますが、私はただ男女なんによに関係した点についてのみ、そう認めていたのです。Kは昔から精進しやうじんという言葉が好きでした。私はその言葉の中に、禁欲きんよくという意味も籠こもっているのだらうと解釈していました。しかし後で實際を聞いて見ると、それよりもまだ嚴重な意味が含まれているので、私は驚きました。道のためにはすべてを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条なのですから、摂欲せつよくや禁欲きんよくは無論、たとい欲を離れた恋そのものでも道の妨害さまたげになるのです。Kが自活生活をしている時分に、私はよく彼から彼の主張を聞かされたのでした。その頃ころからお嬢さんを思っていた私は、勢いどうしても彼に反対しなければならなかったのです。私が反対すると、彼はいつでも気の毒そうな顔をしました。そこには同情よりも侮蔑ぶべつの方が余計に現われていました。

こういう過去を二人の間に通り抜けて来ているのですから、精神的に向上心のないものは馬鹿だという言葉は、Kに取って痛いに違いなかったのです。しかし前にもいつた通り、私はこの一言で、彼が折角積み上げた過去を蹴散らしたつもりではありません。かえってそれを今まで通り積み重ねて行かせようとしたのです。それが道に達しようが、天に届こうが、私は構いません。私はただKが急に生活の方向を転換して、私の利害と衝突するのを恐れたのです。要するに私の言葉は単なる利己心の発現でした。

「精神的に向上心のないものは、馬鹿だ」

私は二度同じ言葉を繰り返しました。そうして、その言葉がKの上にどう影響するかを見詰めていました。

「馬鹿だ」とやがてKが答えました。「僕は馬鹿だ」

Kはぴたりとそこへ立ち留^どまったまま動きません。彼は地面の上を見詰めています。私は思わずぎよつとしました。私にはKがその刹那^{せつな}に居直^{いなお}り強盗のごとく感ぜられたのです。しかしそれにしては彼の声がいかにも力に乏しいという事に気が付きました。私は彼の

夏目漱石

眼遣めづかいを参考にしたかったのですが、彼は最後まで私の顔を見ないので。そうして、
徐々そろそろとまた歩き出しました。

四十二

「私はKと並んで足を運ばせながら、彼の口を出る次の言葉を腹の中で暗に待ち受けました。あるいは待ち伏せといった方がまだ適當かも知れません。その時の私はたといKを騙し打ちにしても構わないくらいに思っていたのです。しかし私にも教育相当の良心はありますから、もし誰か私の傍へ来て、お前は卑怯だと言私語してくれるものがあつたなら、私はその瞬間に、はっと我に立ち帰ったかも知れません。もしKがその人であつたなら、私はおそらく彼の前に赤面したでしょう。ただKは私を窘めるには余りに正直でした。余りに単純でした。余りに人格が善良だったのです。目のくらんだ私は、そこに敬意を払う事を忘れて、かえってそこに付け込んだのです。そこを利用して彼を打ち倒そうとしたのです。」

Kはしばらくして、私の名を呼んで私の方を見ました。今度は私の方で自然と足を留めました。するとKも留まりました。私はその時やつとKの眼を真向に見る事ができたので

夏目漱石

す。Kは私より背の^{せい}高い男でしたから、私は勢い彼の顔を見上げるようにしなければなりません。私はそうした態度で、狼の^{おおかみ}ごとき心を罪のない羊に向けたのです。

「もうその話は止^やめよう」と彼がいました。彼の眼にも彼の言葉にも変に悲痛なところがありました。私はちよつと挨拶^{あいさつ}ができなかつたのです。するとKは、「止^やめてくれ」と今度は頼むようにいい直しました。私はその時彼に向つて残酷な答を与えたのです。狼^{おおかみ}が隙^{すき}を見て羊の咽喉^{のどぶえ}笛へ食^くひ付くように。

「止^やめてくれて、僕がいい出した事じゃない、もともと君の方から持ち出した話じゃないか。しかし君が止めたければ、止めてもいいが、ただ口の先で止めたつて仕方があるまい。君の心でそれを止めるだけの覚悟がなければ。一体君は君の平生の主張をどうするつもりなのか」

私がこういった時、背^{せい}の高い彼は自然と私の前に萎縮^{いしゆく}して小さくなるような感じがしました。彼はいつも話す通り^{すうじょうじょう}頗る強情な男でしたけれども、一方ではまた人一倍の正直者でしたから、自分の矛盾などをひどく非難される場合には、決して平気でいられない質^{たち}だつたのです。私は彼の様子を見てようやく安心しました。すると彼は卒然^{そつぜん}「覚悟？」と聞き

ました。そうして私がまだ何とも答えない先に「覚悟、——覚悟ならない事もない」と付け加えました。彼の調子は独言のようでした。また夢の中の言葉のようでした。

二人はそれぎり話を切り上げて、小石川の宿の方に足を向けました。割合に風のない暖かな日でしたけれども、何しろ冬の事ですから、公園のなかは淋しいものでした。ことに霜に打たれて蒼味を失った杉の木立の茶褐色が、薄黒い空の中に、梢を並べて聳えているのを振り返って見た時は、寒さが背中へ囁り付いたような心持がしました。我々は夕暮の本郷台を急ぎ足でどしどし通り抜けて、また向うの岡へ上るべく小石川の谷へ下りたのです。私はその頃になつて、ようやく外套の下に体の温味を感じ出したぐらいです。

急いだためでもありませんが、我々は帰り路にはほとんど口を聞きませんでした。宅へ帰つて食卓に向つた時、奥さんはどうして遅くなったのかと尋ねました。私はKに誘われて上野へ行つたと答えました。奥さんはこの寒いのにといつて驚いた様子を見せました。お嬢さんは上野に何があつたのかと聞きたがります。私は何もないが、ただ散歩したのだという返事だけしておきました。平生から無口なKは、いつもよりなお黙っていました。

夏目漱石

奥^のさんが話しかけても、お嬢さんが笑っても、碌^{ろく}な挨拶^{あいさつ}はしませんでした。それから飯^{めし}を呑^のみ込むように掻^かき込んで、私がまだ席を立たないうちに、自分の室^{へや}へ引き取りました。

四十三

「その頃は覚醒^{かくせい}とか新しい生活^{しんごう}とかいう文字^{もんじ}のまだない時分でした。しかしKが古い自分をさりと投げ出して、一意^{いちい}に新しい方角へ走り出さなかったのは、現代人の考えが彼に欠けていたからではないのです。彼には投げ出す事のできないほど尊^{たつと}い過去があつたからです。彼はそのために今日^{こんにち}まで生きて来たといつてもいいくらいなのです。だからKが一直線に愛の目的物に向つて猛進しないといつて、決してその愛の生温^{なまぬる}い事を証拠立てる訳にはゆきません。いくら熾烈^{しれつ}な感情が燃えていても、彼はむやみに動けないのです。前後を忘れるほどの衝動が起る機会を彼に与えない以上、Kはどうしてもちよつと踏み留^{とど}まつて自分の過去を振り返らなければならなかったのです。そうすると過去が指し示^{みち}す路^{じよ}を今まで通り歩かなければならなくなるのです。その上彼には現代人のもたない強情^{かうじやう}と我慢がありまして。私はこの双方の点においてよく彼の心を見抜いていたつもりなのです。

上野^{うえの}から帰った晩は、私に取つて比較的安静な夜^よでした。私はKが室^{へや}へ引き上げたあとを追ひ懸けて、彼の机^{そば}の傍^{そば}に坐^{すわ}り込みました。そうして取り留めもない世間話をわざと彼

夏目漱石

に仕向けました。彼は迷惑そうでした。私の眼には勝利の色が多少輝いていたでしょう、私の声にはたしかに得意の響きがあったのです。私はしばらくKと一つ火鉢に手を翳した後、自分の室に帰りました。外の事にかけては何をしても彼に及ばなかった私も、その時だけは恐るるに足りないという自覚を彼に対してもつていたのです。

私はほどなく穏やかな眠りに落ちました。しかし突然私の名を呼ぶ声で眼を覚ました。見ると、間の襖が二尺ばかり開いて、そこにKの黒い影が立っています。そうして彼の室には宵の通りまだ燈火が点いているのです。急に世界の変った私は、少しの間口を利く事もできずに、ぼうつとして、その光景を眺めていました。

その時Kはもう寝たのかと聞きました。Kはいつでも遅くまで起きている男でした。私は黒い影法師のようなKに向って、何か用かと聞き返しました。Kは大した用でもない、ただもう寝たか、まだ起きているかと思つて、便所へ行つたついでに聞いてみただけだと答えました。Kは洋燈の灯を背中に受けているので、彼の顔色や眼つきは、全く私には分りませんでした。けれども彼の声は不断よりもかえつて落ち付いていたくらいでした。

Kはやがて開けた襖をぴたりと立て切りました。私の室はすぐ元の暗闇くらやみに帰りました。

私はその暗闇より静かな夢を見るべくまた眼を閉じました。私はそれぎり何も知りません。しかし翌朝よくあさになつて、昨夕ゆうべの事を考えてみると、何だか不思議でした。私はことによると、すべてが夢ではないかと思ひました。それで飯めしを食う時、Kに聞きました。Kはたしかに襖を開けて私の名を呼んだといひます。なぜそんな事をしたのかと尋ねると、別に判然はつきりした返事もしません。調子の抜けた頃になつて、近頃は熟睡ができるのかとかえつて向うから私に問うのです。私は何だか変に感じました。

その日ちようど同じ時間に講義の始まる時間割になつていたので、二人はやがていっしょに宅うちを出ました。今朝けさから昨夕の事が氣に掛かつてゐる私は、途中でまたKを追窮ついきゆうしました。けれどもKはやはり私を満足させるような答えをしません。私はあの事件について何か話すつもりではなかつたのかと念を押してみました。Kはそうではないと強い調子でいい切りました。昨日きのう上野で「その話はもう止やめよう」といったではないかと注意するごとくにも聞こえました。Kはそういう点に掛けて鋭い自尊心をもつた男なのです。ふとそ

夏目漱石

ここに氣のついた私は突然彼の用いた「覚悟」という言葉を連想し出しました。すると今までまるで氣にならなかったその二字が妙な力で私の頭を^{おさ}抑え始めたのです。

四十四

「Kの果断に富んだ性格は私によく知れていました。彼のこの事件についてののみ優柔な訳も私にはちゃんと呑み込めていたのです。つまり私は一般を心得た上で、例外の場合をしつかり攫まえたつもりで得意だったのです。ところが「覚悟」という彼の言葉を、頭のかで何遍も咀嚼しているうちに、私の得意はだんだん色を失って、しまいにはぐらぐら揺き始めるようになりました。私はこの場合もあるいは彼にとつて例外でないのかも知れないと思ひ出したのです。すべての疑惑、煩悶、懊惱、を一度に解決する最後の手段を、彼は胸のなかに畳み込んでいたのではなからうかと疑り始めたのです。そうした新しい光で覚悟の二字を眺め返してみた私は、はつと驚きました。その時の私がもしこの驚きをもつて、もう一返彼の口にした覚悟の内容を公平に見廻したらば、まだよかつたかも知れません。悲しい事に私は片眼でした。私はただKがお嬢さんに対して進んで行くという意味にその言葉を解釈しました。果断に富んだ彼の性格が、恋の方面に發揮されるのがすなわち彼の覚悟だろうと一図に思ひ込んでしまったのです。

私は私にも最後の決断が必要だという声を心の耳で聞きました。私はすぐその声に応じて勇気を振り起しました。私はKより先に、しかもKの知らない間に、事を運ばなくてはならないと覚悟を極めました。私は黙って機会を窺っていました。しかし二日経つても三日経つても、私はそれを捕まえる事ができません。私はKのいない時、またお嬢さんの留守な折を待って、奥さんに談判を開こうと考えたのです。しかし片方がいなければ、片方が邪魔をするといった風の日はかり続いて、どうしても「今だ」と思う好都合が出て来てくれないのです。私はいらいました。

一週間の後私はとうとう堪え切れなくなつて仮病を遣いました。奥さんからお嬢さんからも、K自身からも、起きろという催促を受けた私は、生返事をしただけで、十時頃まで蒲団を被つて寝ていました。私はKもお嬢さんもなく、家の中がひっそり静まつた頃を見計らつて寢床を出ました。私の顔を見た奥さんは、すぐどこが悪いかと尋ねました。食物は枕元へ運んでやるから、もつと寝ていたらよかろうと忠告してくれました。からだに異状のない私は、とても寝る気にはなれません。顔を洗つていつもの通り茶の間で飯を食いました。その時奥さんは長火鉢の向側から給仕をしてくれたのです。私は朝飯と

夏目漱石

も午飯ひるめしとも片付かない茶碗ちやわんを手に持ったまま、どんな風に問題を切り出したものだろうか
と、そればかりに屈托くつたくしていたから、外観からは実際気分の好よくない病人らしく見えただ
ろうと思います。

私は飯を終しまって烟草タバコを吹かし出しました。私が立たないので奥さんも火鉢そばの傍そばを離れる
訳にゆきません。下女げじょを呼んで膳ぜんを下げさせた上、鉄瓶てつびんに水を注さしたり、火鉢ふちの縁ふを拭ふ
いたりして、私に調子を合わせています。私は奥さんに特別な用事でもあるのかと問いまし
た。奥さんはいいえと答えましたが、今度は向うでなぜですと聞き返して来ました。私は
実は少し話したい事があるのだといいました。奥さんは何ですかといって、私の顔を見ま
した。奥さんの調子はまるで私の気分にはいり込めないような軽いものでしたから、私は
次に出すべき文句も少し渋りました。

私は仕方なしに言葉の上で、好いい加減にうろつき廻まわった末、Kが近頃ちかごろ何かいいはしな
かったかと奥さんに聞いてみました。奥さんは思おもいも寄らないという風をして、「何を？」
とまた反問して来ました。そうして私の答える前に、「あなたには何かおっしゃったんです
か」とかえって向うで聞くのです。

四十五

「Kから聞かされた打ち明け話を、奥さんに伝える気のなかった私は、「いいえ」といつてしまった後で、すぐ自分の嘘うそを快こころよからず感じました。仕方がないから、別段何も頼まれた覚えはないのだから、Kに関する用件ではないのだといい直しました。奥さんは「そうですか」といつて、後あとを待っています。私はどうしても切り出さなければならなくなりました。私は突然「奥さん、お嬢さんを私に下さい」といいました。奥さんは私の予期してかかったほど驚いた様子も見せませんでした。それでも少時しばらく返事ができなかつたものと見えて、黙もくつて私の顔を眺ながめていました。一度いい出した私は、いくら顔を見られても、それに頓着とんじやくなどはしていません。「下さい、ぜひ下さい」といいました。「私の妻としてぜひ下さい」といいました。奥さんは年を取っているだけに、私よりもずっと落ち付いていました。「上げてもいいが、あんまり急じゃありませんか」と聞くのです。私が「急に貰もらいたいのだ」とすぐ答えたら笑い出しました。そうして「よく考えたのですか」と念を押すのです。私はいい出したのは突然でも、考えたのは突然でないという訳を強い言葉で説明しました。

それからまだ二つ三つの問答がありました。私はそれを忘れてしまいました。男のよ
うに判然はきはきしたところのある奥さんは、普通の女と違ってこんな場合には大変心持よく話の
できる人でした。「宜よござんす、差し上げましょう」といいました。「差し上げるなんて
威張いばった口の利ける境遇ではありません。どうぞ貰あつて下さい。ご存じの通り父親のない
憐あわれな子です」と後あとでは向うから頼みました。

話は簡単でかつ明瞭めいりょうに片付いてしまいました。最初からしまいまでにおそらく十五分と
は掛からなかつたでしょう。奥さんは何の条件も持ち出さなかつたのです。親類に相談する
必要もない、後から断ればそれで沢山だといいました。本人の意嚮いこうさえたしかめるに及ば
ないと明言しました。そんな点になると、学問をした私の方が、かえつて形式に拘泥こうでいする
くらいに思われたのです。親類はとにかく、当人にはあらかじめ話して承諾ちやくだを得るのが順
序らしいと私が注意した時、奥さんは「大丈夫です。本人が不承知の所へ、私があの子をや
るはずがありませんから」といいました。

自分の室へやへ帰った私は、事のあまりに訳もなく進行之のを考えて、かえつて変な気持
になりました。はたして大丈夫なのだろうかという疑念さえ、どこからか頭の底に這はい込

夏目漱石

んで来たくらいです。けれども大体の上において、私の未来の運命は、これで定められたのだという観念が私のすべてを新たにしました。

私は午頃ひるごろまた茶の間へ出掛けて行つて、奥さんに、今朝けさの話をお嬢さんに何時いつ通じてくれるつもりかと尋ねました。奥さんは、自分さえ承知していれば、いつ話しても構わなからうというような事をいうのです。こうなると何だか私よりも相手の方が男みたようなので、私はそれぎり引き込もうとしました。すると奥さんが私を引き留めて、もし早い方が希望ならば、今日でもいい、稽古けいこから帰つて来たら、すぐ話そうというのです。私はそうしてもらう方が都合が好いと答えてまた自分の室に帰りました。しかし黙つて自分の机の前に坐すわつて、二人のこそこそ話を遠くから聞いている私を想像してみると、何だか落ち付いていられないような気もするのです。私はとうとう帽子を被かぶつて表へ出ました。そうしてまた坂の下でお嬢さんに行き合いました。何にも知らないお嬢さんは私を見て驚いたらしかったのです。私が帽子を脱とつて「今お帰り」と尋ねると、向うではもう病氣は癒なおつたのかと不思議そうに聞くのです。私は「ええ癒りました、癒りました」と答えて、ずんずん水道橋すいどうばしの方へ曲つてしまいました。

四十六

「私は猿楽町から神保町の通りへ出て、小川町の方へ曲りました。私がこの界限を歩くのは、いつも古本屋をひやかすのが目的でしたが、その日は手摺れのした書物などを眺める気が、どうしても起らないのです。私は歩きながら絶えず宅の事を考えていました。私には先刻の奥さんの記憶がありました。それからお嬢さんが宅へ帰ってから想像がありました。私はつまりこの二つのもので歩かせられていたようなものです。その上私は時々往來の真中で我知らずと立ち留まりました。そうして今頃は奥さんがお嬢さんにもうあの話をしている時分だろうなどと考えました。また或る時は、もうあの話が済んだ頃だとも思いました。

私はとうとう万世橋を渡って、明神の坂を上がつて、本郷台へ来て、それからまた菊坂を下りて、しまいに小石川の谷へ下りたのです。私の歩いた距離はこの三区に跨がつて、いびつな円を描いたともいわれるでしょうが、私はこの長い散歩の間ほとんどKの事を考えなかったのです。今その時の私を回顧して、なぜだと自分に聞いてみても一向分りませ

ん。ただ不思議に思うだけです。私の心がKを忘れ得るくらい、一方に緊張していたとみればそれまでですが、私の良心がまたそれを許すべきはずはなかったのですから。

Kに対する私の良心が復活したのは、私が宅の格子を開けて、玄関から坐敷へ通る時、すなわち例のごとく彼の室を抜けようとした瞬間でした。彼はいつもの通り机に向って書見をしていました。彼はいつもの通り書物から眼を放して、私を見ました。しかし彼はいつもの通り今帰ったのかとはいいませんでした。彼は「病氣はもう癒いのか、医者へでも行ったのか」と聞きました。私はその刹那に、彼の前に手を突いて、詫まりたくなつたのです。しかも私の受けたその時の衝動は決して弱いものではなかつたのです。もしKと私がたつた二人曠野の真中にでも立つていたならば、私はきつと良心の命令に従つて、その場で彼に謝罪したろうと思います。しかし奥には人がいます。私の自然はすぐそこで食い留められてしまったのです。そうして悲しい事に永久に復活しなかつたのです。

夕飯の時Kと私はまた顔を合せました。何にも知らないKはただ沈んでいただけで、少しも疑い深い眼を私に向けません。何にも知らない奥さんはいつもより嬉しうでした。私だけがすべてを知っていたのです。私は鉛のような飯を食いました。その時お嬢さんは

いつものようにみんなと同じ食卓に並びませんでした。奥さんが催促すると、次の室で只今と答えるだけでした。それをKは不思議そうに聞いていました。しまいにどうしたのかと奥さんに尋ねました。奥さんは大方極りが悪いのだろうといつて、ちよつと私の顔を見ました。Kはなお不思議そうに、なんで極りが悪いのかと追窮しに掛かりました。奥さんは微笑しながらまた私の顔を見るのです。

私は食卓に着いた初めから、奥さんの顔付で、事の成行をほぼ推察していました。しかしKに説明を与えるために、私のいる前で、それを悉く話されては堪らないと考えました。奥さんはまたそのくらの事を平気でする女なのですから、私はひやひやしたのです。幸いにKはまた元の沈黙に帰りました。平生より多少機嫌のよかつた奥さんも、とうとう私の恐れを抱いている点までは話を進めずにしませんでした。私はほつと一息して室へ帰りました。しかし私がこれから先Kに対して取るべき態度は、どうしたものだろうか、私はそれを考えずにはいられませんでした。私は色々の弁護を自分の胸で拵えてみました。けれどもどの弁護もKに対して面と向うには足りませんでした、卑怯な私はついに自分で自分をKに説明するのが厭になったのです。

四十七

「私はそのまま二、三日過ぎました。その二、三日の間Kに対する絶えざる不安が私の胸を重くしていたのはいうまでもありません。私はただでさえ何とかしなければ、彼に済まないと思ったのです。その上奥さんの調子や、お嬢さんの態度が、始終私を突ツつくように刺戟しげきするのですから、私はなお辛つらかったです。どこか男らしい気性を具そなえた奥さんは、いつ私の事を食卓でKに素すぱ抜かないとも限りません。それ以来ことに目立つように思えた私に対するお嬢さんの挙止動作きょしどうさも、Kの心を曇らす不審の種とならないとは断言できません。私は何とかして、私とこの家族との間に成り立つた新しい関係を、Kに知らせなければならぬ位置に立ちました。しかし倫理的に弱点をもっている、自分で自分を認めている私には、それがまた至難の事のように感ぜられたのです。

私は仕方がないから、奥さんに頼んでKに改めてそういつてもらおうかと考えました。無論私のいない時にです。しかしありのままを告げられては、直接と間接の区別があるだけで、面目めんぼくのないのに変りはありません。といって、拵こしらえ事を話してもらおうとすれば、

夏目漱石

奥さんからその理由を詰問きつもんされるに極きまつています。もし奥さんにすべての事情を打ち明けて頼むとすれば、私は好んで自分の弱点を自分の愛人とその母親の前に曝さらけ出さなければなりません。真面目まじめな私には、それが私の未来の信用に関すると思われなかったのです。結婚する前から恋人の信用を失うのは、たとい一分一厘ぶっりんでも、私には堪え切れない不幸のように見えました。

要するに私は正直な路みちを歩くつもりで、つい足を滑らした馬鹿ものでした。もしくは狡猾こうかつな男でした。そうしてそこに氣のついているものは、今のところただ天と私の心だけだったのです。しかし立ち直つて、もう一歩前へ踏み出そうとするには、今滑った事をぜひとも周囲の人に知らなければならない窮境きゆうきやうに陥おちいつたのです。私はあくまで滑った事を隠したがりました。同時に、どうしても前へ出ずにはいられなかったのです。私はこの間に挟はさまってまた立ち竦すくみました。

五、六日経たつた後のち、奥さんは突然私に向つて、Kにあの事を話したかと聞くのです。私はまだ話さないと答えました。するとなぜ話さないのでかと、奥さんが私を詰なめるのです。私

夏目漱石

はこの問いの前に固くなりました。その時奥さんが私を驚かした言葉を、私は今でも忘れずに覚えています。

「道理で妾が話したら変な顔をしていましたよ。あなたもよくないじゃないですか。平生あんなに親しくしている間柄なのに、黙って知らん顔をしているのは」

私はKがその時何かいいはしなかったかと奥さんに聞きました。奥さんは別段何にもいわないと答えました。しかし私は進んでもっと細かい事を尋ねずにはいられませんでした。奥さんは固より何も隠す訳がありません。大した話もないがといいながら、一々Kの様子を語って聞かせてくれました。

奥さんのいうところを綜合して考えてみると、Kはこの最後の打撃を、最も落ち付いた驚きをもって迎えたらしいのです。Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初はそうですかとただ一口いっただけだったそうです。しかし奥さんが、「あなたも喜んで下さい」と述べた時、彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑を洩らしながら、「おめでとうございます」といったまま席を立ったそうです。そうして茶の間の障子を開ける前に、また奥さんを振り返って、「結婚はいつですか」と聞いたそうです。それから「何かお祝い

夏目漱石

を^{すわ}上げたいが、私は金がないから上げる事ができません」といったそうです。奥さんの前に坐^{すわ}っていた私は、その話を聞いて胸^{ふさ}が塞^{ふさ}るような苦しさを覚えました。

四十八

「勘定して見ると奥さんがKに話をしてからもう二日余りになります。その間Kは私に対して少しも以前と異なつた様子を見せなかつたので、私は全くそれに気が付かずでした。彼の超然とした態度はたとい外観だけにせよ、敬服に値すべきだと私は考えました。彼と私を頭の中で並べてみると、彼の方が遙かに立派に見えました。「おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」という感じが私の胸に渦巻いて起りました。私はその時さぞKが輕蔑している事だろうと思つて、一人で顔を赧らめました。しかし今更Kの前に出て、恥を掻かせられるのは、私の自尊心にとつて大いな苦痛でした。

私が進むうか止そうかと考えて、ともかくも翌日まで待とうと決心したのは土曜の晩でした。ところがその晩に、Kは自殺して死んでしまったのです。私は今でもその光景を思い出すと慄然とします。いつも東枕で寝る私が、その晩に限つて、偶然西枕に床を敷いたのも、何かの因縁かも知れません。私は枕元から吹き込む寒い風でふと眼を覚ましたのです。見ると、いつも立て切つてあるKと私の室との仕切の襖が、この間の晩と同じくらい

夏目漱石

開あいています。けれどもこの間のように、Kの黒い姿はそこには立たっていません。私は暗示を受けた人のように、床の上に肱ひじを突ついて起き上がりながら、屹きつとKの室のぞを覗のぞきました。洋燈ランテが暗とく点ともっているのです。それで床も敷ふいてあるのです。しかし掛蒲團かけぶとんは跳返はねかえされたように裾すその方に重なり合あっているのです。そうしてK自身は向うむきに突つ伏ふしているのです。

私はおいといつて声を掛けました。しかし何の答こたえもありません。おいどうかしたのかと私はまたKを呼びました。それでもKの身体からだは些ちつとも動きません。私はすぐ起き上あつて、敷居しきい際ぎわまで行いきました。そこから彼の室の様子を、暗い洋燈ランテの光で見廻みまわしてみました。

その時私の受けた第一の感じは、Kから突然恋の告白を聞かされた時のそれとほぼ同じでした。私の眼は彼の室の中を一目ひとめ見るや否いなや、あたかも硝子ガラスで作つくった義眼のように、動く能力を失ういました。私は棒立ぼうだちに立たち竦すくみました。それが疾風しつぷうのごとく私を通過ししたあとで、私はまたああ失策しまったと思おもいました。もう取り返しが付かないという黒い光が、私の未来を貫ぬいて、一瞬間に私の前に横たわる全生涯ものすじを物凄ものすこく照てらしました。そうして私はがたがた顫ふるえ出したのです。

それでも私はついに私を忘れる事ができませんでした。私はすぐ机の上に置いてある手紙に眼を着けました。それは予期通り私の名宛なあてになっていました。私は夢中で封を切りました。しかし中には私の予期したような事は何にも書いてありませんでした。私は私に取ってどんなに辛い文句つらがその中に書き列つらねてあるだろうと予期したのです。そうして、もしそれが奥さんやお嬢さんの眼に触れたら、どんなに軽蔑されるかも知れないという恐怖おそがあったのです。私はちよつと眼を通しただけで、まず助かったと思いました。(固もとより世間体せけんていの上だけで助かったのですが、その世間体がこの場合、私にとっては非常な重大事件に見えたのです。)

手紙の内容は簡単でした。そうしてむしろ抽象的でした。自分は薄志弱行はくしじやくこうで到底行先ゆくさきの望みがないから、自殺するといふだけなのです。それから今まで私に世話になつた礼が、ごくあつさりとした文句でその後あとに付け加えてありました。世話ついでに死後の片付方かたづけかたも頼みたいという言葉もありました。奥さんに迷惑を掛けて済まんから宜よろしく詫わびをしてくれという句もありました。国元へは私から知らせてもらいたいという依頼もありました。必要な事はみんな一口ひとくちずつ書いてある中にお嬢さんの名前だけはどこにも見えません。私は

夏目漱石

しまいまで読んで、すぐKがわざと回避したのだという事に気が付きました。しかし私のもっとも痛切に感じたのは、最後に墨すみの余りで書き添えたらしく見える、もっと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろうかという意味の文句でした。

私は顫ふるえる手で、手紙を巻き収めて、再び封の中へ入れました。私はわざとそれを皆みなな
の眼に着くように、元の通り机の上に置きました。そうして振り返って、襖ふすまに迸ほとばしっている
血潮を始めて見たのです。

四十九

「私は突然Kの頭を抱かかえるように両手で少し持ち上げました。私はKの死し顔がが一目見たかったのです。しかし俯うつぶ伏しになってゐる彼の顔を、こうして下から覗のぞき込んだ時、私はすぐその手を放してしまいました。慄ぞつとしたばかりではないのです。彼の頭が非常に重たく感ぜられたのです。私は上から今触さわつた冷たい耳と、平生へいぜいに変わらない五分刈ごふがりの濃い髪の毛を少時眺しばうくながめていました。私は少しも泣く気にはなれませんでした。私はただ恐ろしかつたのです。そうしてその恐ろしさは、眼の前の光景が官能しげきを刺激して起る单调な恐ろしさばかりではありません。私は忽然こつぜんと冷たくなつたこの友達によつて暗示された運命の恐ろしさを深く感じたのです。

私は何の分別ふんべつもなくまた私の室へやに帰りました。そうして八畳の中をぐるぐる廻まわり始めました。私の頭は無意味でも当分そうして動いていろと私に命令するのです。私はどうかしなければならぬと思ひました。同時にもうどうする事もできないのだと思ひました。座

夏目漱石

敷の中をぐるぐる廻らなければいられなくなつたのです。檻おりの中へ入れられた熊くまのような態度で。

私は時々奥へ行つて奥さんを起そうという気になります。けれども女にこの恐ろしい有様を見せては悪いという心持がすぐ私を遮さへぎります。奥さんはとにかく、お嬢さんを驚かす事は、とてもできないという強い意志が私を抑おさえつけます。私はまたぐるぐる廻り始めるのです。

私はその間に自分の室の洋燈ランプを点けました。それから時計を折々見ました。その時の時計ほど埒うちの明あかない遅いものはありませんでした。私の起きた時間は、正確に分らないのですけれども、もう夜明よあけに間まもなかつた事だけは明らかです。ぐるぐる廻まわりながら、その夜明を待ち焦こがれた私は、永久に暗い夜が続くのではなからうかという思いに悩まされました。

我々は七時前に起きる習慣でした。学校は八時に始まる事が多いので、それでないと授業に間に合わないのです。下女げじよはその関係で六時頃に起きる訳になっていました。しかしその日私が下女を起しに行つたのはまだ六時前でした。すると奥さんが今日は日曜だと

いつて注意してくれました。奥さんは私の足音で眼を覚ましたのです。私は奥さんに眼が
 覚めてゐるなら、ちよつと私の室^{へや}まで来てくれと頼みました。奥さんは寝巻の上へ不斷着^{ふだんぎ}
 の羽織を引^ひつ掛^かけて、私の後^{あと}に跟^あいて来ました。私は室へはいるや否^{いな}や、今まで開^あいてい
 た仕切りの襖^{ふすま}をすぐ立て切りました。そうして奥さんに飛んだ事ができたと小声で告げま
 した。奥さんは何だと聞きました。私は願^{あじ}で隣の室を指すようにして、「驚いちゃいけませ
 ん」といいました。奥さんは蒼^{あお}い顔をしました。「奥さん、Kは自殺^いしました」と私がまた
 いいました。奥さんはそこに居^い竦^{すく}まったように、私の顔を見て黙^いっていました。その時私
 は突然奥さんの前へ手を突^ついて頭を下げました。「済みません。私が悪^{わる}かったのです。あ
 なたにもお嬢^{お嬢}さんにも済^いまない事になりました」と詫^{あや}まりました。私は奥さんと向^むい合^あう
 まで、そんな言葉を口にする気はまるでなかったのです。しかし奥さんの顔を見た時不意
 に我とも知らずそういつてしまったのです。Kに詫^わまる事のできない私は、こうして奥さ
 んとお嬢^{お嬢}さんに詫^わびなければならなくなつたのだと思^{おも}つて下さい。つまり私の自然^{へいぜい}が
 平生^{へいぜい}の私を出し抜^ぬいてふらふらと懺^{ざんげ}悔^けの口を開^{ひら}かしたのです。奥さんがそんな深い意味に、
 私の言葉を解釈しなかつたのは私にとって幸^{さい}いでした。蒼い顔をしながら、「不慮^{ふりょ}の出来事

石漱目夏

「なら仕方がないじゃありませんか」と慰めるようにいつてくれました。しかしその顔には驚きと怖^{おそ}れとが、彫^ほり付けられたように、硬^{かた}く筋肉を攪^{つか}んでいました。

五十

「私は奥さんに気の毒でしたけれども、また立つて今閉めたばかりの唐紙からかみを開けました。その時Kの洋燈ランプに油が尽きたと見えて、室の中はほとんど真暗まつくらでした。私は引き返して自分の洋燈を手に持ったまま、入口に立つて奥さんを顧みしました。奥さんは私の後ろから隠れるようにして、四畳の中を覗きのぞ込みました。しかしはいろいろとはしません。そこはそのままにしておいて、雨戸を開けてくれと私にいいました。

それから後の奥さんの態度は、さすがに軍人の未亡人びぼうじんだけあつて要領を得ていました。私は医者あしの所へも行きました。また警察へも行きました。しかしみんな奥さんに命令されて行つたのです。奥さんはそうした手続てつづきの済むまで、誰もKの部屋へは入れませんでした。Kは小さなナイフで頸動脈けいどうみやくを切つて一息ひといきに死んでしまったのです。外ほかに創きずらしいものは何にもありませんでした。私が夢のような薄暗い灯ひで見た唐紙の血潮は、彼の頸筋くびすじから一度に迸ほとばしつたものと知れました。私は日中の光で明らかにその迹あとを再び眺めながめました。そうして人間の血の勢いきおいというものの劇はげしいのに驚きました。

奥さんと私はできるだけの手際と工夫を用いて、Kの室を掃除しました。彼の血潮の大部分は、幸い彼の蒲団に吸収されてしまったので、畳はそれほど汚れないで済みましたが、後始末はまだ楽でした。二人は彼の死骸を私の室に入れて、不断の通り寝ている体に横にしました。私はそれから彼の実家へ電報を打ちに出たのです。

私が帰った時は、Kの枕元にもう線香が立てられていました。室へはいるとすぐ仏臭い烟で鼻を撲たれた私は、その烟の中に坐っている女二人を認めました。私がお嬢さんの顔を見たのは、昨夜来この時が始めてでした。お嬢さんは泣いていました。奥さんも眼を赤くしていました。事件が起ってからそれまで泣く事を忘れていた私は、その時ようやく悲しい気分誘われる事ができたのです。私の胸はその悲しさのために、どのくらい寛ろい（くわろい）だか知れません。苦痛と恐怖でぐいと握り締められた私の心に、一滴の潤（うるおい）を与えてくれたものは、その時の悲しさでした。

私は黙って二人の傍に坐っていました。奥さんは私にも線香を上げてやれといいます。私は線香を上げてまた黙って坐っていました。お嬢さんは私には何ともいいません。たまに奥さんと一口二口言葉（ひとくちふたぐち）を換（か）わす事がありました。それは当座の用事についてのみでし

夏目漱石

た。お嬢さんにはKの生前について語るほどの余裕がまだ出て来なかったのです。私はそれでも昨夜の物凄^{ものすご}い有様を見せずに済んでまだよかったと心のうちで思いました。若い美しい人に恐ろしいものを見せると、折角^{せつかく}の美しさが、そのために破壊されてしまいそうで私は怖^{こわ}かったです。私の恐ろしさが私の髪の毛の末端まで来た時ですら、私はその考えを度外に置いて行動する事はできませんでした。私には綺麗^{きれい}な花を罪もないのに妄^{みだ}りに鞭^{むち}うつと同じような不快がそのうちに籠^{こも}っていたのです。

国元からKの父と兄が出て来た時、私はKの遺骨をどこへ埋^うめるかについて自分の意見を述べました。私は彼の生前に雑司^{ぞうしがや}ヶ谷近辺をよくいつしよに散歩した事があります。Kにはそこが大変気に入っていたのです。それで私は笑談^{しょうだんはんぶん}半分に、そんなに好きなら死んだらここへ埋めてやろうと約束した覚えがあるのです。私も今その約束通りKを雑司ヶ谷へ葬^{ほうむ}ったところで、どのくらいの功德^{くどく}になるものかとは思いました。けれども私は私の生き残っている限り、Kの墓の前に跪^{ひざまず}いて月々私の懺悔^{ざんげ}を新たにしたかったのです。今まで構い付かなかったKを、私が万事世話をして来たという義理もあつたのでしよう、Kの父も兄も私のいう事を聞いてくれました。

五十一

「Kの葬式の帰り路に、私はその友人の一人から、Kがどうして自殺したのだろうという質問を受けました。事件があつて以来私はもう何度となくこの質問で苦しめられていたのです。奥さんもお嬢さんも、国から出て来たKの父兄も、通知を出した知り合いも、彼とは何の縁故もない新聞記者までも、必ず同様の質問を私に掛けない事はなかつたのです。私の良心はそのたびにちくちく刺されるように痛みました。そうして私はこの質問の裏に、早くお前が殺したと白状してしまえという声を聞いたのです。」

私の答えは誰に対しても同じでした。私はただ彼の私宛で書き残した手紙を繰り返すだけで、外に一口も付け加える事はしませんでした。葬式の帰りに同じ問いを掛けて、同じ答えを得たKの友人は、懷から一枚の新聞を出して私に見せました。私は歩きながらその友人によって指し示された箇所を読みました。それにはKが父兄から勘当された結果厭世的な考えを起して自殺したと書いてあるのです。私は何にもいわずに、その新聞を畳んで友人の手に帰しました。友人はこの外にもKが気が狂つて自殺したと書いた新聞があ

夏目漱石

るといって教えてくれました。忙しいので、ほとんど新聞を読む暇がなかった私は、まるでそうした方面の知識を欠いていましたが、腹の中では始終気にかかつていたところでした。私は何よりも宅^{うち}のものの迷惑になるような記事の出るのを恐れたのです。ことに名前だけにせよお嬢さんが引合いに出たら堪^{たま}らないと思つていたのです。私はその友人に外^{ほか}に何とか書いたのはいないかと聞きました。友人は自分の眼に着いたのは、ただその二種ぎりだと答えました。

私が今おる家へ引^ひつ越^こしたのはそれから間もなくでした。奥さんもお嬢さんも前の所にいるのを厭^{いや}がりますし、私もその夜^よの記憶を毎晩繰り返すのが苦痛だったので、相談の上移る事に極^きめたのです。

移つて二カ月ほどしてから私は無事に大学を卒業しました。卒業して半年も経^たたないうちに、私はとうとうお嬢さんと結婚しました。外側から見れば、万事が予期通りに運んだのですから、目^め出^で度^{たい}といわなければなりません。奥さんもお嬢さんもちに幸福らしく見えました。私も幸福だったのです。けれども私の幸福には黒い影が随^ついていました。私はこの幸福が最後に私を悲しい運命に連れて行く導火線ではなかうかと思ひました。

結婚した時お嬢さんが、——もうお嬢さんではありませんから、妻さいといいます。——妻が、何を思い出したのか、二人でKの墓はかまい参りをしようといい出しました。私は意味もなくただぎよつとしました。どうしてそんな事を急に思い立ったのかと聞きました。妻は二人揃そろつてお参りをしたら、Kがさぞ喜ぶだろうというのです。私は何事も知らない妻の顔をしげじげ眺ながめていましたが、妻からなぜそんな顔をするのかと問われて始めて気が付きました。私は妻の望み通り二人連れ立たつて雑司ぞうしヶ谷がやへ行きました。私は新しいKの墓へ水をかけて洗うつてやりました。妻はその前へ線香と花を立てました。二人は頭を下げて、合掌しました。妻は定めて私といっしょになつた顛末てんまつを述べてKに喜んでもらうつもりでしたらう。私は腹の中で、ただ自分が悪なかつたと繰り返すだけでした。

その時妻はKの墓を撫なでてみて立派だと評していました。その墓は大したものではないのですけれども、私が自分で石屋へ行みつて見立てたりした因縁いんねんがあるので、妻はとくにそういういたかつたのでしょうか。私はその新しい墓と、新しい私の妻と、それから地面の下に埋うずめられたKの新しい白骨うずを思い比べて、運命の冷罵れいばを感じずにはいられなかつたのです。私はそれ以後決して妻といっしょにKの墓参りをしない事にしました。

五十二

「私の亡友に対するこうした感じはいつまでも続きました。実は私も初めからそれを恐れていたのです。年来の希望であった結婚すら、不安のうちに式を挙げたといえはいえない事もないでしょう。しかし自分で自分の先が見えない人間の事ですから、ことによるとあ
るいはこれが私の心持を一転して新しい生涯に入る端緒になるかも知れないと思つたの
です。ところがいいよい夫として朝夕妻と顔を合せてみると、私の果敢ない希望は手厳し
い現実のために脆くも破壊されてしまいました。私は妻と顔を合せているうちに、卒然K
に脅かされるのです。つまり妻が中間に立つて、Kと私をどこまでも結び付けて離さない
ようにするのです。妻のどこにも不足を感じない私は、ただこの一点において彼女を遠ざ
けたがりました。すると女の胸にはすぐそれが映ります。映るけれども、理由は解らない
のです。私は時々妻からなぜそんなに考えているのだとか、何か気に入らない事があるの
だろうとかいう詰問を受けました。笑つて済ませる時はそれで差支えないのですが、時に
よると、妻の癪も高じて来ます。しまいには「あなたは私を嫌つていらつしやるんでしよ

夏目漱石

う」とか、「何でも私に隠していらつしやる事があるに違いない」とかいう怨言えんげんも聞かなくてはなりません。私はそのたびに苦しみました。

私は一層いっそう思い切つて、ありのままを妻に打ち明けようとした事が何度もあります。しかしぎという間際になると自分以外のある力が不意に来て私を抑おさえ付けるのです。私を理解してくれるあなたの事だから、説明する必要もあるまいと思いますが、話すべき筋だから話しておきます。その時分の私は妻に対して己おのれを飾る気はまるでなかったのです。もし私が亡友に対すると同じような善良な心で、妻の前に懺悔ざんげの言葉を並べたなら、妻は嬉うれし涙をこぼしても私の罪を許してくれたに違いないのです。それをあえてしない私に利害の打算があるはずはありません。私はただ妻の記憶に暗黒な一点を印いんするに忍びなかったから打ち明けなかったのです。純白なものに一雫ひとしずくの印インキ気でも容赦ようしやなく振り掛けるのは、私にとって大変な苦痛だったのだと解釈して下さい。

一年経たつてもKを忘れる事のできなかった私の心は常に不安でした。私はこの不安を駆逐くちくするために書物に溺おぼれようと力つとめました。私は猛烈な勢いきおいをもつて勉強し始めたのです。そうしてその結果を世の中に公おおやけにする日の来るのを待ちました。けれども無理に目的を拵こしら

夏目漱石

えて、無理にその目的の達せられる日を待つのは嘘うそですから不愉快です。私はどうしても書物のなかに心を埋うずめていられなくなりました。私はまた腕組みをして世の中を眺ながめだしたのです。

妻はそれを今日こんにちに困らないから心に弛たるみが出るのだと観察していたようでした。妻の家にも親子二人ぐらいは坐すわつていてどうか暮して行ける財産がある上に、私も職業を求めないで差支さしつかえのない境遇にいたのですから、そう思われるのもつとめます。私も幾分かスポイルされた気味がありましょう。しかし私の動かなくなつた原因の主なもの、全くそこにはなかったのです。叔父おじに欺あざむかれた当時の私は、他の頼ひとみにならない事をつくづくと感じたには相違ありませんが、他ひとを悪く取るだけあつて、自分はまだ確かな気がしていました。世間はどうかろうともこの己おれは立派な人間だという信念がどこかにあつたのです。それがKのために美事みじこに破壊されてしまつて、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。他ひとに愛想あいそを尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなつたのです。

五十三

「書物の中に自分を生埋めにする事のできなかつた私は、酒に魂を浸して、己れを忘れようと試みた時期もあります。私は酒が好きだとはいひません。けれども飲めば飲める質でしたから、ただ量を頼みに心を盛り潰そうと力めたのです。この浅薄な方便はしばらくするうちに私をなお厭世的にしました。私は爛醉の真最中にふと自分の位置に気が付くのです。自分はわざとこんな真似をして己れを偽っている愚物だという事に気が付くのです。すると身振いと共に眼も心も醒めてしまひます。時にはいくら飲んでもこうした仮装状態にさえ入り込めないでむやみに沈んで行く場合も出て来ます。その上技巧で愉快を買った後には、きつと沈鬱な反動があるのです。私は自分の最も愛している妻とその母親に、いつでもそこを見せなければならなかつたのです。しかも彼らは彼らに自然な立場から私を解釈して掛ります。

妻の母は時々氣拙い事を妻にいうようでした。それを妻は私に隠していました。しかし自分は自分で、単独に私を責めなければ気が済まなかつたらしいのです。責めるといつて

も、決して強い言葉ではありません。妻から何かいわれたために、私が激した例はほとんどなかったくらいですから。妻はたびたびどこが気に入らないのか遠慮なくいつてくれと頼みました。それから私の未来のために酒を止めろと忠告しました。ある時は泣いて「あなたはこの頃人間が違った」といいました。それだけならまだいいのですけれども、「Kさんが生きていたら、あなたもそんなにはならなかったでしょう」というのです。私はそうかも知れないと答えた事がありました。私の答えた意味と、妻の了解した意味とは全く違っていたのですから、私は心のうちで悲しかったのです。それでも私は妻に何事も説明する気にはなれませんでした。

私は時々妻に詫まりました。それは多く酒に酔って遅く帰った翌日の朝でした。妻は笑いました。あるいは黙っていました。たまにぼろぼろと涙を落す事もありました。私はどっちにしても自分が不愉快で堪らなかったのです。だから私の妻に詫まるのは、自分に詫まるのとつまり同じ事になるのです。私はしまいに酒を止めました。妻の忠告で止めたというより、自分で厭になったから止めたといった方が適当でしょう。

酒は止めたけれども、何もする気にはなりません。仕方がないから書物を読みます。しかし読めば読んだなりで、打ち遣^うつて置きます。私は妻から何のために勉強するのかという質問をたびたび受けました。私はただ苦笑していました。しかし腹の底では、世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないのかと思うと、悲しかったのです。理解させる手段があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思うとますます悲しかったのです。私は寂寞^{せきばく}でした。どこからも切り離されて世の中にたった一人住んでいるような気のした事もよくありました。

同時に私はKの死因を繰り返し繰り返し考えたのです。その当座は頭がただ恋の一字で支配されていたせいでもありませんが、私の観察はむしろ簡単でしかも直線的でした。Kは正^{まさ}しく失恋のために死んだものとする^き極めてしまったのです。しかし段々落ち付いた気分で、同じ現象に向ってみると、そう容易^{たやす}くは解決が着かないように思われて来ました。現実と理想の衝突、——それでもまだ不充分でした。私はしまいにKが私のようにたった一人で淋^{さび}しくて仕方がなくなつた結果、急に所決^{しよけつ}したのではなからうかと疑い出しまし

夏目漱石
た。そうしてまた慄ぞつとしたのです。私もKの歩いた路みちを、Kと同じように辿たどっているのだ
という予覚よかくが、折々風のように私の胸を横過よこぎり始めたからです。

五十四

「その内妻さいの母が病氣になりました。医者に見せると到底癒とうていなおらないという診断でした。私は力の及ぶかぎり懇切に看護をしてやりました。これは病人自身のためでもありますし、また愛する妻のためでもありました。もつと大きな意味からいうと、ついに人間のためでした。私はそれまでも何かしたくつて堪たまらなかったのだけれども、何もする事ができないのでやむをえず懷手ふところをしていたに違いありません。世間と切り離された私が、始めて自分から手を出して、幾分でも善いい事をしたという自覚を得たのはこの時でした。私は罪滅つみほろぼしとでも名づけなければならぬ、一種の氣分に支配されていたのです。

母は死にました。私と妻さいはたった二人ぎりになりました。妻は私に向つて、これから世の中で頼りにするものは一人しかなくなつたといいました。自分自身さえ頼りにする事のできない私は、妻の顔を見て思わず涙ぐみました。そうして妻を不幸な女だと思ひました。また不幸な女だと口へ出してもいいました。妻はなぜだと聞きます。妻には私の意味が解わからないのです。私もそれを説明してやる事ができないのです。妻は泣きました。私が不ふ断だん

夏目漱石

からひねくれた考えで彼女を観察しているために、そんな事もいうようになるのだと恨み
ました。

母の亡くなった後、私はできるだけ妻を親切に取り扱ってやりました。ただ、当人を愛
していたからばかりではありません。私の親切には箇人を離れてもつと広い背景があつた
ようです。ちょうど妻の母の看護をしたと同じ意味で、私の心は動いたらしいのです。妻
は満足らしく見えました。けれどもその満足のうちには、私を理解し得ないために起るぼ
んやりした稀薄な点がどこかに含まれているようでした。しかし妻が私を理解し得たにし
たとところで、この物足りなさは増すとも減る気遣いはなかつたのです。女には大きな人道
の立場から来る愛情よりも、多少義理をはずれても自分だけに集注される親切を嬉しがる
性質が、男よりも強いように思われますから。

妻はある時、男の心と女の心とはどうしてもぴたりと一つになれないものだろうかとい
いました。私はただ若い時ならなれるだろうと曖昧な返事をしておきました。妻は自分の
過去を振り返って眺めているようでしたが、やがて微かな溜息を洩らしました。

私の胸にはその時分から時々恐ろしい影が閃ひらめきました。初めはそれが偶然外そとから襲うちつて来るのです。私は驚きました。私はぞつとしました。しかししばらくしている中に、私の心がその物凄ものすごい閃きに応ずるようになりました。しまいには外から来ないでも、自分の胸の底に生れた時から潜ひそんでいるもののごとくに思われ出して来たのです。私はそうした心持になるたびに、自分の頭がどうかしたのではなからうかと疑うたぐってみました。けれども私は医者にも誰にも診みてもらう気にはなりませんでした。

私はただ人間の罪というものを深く感じたのです。その感じが私をKの墓へ毎月行かせます。その感じが私に妻の母の看護をさせます。そうしてその感じが妻に優しくしてやれと私に命じます。私はその感じのために、知らない路傍ろぼうの人から鞭むちうたれたいとまで思つた事もあります、こうした階段を段々経過して行くうちに、人に鞭うたれるよりも、自分で自分を鞭うつべきだという気になります。自分で自分を鞭うつよりも、自分で自分を殺すべきだという考えが起ります。私は仕方がないから、死んだ気で生きて行こうと決心しました。

夏目漱石

私がそう決心してから今日^{こんにち}まで何年になるでしょう。私と妻とは元の通り仲好く暮して来ました。私と妻とは決して不幸ではありません、幸福でした。しかし私のもっている一点、私に取っては容易ならんこの一点が、妻には常に暗黒に見えたりしいのです。それと思うと、私は妻^{さい}に対して非常に気の毒な気がします。

五十五

「死んだつもりで生きて行こうと決心した私の心は、時々外界の刺激で躍り上がりました。しかし私がどの方面かへ切つて出ようと思ひ立つや否や、恐ろしい力がどこからか出て来て、私の心をぐいと握り締めて少しも動けないようにするのです。そうしてその力が私にお前は何をする資格もない男だと抑え付けるようにいつて聞かせます。すると私はその一言で直ぐたりと萎れてしまいます。しばらくしてまた立ち上がろうとすると、また締め付けられます。私は齒を食いしばつて、何で他の邪魔をするのかと怒鳴り付けます。不可思議な力は冷やかな声で笑います。自分でよく知っているくせにといいます。私はまたぐたりとなります。

波瀾も曲折もない單調な生活を續けて来た私の内面には、常にこうした苦しい戦争があつたものと思つて下さい。妻が見て齒痒がる前に、私自身は何層倍齒痒い思ひを重ねて来たか知れないくらいです。私がこの牢屋の中に凝としてゐる事がどうしてもできなくなつた時、またその牢屋をどうしても突き破る事ができなくなつた時、必竟私にとって一

夏目漱石

番楽な努力で遂行^{すいこう}できるものは自殺^{じそく}より外^{ほか}にないと私は感ずるようになったのです。あなたは何ぜと云って眼を睜^{みは}るかも知れませんが、いつも私の心を握り締めに来るその不可思議な恐ろしい力は、私の活動をあらゆる方面で食い留めながら、死の道だけを自由に私のために開けておくのです。動かずにいればともかくも、少しでも動く以上は、その道を歩いて進まなければ私には進みようがなくなつたのです。

私は今日^{こんにち}に至るまですでに二、三度運命の導いて行く最も楽な方向へ進もうとした事があります。しかし私はいつでも妻に心を惹^ひかされました。そうしてその妻をいつしよに連れて行く勇氣は無論ないのです。妻にすべてを打ち明ける事のできないくらいな私ですから、自分の運命の犠牲^{ぎせい}として、妻の天寿^{てんじゅ}を奪うなどという手荒^{てあら}な所作^{しよさ}は、考えてさえ恐ろしかったのです。私に私の宿命がある通り、妻には妻の廻^{まわ}り合せがあります、二人を一束^{ひとたば}にして火に燻^くべるのは、無理という点から見ても、痛ましい極端としか私には思えませんでした。

同時に私だけがなくなつた後^{あと}の妻を想像してみるといかにも不憫^{ふびん}でした。母の死んだ時、これから世の中で頼りにするものは私より外になくなつたといった彼女の述懐^{じゅつかい}を、私

夏目漱石

は腸に沁み込むように記憶させられていたのです。私はいつも躊躇しました。妻の顔を見て、止してよかったと思う事もありました。そうしてまた凝と竦んでしまいます。そうして妻から時々物足りなさそうな眼で眺められるのです。

記憶して下さい。私はこんな風にして生きて来たのです。始めてあなたに鎌倉で会った時も、あなたといっしょに郊外を散歩した時も、私の気分が大した変りはなかったのです。私の後ろにはいつでも黒い影が括ッ付いていました。私は妻のために、命を引きずって世の中を歩いていたようなものです。あなたが卒業して国へ帰る時も同じ事でした。九月になつたらまたあなたに会おうと約束した私は、嘘を吐いたのではありません。全く会う気でいたのです。秋が去って、冬が来て、その冬が尽きても、きつと会うつもりでいたのです。

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。その時私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終つたような気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、その後に残っているのは必竟時勢遅れだという感じが烈しく私の胸を打ちました。私は

夏目漱石

突然私に、では殉死じゅんしでもしたらよかろうと調戲からかいきました。明白あからさまに妻にそういいました。妻は笑って取り合いませんでしたが、何を思ったものか、

五十六

「私は殉死という言葉をはほとんど忘れていました。平生^{へいぜい}使う必要のない字だから、記憶の底に沈んだまま、腐れかけていたものと見えます。妻の笑談^{しょうだん}を聞いて始めてそれを思い出した時、私は妻に向つてもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死するつもりだと答えました。私の答えも無論笑談に過ぎなかつたのですが、私はその時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たような心持がしたのです。

それから約一カ月ほど経^たちました。御大葬^{ごたいそう}の夜私はいつもの通り書齋^{すわ}に坐つて、相図^{あいず}の号砲^{ごうほう}を聞きました。私にはそれが明治が永久に去つた報知のごとく聞こえました。後で考へると、それが乃木大将^{のぎたいしょう}の永久に去つた報知にもなつていたのです。私は号外を手にして、思わず妻に殉死だ殉死だといいました。

私は新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行つたものを読みました。西南戦争^{せいなんせんそう}の時敵に旗を奪^とられて以来、申し訳のために死のう死のうと思つて、つい今日^{こんにち}まで生きていたという意味の句を見た時、私は思わず指を折つて、乃木さんが死ぬ覚悟をしながら生きながら

夏目漱石

えて来た年月としつきを勘定して見ました。西南戦争は明治十年ですから、明治四十五年までには三十五年の距離があります。乃木さんはこの三十五年の間あいだ死のう死のうと思つて、死ぬ機会を待つていたらしいのです。私はそういう人にとつて、生きていた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那いっせつなが苦しいか、どっちが苦しいだろうと考えました。

それから二、三日して、私はとうとう自殺する決心をしたのです。私に乃木さんの死んだ理由がよく解わからないように、あなたにも私の自殺する訳が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もしそうだとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方がありません。あるいは箇人こじんのもつて生れた性格の相違といった方が確たしかかも知れません。私は私のできる限りこの不可思議な私というものを、あなたに解らせるように、今までの叙述おので己おのれを尽つくしたつもりです。

私は妻を残さいして行きます。私がいなくなつても妻に衣食住の心配がないのは仕合せしあわせです。私は妻に残酷さきようふな驚怖きょうふを与える事を好みません。私は妻に血の色を見せないで死ぬつもりです。妻の知らない間まに、こつそりこの世からいなくなるようになります。私は死んだ後で、妻から頓死とんししたと思われたいのです。気が狂つたと思われても満足なのです。

私が死のうと決心してから、もう十日以上になりますが、その大部分はあなたにこの長い自叙伝の一節を書き残すために使用されたものと思つて下さい。始めはあなたに会つて話をする気でいたのですが、書いてみると、かえつてその方が自分を判然描き出す事ができたような心持がして嬉しいのです。私は酔興に書くものではありません。私を生んだ私の過去は、人間の経験の一部分として、私より外に誰も語り得るものはないのですから、それを偽りなく書き残して置く私の努力は、人間を知る上において、あなたにとつても、外の人にとつても、徒勞ではなかうと思ひます。渡辺華山は邯鄲という画を描くために、死期を一週間繰り延べたという話をつい先達て聞きました。他から見たら余計な事のようにも解釈できましようが、当人にはまた本人相応の要求が心の中にあるのだからやむをえないともいわれるでしょう。私の努力も単にあなたに対する約束を果たすためばかりではありません。半ば以上は自分自身の要求に動かされた結果なのです。

しかし私は今その要求を果たしました。もう何にもする事はありません。この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでゐるでしょう。妻は十日ばかり前から市ヶ谷の叔母の所へ行きました。叔母が病気で手が足りないとい

夏目漱石

いうから私が勧めてやったのです。私は妻の留守の間に、この長いものの大部分を書きました。時々妻が帰って来ると、私はすぐそれを隠しました。

私は私の過去を善悪ともに他の参考^{ひと}に供するつもりです。しかし妻だけはたった一人の例外だと承知して下さい。私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己^{おの}れの過去に対してもつ記憶を、なるべく純白に保存しておいてやりたいのが私の唯一^{ゆい}の希望なのですから、私が死んだ後^{あと}でも、妻が生きている以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、すべてを腹の中にしまっておいて下さい。」



こころ下 - 先生と遺書 -
夏目漱石 著

[[青空文庫図書カード](#)]

底本：「こころ」集英社文庫、集英社

1991（平成 3）年 2 月 25 日第 1 刷

1995（平成 7）年 6 月 14 日第 10 刷

初出：「朝日新聞」

1914（大正 3）年 4 月 20 日～8 月 11 日

※ 誤植の修正は「漱石全集」岩波書店を参照しました。

※ 底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

入力：j.utiyama

校正：伊藤時也

1999 年 7 月 31 日公開

2004 年 2 月 6 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.2(合成) + egword universal 2.0.2(本文、奥付)
+ Omni Graffle Professional 5.2.1(表紙)

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers 1 + ヒラギノ明朝 Pro W3